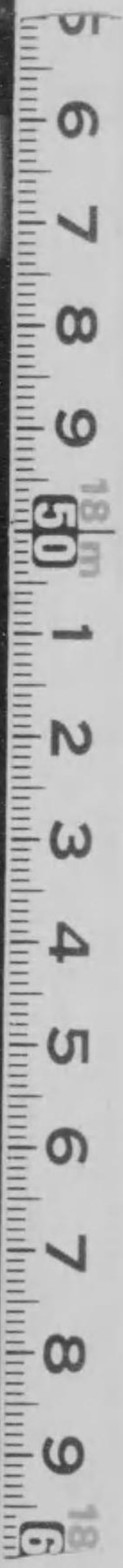


252.5
98



始



6. 4. 6

兒童の洋服



吉田小豊著

兒童保護研究會



252.5-98

兒童の洋服目次

緒言

第一章 總論

第一節 ミシンの使用法

第二節 縫ひ方

第三節 其他の諸注意

第四節 寸法の取り方(女兒)

第五節 原型の拵らへ方

第二章 嬰兒服一揃

第一節 上着

目次

一

五

五

六

八

一二

一三

一九

一九

第二節 下着……………二六

第三節 外衣套……………三〇

第四節 襪 襪……………三五

第五節 襪 襪カバー……………三六

第六節 おくるみ……………三九

第七節 沓 足袋……………四〇

第八節 涎 掛……………四二

第九節 帽 子……………四三

第三章 第二號嬰兒服……………四七

第四章 一三歲幼兒服……………五七

第一節 第一號……………五七

第二節 第二號……………六三

第五章 四五歲女兒服……………六九

第一節 第一號及び第一號參考……………六九

第二節 第二號……………七五

第六章 七八歳から十二三歳迄の女兒服……………八〇

第一節 第一號及び第二號……………八〇

第二節 第三號……………八六

第三節 第四號水兵型女兒服……………九一

第七章 女兒用下着……………一〇一

第一節 用 布……………一〇四

第二節 ルロース……………一〇四

第一寸法の取り方 第二割出し方 (附ルロス標準寸法) 第三裁方 第四縫ひ方
 第三節 ボデース(第一裁方 第二縫方).....一三三
 第四節 ベテコート(第一裁方 第二縫方).....一三六
 第五節 コンビネーション(第一裁方 第二縫方).....一三九
 第六節 下着類に就ての注意.....一四一
 第七節 拾物について.....一四三

第八章 男児服.....一四四

第一節 寸法の取り方(男児標準寸法).....一四五
 第二節 原型の拵らへ方.....一四六
 第一ズボンの原型の拵らへ方 第二原型上着の拵らへ方 第三原型袖の拵らへ方
 第三節 男児服第一號.....一三四

第九章 洋服附屬品

第一ズボンの裁方 第二上着の裁方 第三ズボンの縫方 第四上着の縫方
 第四節 男児服第二號.....一四四
 第一ズボンの裁方 第二上着の裁方 第三ズボンの縫方 第四上着の縫方
 第五節 男児服第三號.....一四九
 第六節 男児服第四號.....一五二
 第七節 六七歳用男児服.....一五五
 第八節 シャツブラウス.....一六四

第一節 女児用帽子.....一七〇
 第一二三歳用 第二四五歳用(夏) 第三四五歳用(夏) 第四七八歳以上女児用
 第五帽子に就て.....一七〇

目次

第二節 エブロン……………一七八

第一一三歳用(食事前掛) 第二三三歳用 第三四五歳用(第一號)
 第四同上(第二號) 第五七八歳用 第六十歳前後用

第十章 家庭で出来る洋服の洗濯法及び縫返し法……………一九一

第十一章 洋服の保存法及び其他……………一九八

兒童の洋服

關東高等女學校教授 吉田小豊



緒言

子供の洋服をつくるには平常着であつても外出着であつても、第一に其子供の皮膚の色や體格の如何に應じて、布地の色や地質や恰好等を選択する事が必要である。假令流行だからと云つても無闇に其流行を追ふのみでは甚だ面白くない。矢張り其人に似合ふか似合はないかと云ふ事を第一の條件として拵らへなければならぬ。一體に日本人は、流行となると總ての人達が其流行を追ふといふ風がある。例へば一時ボタン色の流行した時などは、誰も彼も争ふてボタン色を

喜び用ふると云ふ有様であつたが、此の色などは特に其人に依つて似合ひ不似合ひが判然するものであるから、これを選ぶには餘程注意深くしなないと不可ない。それで、どちらかと云ふと日本人には、一般に藍系統の黒っぽい物の方が良く似合ふ様に思はれる。中でも誰にもうつる色合は、白、紺系統、茶系統、鼠等であるが、特に鼠色などは最も嫌味のない上品なものである。

色の選擇と同時に其配合が又重要な點で、これを實際に適用するには仲々苦心しなければならぬ處である。それで折角選び出した似合ひの色が、配色上の一寸した不注意から全く打ち壊しとなる場合も少なくないものであるから、是にも注意が何より肝腎である。尤も同色の飾布を用ふるのであれば一番無難であるが、異色を配する場合には一寸見た最初の「感じ」に依つて選び出す事が最も宜しい。具體的に云つてみると、紺地と紅地などは大變に良い配合である。其外に白と黒、白地と紺、海老茶と白又は黒、以上のものは何れも嫌味の無い感じの良い配色であるが、殊に白色は大抵の色と配合が宜しいものである。又、澤山の色を使つて居る稿物などの場合は仲々むづかしいものであるが、大體其布の中で最も目立つ色の無地を選んで用ふると非常に引立つ

て見られる。而も其色の薄目なものよりは濃目の方が一層よろしい。

恰好も色と同じ事で、只だ流行によつてのみつくるのでは或る人には好く似合つても、或る人には誠に不釣合に見られる場合も少なくないのであるから、餘程注意して選んで頂きたい。總じて日本人には洋服も和服の心持ちで大き目に拵らへる傾きがある様に思はれるが、洋服はどうしても身體にしつくりして居ないと不恰好なものである。此點などは日本人として特に注意を要する處であらうと思はれる。又近頃の流行として一般に非常に裾短かものが歡迎され、甚だしきに至つては太褌を露はして居る様なものさへ見受けられるが、細い脚ならばまだしも、餘り短かくなつては却つて見苦しい。それも矢張り着る人に似合ふ事を第一に心して拵らへねばならない概して洋服の丈は、生後六七ヶ月間は恰度和服の産着を着せたと同じ心持で割合に長く、九ヶ月から十ヶ月位になつては膝邊まで裾を裁ち落して短かくする。それから二年三年となるに連れて段々に短かく、六七歳頃には膝頭までとなるが、八九歳から十一二歳頃になるとそれよりも一寸位短かく、これが短かい頂上となるのである。此の年齢の間が一番短かい物を着

る時であるし又着て最も見好い時であるが、これからは年を追ふて次第に少しづつ長くするのである。

第一章 總論

第一節 ミシンの使用法

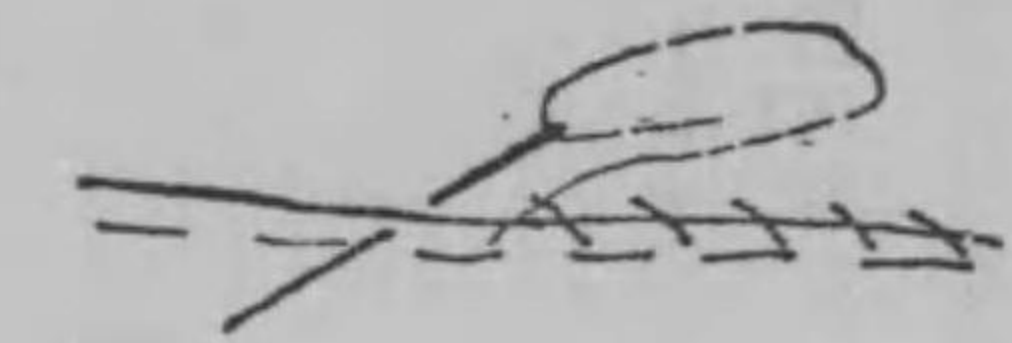
ミシンの使用法に就ては、ミシンを備へて居られる家庭ではそれをお求めの時に既にミシン會社の教師から詳しく修得なされた事であらうし、又これからお求めになる方でも大抵は會社の教師に就て修得される事と思はれるので、此處では詳しい解説の煩を避けて大體の使用上の注意に留めて置かうと思ふ。

總て何種のミシンに限らず機械が不潔であつたり油がきれいすると自然に調子が悪くなり、従つて早く破損し勝ちのものであるから、第一に、常に機械を清潔にして始終油を注す事を怠つてはならない。そして油を注した後は、一應布で拭き取つて置く事が必要である。

又機械を使ひ始め様とする時は、氣を落付けて、針棒を中心に出来るだけ身體をミシン臺に接

近して腰を掛ける。踏ミシンであつたならば腰掛は少し高く、折り曲けた兩脚の膝下は身體と並行する様になるのが宜しい。そして踏臺に載せた兩足の爪先と踵とで動かし、一度は必ず素縫をして調子を調べて見なければならぬ。それから機械に依つて糸を通し、下糸の調子も確かめてから上糸を少し緩目に持ち、右手で車を一廻しすると下糸が自然に出て来るから、其處で上糸と一緒に揃へて押へ金の向ふに置き、それから布を挟んで縫ひ始めるのである。尙ほ初心者であつたならば、最初は糸を掛けずに新聞紙に必らず素縫の練習をなし、練習が調つてから後に糸を附けて布を縫ふ様に心掛けなければならない。

第二節 縫ひ方



まつり縫。まつり縫は右から左にすくひ縫の様に表を揃ひ、斜に折込みの先きに抜き出し、斜に糸をかけて又表を揃ひ、これを繰返すのである。

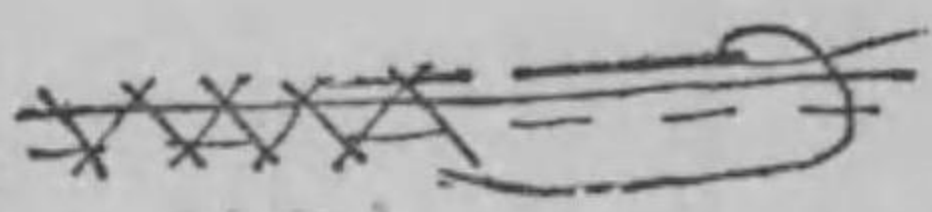
ギヤザー縫。此の縫ひ方は先づ布の先端を普通の素縫ひの様に縫ひ、次にそれから一二分下つた處を前と同様に今一度縫ひ、それから兩方の糸を同時に引いて布を適宜に縮めるのである。ミシンにもギヤザー取り機械が附いて居るが、どうしても手で縫ひ取つた方が綺麗に出来る。

千鳥がけ。圖の様に針先は右から左に揃ひ、そして左方から右方に縫ひ進めて行く。

駢のかけ方。駢をかけるには細かく四五針縫つては抜き出し、又四五針縫つては抜き出して行くので、恰度和服の場合の縫駢の様にする。

穴かゞり。圖の様に穴を竪に持ち、八番位の太さの糸で穴明きの左方

手前に糸を表に出し穴の向ふ端左方に通して右方の表に現はし、それを手前右方に通して左方の裏から針先を表に出す。そして目どに通つた糸を穴明きから取出して針先の手前から向ふに廻し針を引き抜いて糸を強く引き緊める。それから針を穴明きに通して左方に出し前述の様に繰返す





のであるが、山の處になつたならば四五針穴縁に丸味を持たせる様になし
此處で布を持ち替へて尙ほ段々と進めて行く。そして穴縁を一周して穴か
ざりを終り最初の處に達したならば横に一文字に通し、穴明から針を出し
て縦に一針細く留めて置く。

第三節 其他の諸注意

一、針 ミシン針は成る可く細い方が宜しい。本綿物を縫ふにしても十一番位のものを用ひ
て普通きめた縫針よりも一番位細い方が縫上りが綺麗である。然し右の様に細い針を用ふる時は
割合に弱く折れ易いものであるから、餘程氣をつけてしなければならぬ。

二、糸 糸も針と同様に少し細目の物を使用するのが宜しい。細い糸で縫つた處は縫目が如
何にも弱々しい様に思はれるけれども、糸が上下からかゝつて居るから見た程に弱いものではな
い。そして絹物や毛織物等を縫ふ場合には成る可く同色の羽二重糸を用ふるのであるが、若し布

地と糸との色が揃はない時には其地色よりも少し濃い色の糸を用ふる様にするのがよろしい。尤
も地色が淡紅色とか水色とかの白に近いものに限つては、白色を用ふると割合に目立たないもの
である。また木綿物に羽二重糸を用ひて居るものも見かける事があるが、これは見難いばかりで
無く却つて其上に弱いものであるから用ひない方が好い。そして地質に従つて糸の番数に注意し
普通は六十番、七十番、八十番位のものを使用するのであるが、白麻等の物になると百番が百二
十番位の糸を用ふるのが綺麗に出来上る。此の様な場合、使用する糸の細さに従つて針の細いも
のを使ふ事をも決して忘れてはならない。

三、チヨーク これは毛織物だけに用ひて木綿物には決して用ひてはならない。木綿物に
はチヨークの代りにルレット(線をつけるもの)を用ふるが宜しい。尤も毛織物でも白地の時には
他の色ですると消し取る事が至難であるから、必ず白チヨークを用ふる事である。又、布地の
チヨークを消し取るには他の同じ布地を以て拭き取るのが最もよろしい。

四、切躰 毛織物にチヨークで標を附けたならば、切躰に依つて下の布地にも標を附ける事

を忘れてはならない。切躰をするには布地を平な臺の上に載せ、躰糸を二重にしてチヨークの標の上を小さく揃ひ、間を明けて又揃ひ、斯うして標の要るだけを揃つてから各々の間の糸を切りそれから布地と布地の間の糸を抜けない様に注意して切る。それで上下兩方の布地の同様の標が附く事となる。

五、布地の裏表

布地を裁つ場合には何品に依らず表と表を内側に合せて裁つのであるが布地の裏表を見るには、先づ純毛織物類であつたならば大抵表を内側に巻いてあるし、綿物の交ぜ織であつたならば表を外に出してある。又綾物になると毛織物であつたならば綾が向つて右上的りの方が表であるが、木綿物は反對に左上りの方が表である。尤も偶には木綿物でも表が右上りの綾になつて居る場合もあるから、良く注意して裁つ前に裏表を見定めなければならぬ。

六、ミシン掛けの注意

地薄の絹物にミシンを掛ける場合に、其儘では縫目が縮むものであるから、下に薬紙を敷いてそれも一緒に縫ふ様にした方が宜しい。さうすると縫目の縮みを防ぐ事が出来るし、又薬紙であるから取除く事も最も容易である。一般に絹物は表に出る處に

は、ミシンを用ひないでまつり縫ひにした方が良く出来上るし、又綺麗でもある。

總べて絹物に限らず木綿物でも、二枚合はして縫ふ時には、少しでも緩みのある方を下にして縫ふと縫上りになつて恰度良くなる。又、布地によつては糊の多い爲めに針の進みが鈍い時には、其布地に一寸蠟を引くと縫ひ好くなるし、縫目が地厚になつた爲めに縫ひ難い時は、一方の手でミシンの車を廻し、他の一方の手で靜かに向ふから布を引き加減にして縫ふと、針を折る様な事もなくて容易に縫ふ事が出来る。それから縫ひ終つて、其の後前を留める場合に、戻し針で留めてあるのが往々見られるが、あれは決して好いものではない。必ず裏の方に兩糸の端を抜き出して留め針に通し、布地の中を縫ひ戻して留めて置くべきである。

七、アイロン

羅紗物を縫ぎ合せる時は表と表とを合せて細かくまつり、アイロンで強く押すと宜しい。又出来上り物にアイロンを掛ける時には、木綿物ならば少し濕して表からかけ、毛織物ならば必ず濡手拭の様なものを當て、裏から押へる様にしてかけなければならぬ。殊に、若し表から掛けなければならぬ場合には、濡れた布切れを置く事を是非忘れない様にして仕

上げをするこころである。濡れた布切れは木綿の古手拭などを用ゆるとよい。

第四節 寸法の取り方 (女兒)

- 一、衿廻り(衿丈)。首の廻りの一番太い個處を緩目に測る。
- 二、胸廻り。胸部の最も太い處の周圍を緩目に測る。(即ち乳の上あたりに當る)
- 三、脊丈。第七頸樞(脊髓骨の上端で後ろ衿元の一番高い骨)から細腰までを測る。
- 四、脊幅。脊中の廣さ。
- 五、胸幅。前胸の廣さ。
- 六、袖丈。腕の後ろの附根から肘を少し曲けて手首までを外側で測る。
- 七、總丈。第七頸樞から膝頭まで。

女兒標準寸法

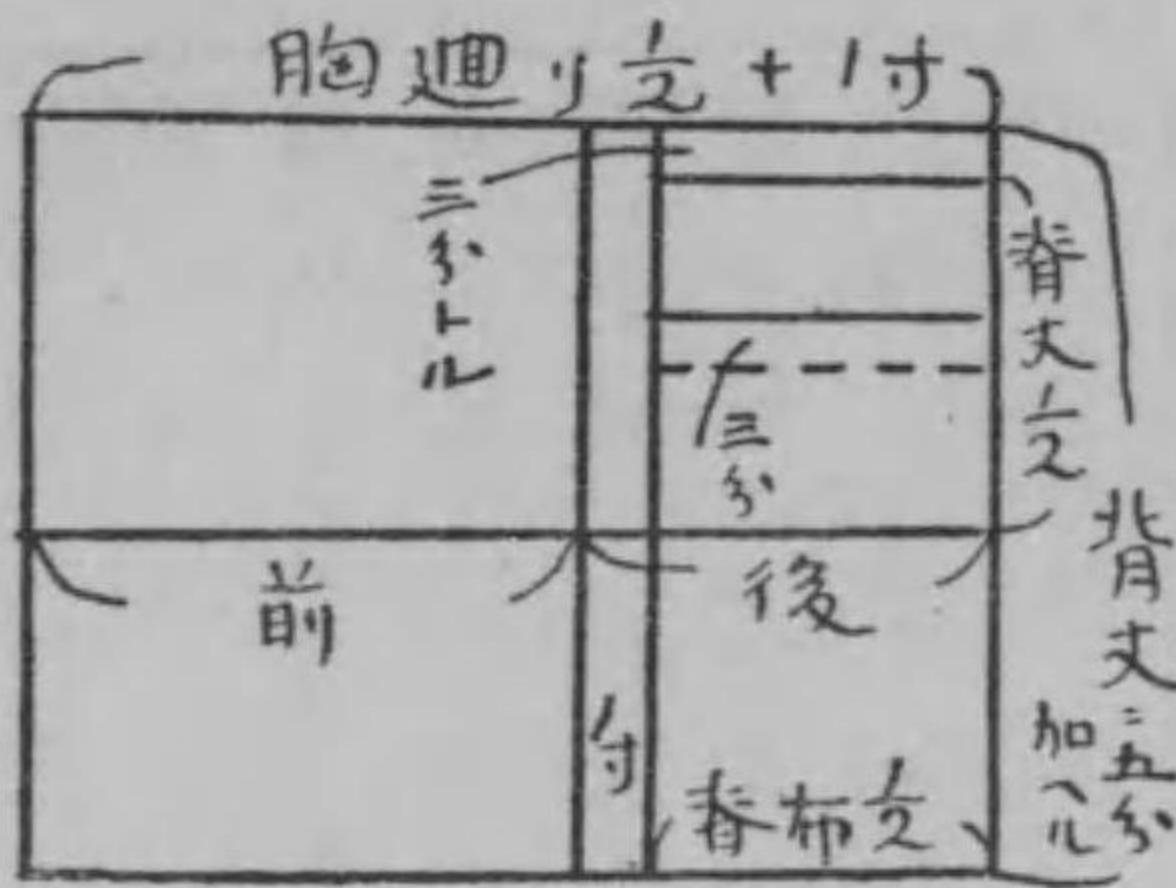
衿廻り	胸廻り	脊丈	脊幅	胸幅	總丈
一二三歳	七寸	一尺三寸五分	四寸三分	五寸五分	一尺四寸
四五六歳	七寸五分	一尺五寸	六寸	五寸八分	一尺五寸
七八歳	八寸	一尺六寸三分	七寸五分	六寸三分	一尺七寸
十一二歳	八寸三分	一尺八寸五分	九寸	七寸	二尺

第五節 原型の拵らへ方

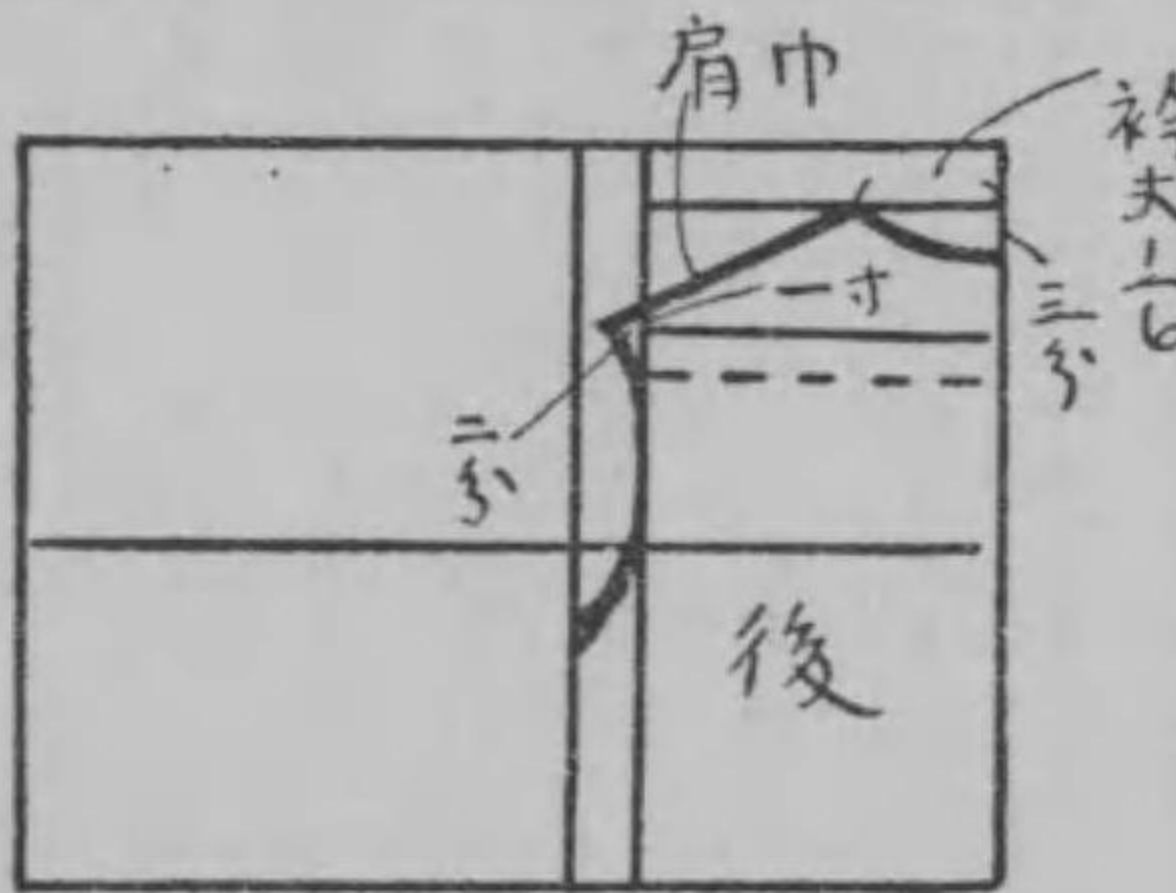
第一 原型身頃の拵らへ方

原型身頃のこしらへ方

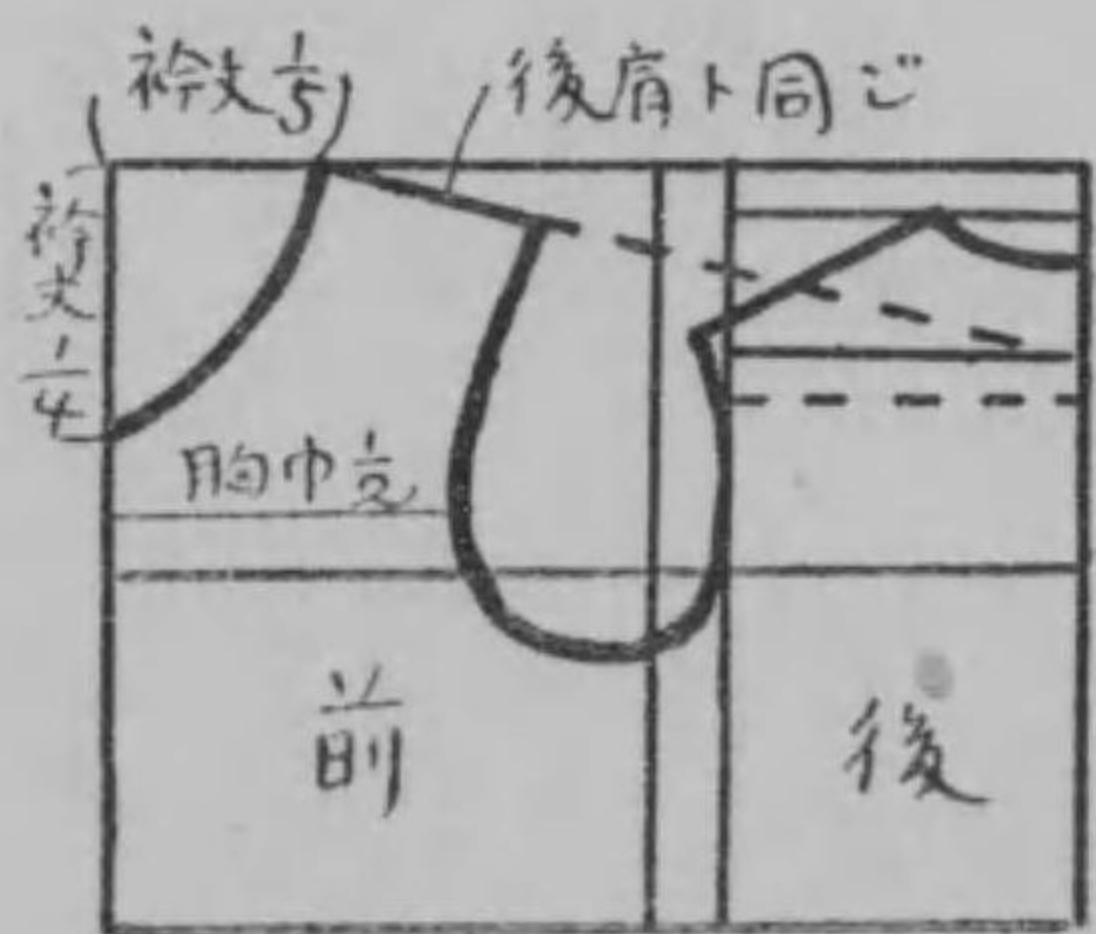
第一圖



第二圖



第三圖



先づ第一圖の様に横幅は胸廻りの半分に一寸を加へた方法を定め、縦は背丈に五分加へた寸法で方形を作り、次に右端から背幅の半分の處と其處から一寸左寄りの處とに二本の縦線を引き、其右寄りの縦線内に於て上端から三分下つた處に横線を引く。又其線の下部、即ち背丈の處を二等分して横幅線との間を二等分して、其處から三分上りの處に第一縦線内に於て横線を描く。

次に説明は第二圖に入る。第二圖第一横線に於て右端から左方に背丈の 1/6 の處に一點を定め、これに向つて、同線右端の三分下の處に定めた一點から三日月形に衿ぐりをなす。次に第二横線から一寸位上の位置で第一縦線の左方二分弱の所に標を附け、此の處から衿ぐりの左端に斜線を引いて肩幅を定める。更に此の二分弱出した一點から第一縦線に向つて脇ぐりと後袖割線をなす。

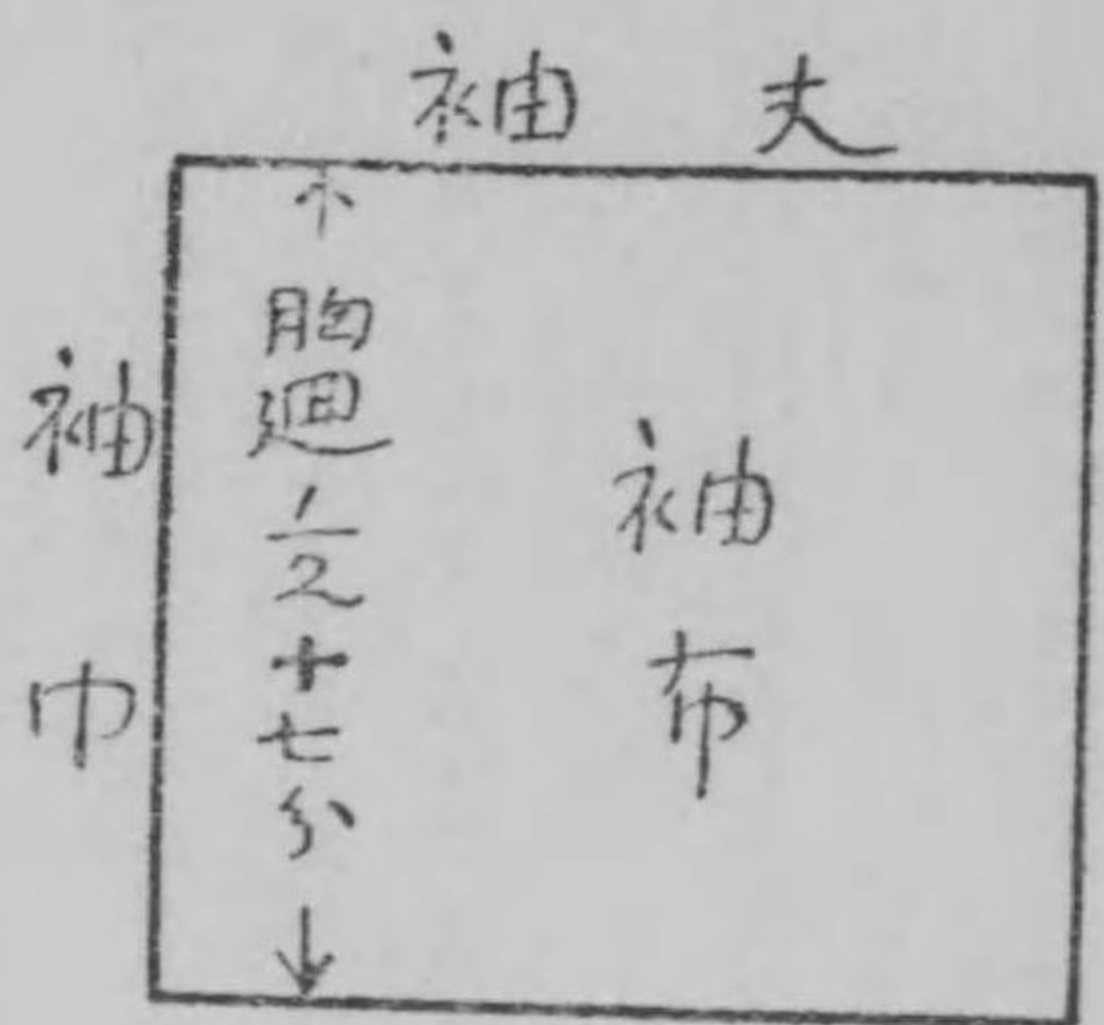
第三圖上端に於て左端から右の方に背丈の 1/5 の寸法を定め(衿ぐり横)、又左の上端から縦に背丈 1/4 の寸法を定め(衿ぐり縦)、之等の二點から各々内側に向つて最初の五分位は直線を出し、それから半圓形を描いて兩線を結びつけ、首廻りの様に圓くする。次に肩幅は後肩幅に倣

つて衿ぐり上端から後の第二横線の右端に斜線を引き、此の斜線に従つて衿ぐり上端から計つて前肩巾を定める。それから左端から胸幅 E₂ の寸法の一線を定め、胸脇、後袖ぐり線と出合ふ様に凹線を引き、前袖付け線となすのである。

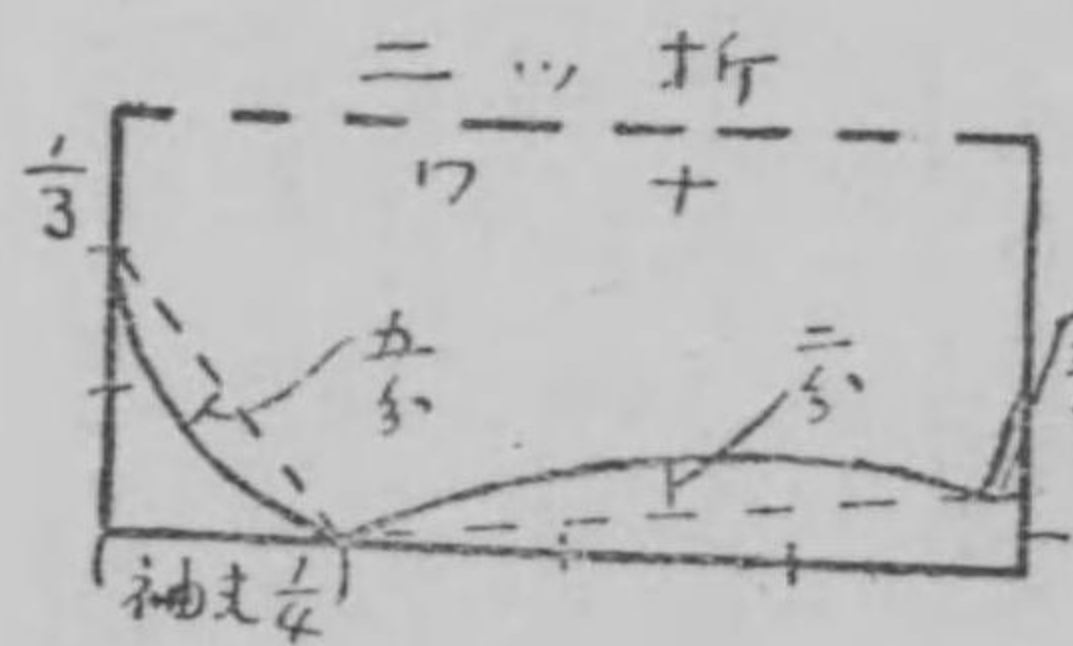
右の様にして身頃の原型は出来上るのであるが、更に脊幅の E₂ の線から一寸左寄りの縦線に従つて左右に兩分し、其他の部分も曩きに描いた線に倣つて不用の部分を取り落すのである。尚ほ最初に兩分した場合に、右方は後身、左方は前身である。

原型袖のこしらへ方

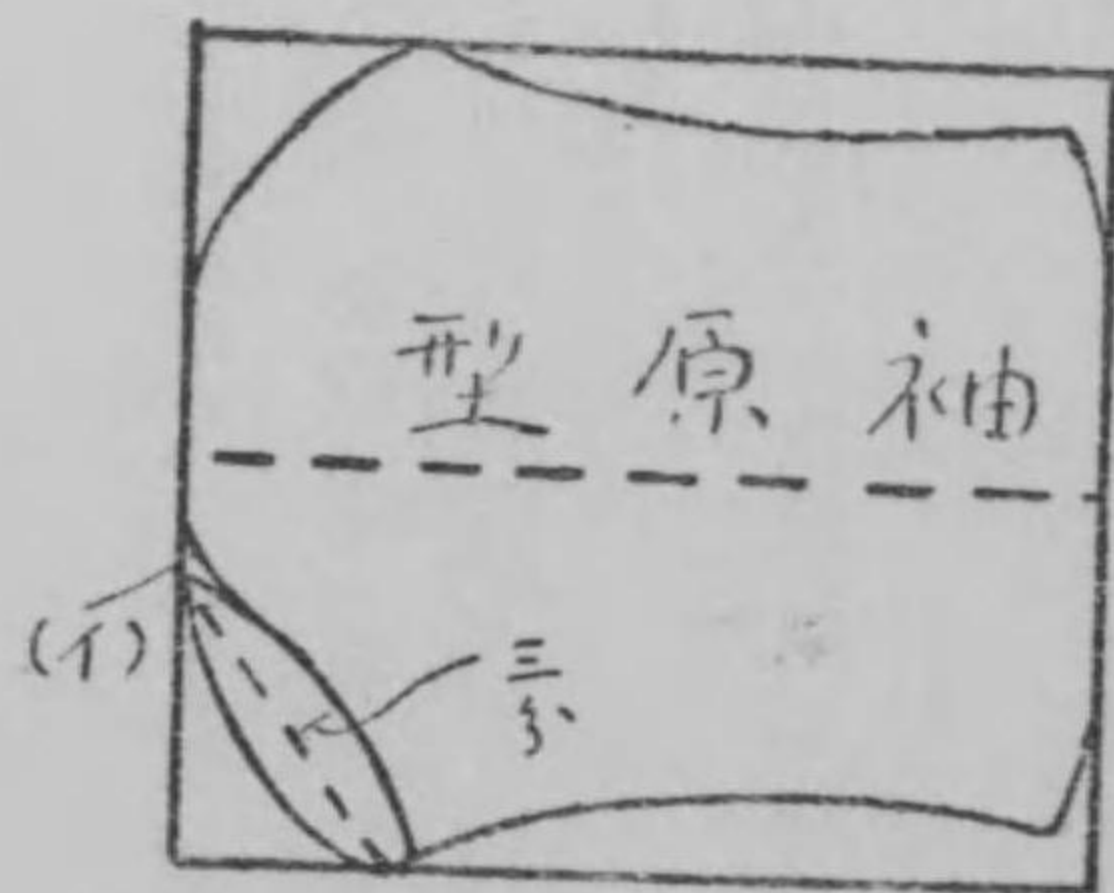
第一圖



第二圖



第三圖



第二 原型袖の拵へ方

先づ第一圖の様に袖丈と胸廻り E_2 に七分を加へた袖幅とで方形を作り、これを第二圖の様に二つ折にし、袖丈を四等分し袖幅を三等分し、丈の四分の一と幅の三分の二との斜線に中央を五分出して丸味を帯ばす。(こゝが袖附となる)袖口の方を五分とり袖下から斜に線を引き、次に中央部を二分だけ弓形に落す、袖口を三分丸味を附て圖の様に落す。

これを第三圖の様に延して後袖を三分だけ落す。(1)は裁落したあとで三分の二の處に丸味をつけたのである。

右の圖の様に身頃と袖の原型が出来ると、あとは繪本さへ見ればどんな格好でも調製する事が出来るのである。一言に申すと原型のつかひわけの様なもの、一通り覺得すると何んでもない、またこの女児服の割出しで何歳も其の寸法を取つて製へるとよろしいので、之れより順々に嬰兒服のこしらへ方より御話する。

第二章 第一號嬰兒服一揃

第一節 上着

上着
出來上り圖

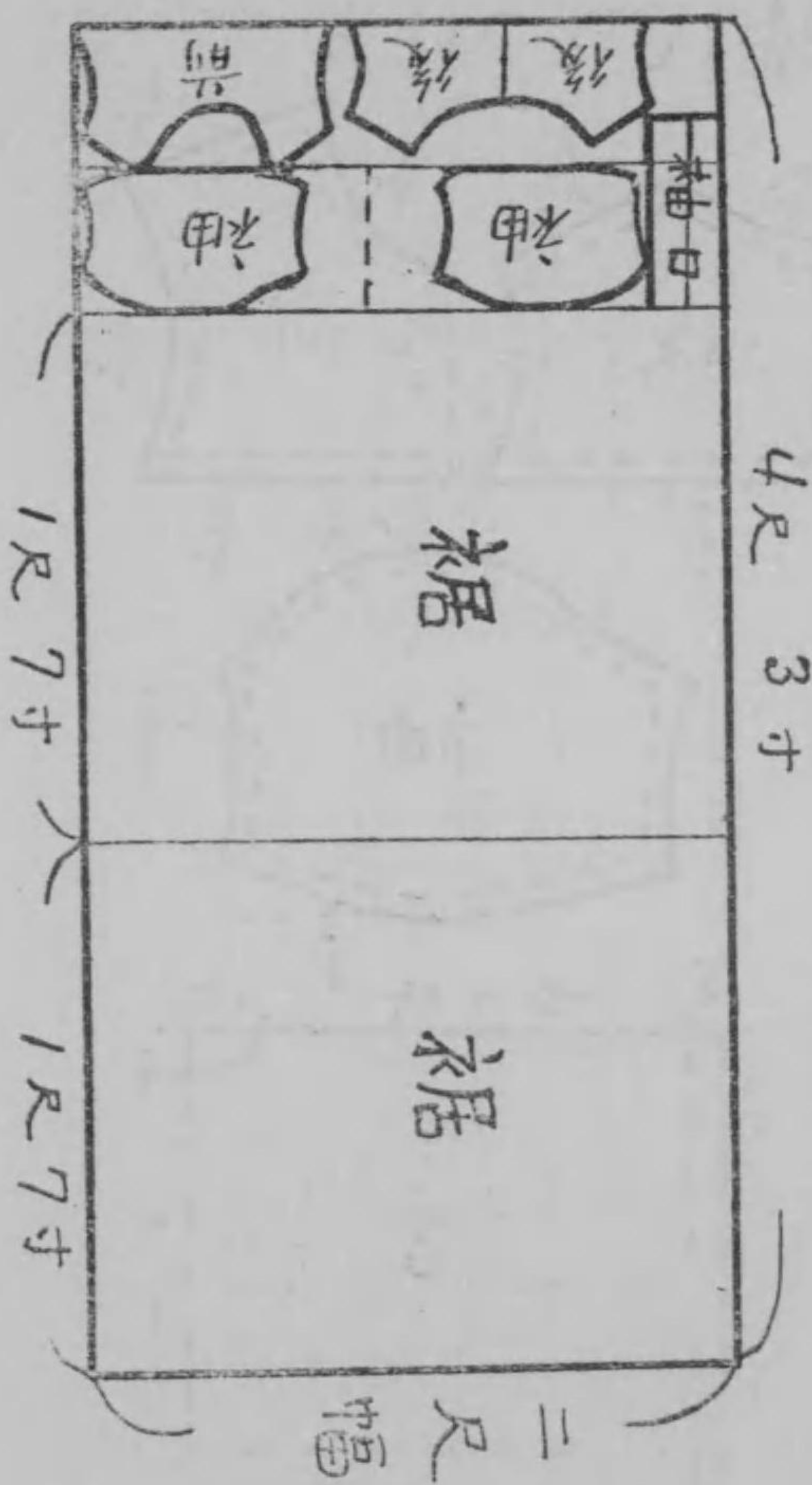
前



後



第一總合圖上着



裁ち方。初め一二歳の寸法に合せて原型を作り、前身頃は脊丈の $\frac{1}{2}$ の横線から、後は横線から三分上つた處を切つて其各々の上部は胸切れを裁つ時の原型として用ひ、袖もカフスの出来上り幅凡そ五分程落してその原型とする。先づ第一總合圖の如く裾丈を二枚取り、各部分は縫代附け方圖に倣つて裁ち落すのである。胸の處にレース、又はタツクを用ふる時は最初に布の大體を裁ち、それから適宜にレースを入れ、或はタツクを取つて裁方圖の様に裁ち落す。

縫ひ方。右の様に布を裁ち切つたならば、先づ裾布を丸くはぎ合せて縫目を兩方に開き、裾折を一寸五分位に三つ折となし、後切込みの處の下前(向つて左)は細く三つ折にまつり、上前は三四分の上り幅にこれも三つ折にまつり、下前の上に重ねる様にする。そして終の處で下下を抑へて留めて置く。それから脇明の部分を残して其他の部分は胸切れに合せて縫縮め、前は胸切裾切、身返し切れと三枚一緒に縫ひ合せ、身返し切を胸切の方に返して細かくまつる。後身頃の中心の一吋五分出した處を、上前はそれより一分先きを裏に七分の上り幅にまつりつけ、同じく下前も一吋五分出した部分を中央から裏に折つて持ち出しとする。そして前胸切れと同じ様に縫

ひ縮めた裾布と縫ひ合わせる。兩肩は前後を袋縫ひに合せ、衿元には斜切れを附け、裏に返してまつりつける。又時に依つては細く縁取りをする事もある。

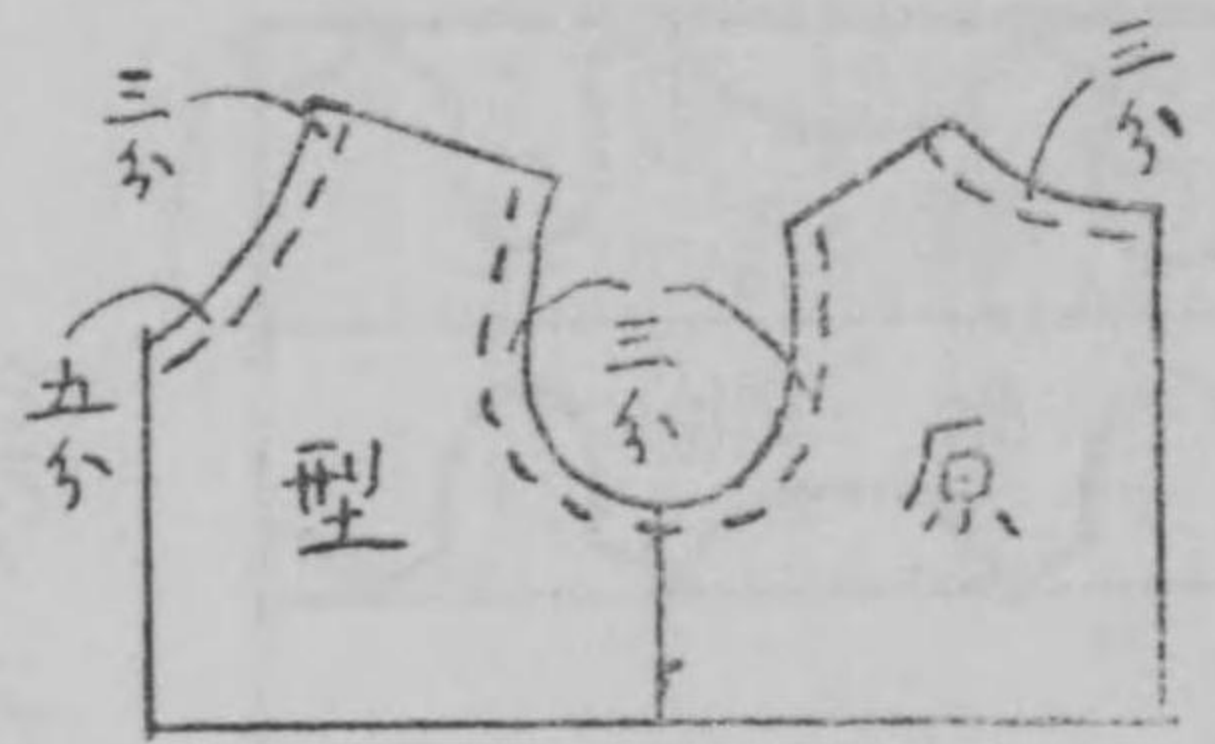
袖は下の方で細く袋縫ひにし、別に丸く縫ひ合せて縫目を開いて置いた袖口切れに合せて袖下縫目から一寸程残して縫ひ縮め、袖裏と袖口表を縫ひ合せ、三分位の上り幅に表から飾りミシンをかける。そして袖口と衿元には片耳の糸レースを少し縮めて其表と身頃の表を合せ、八十番くらいのカタン糸で細かくまつて置く。袖付は袖下の縫目を前胸布と裾布との縫ひ合せた處に合せ(袖の丸くなつた方が前)、袖の方を緩め加減に身頃と縫ひ合わせる。尙ほ袖の方の緩みが多い時には肩山の縫目から後に一寸、前に一寸五分位の間で縫ひ縮めて附ける。此の時に一方に七分幅の斜切れを當て、縫ひ合せ、斜切れの端を折つて縁取りの様に縫目にまつり附けるのである。

これで出来るのであるが、これに後ろ身頃の襟元の一つ、はぎ合せの一つ、其中間の一つと都合三つ三分位の横穴を明け、下前にボタンを着ける。(又、プレスボタンでも宜しい。)

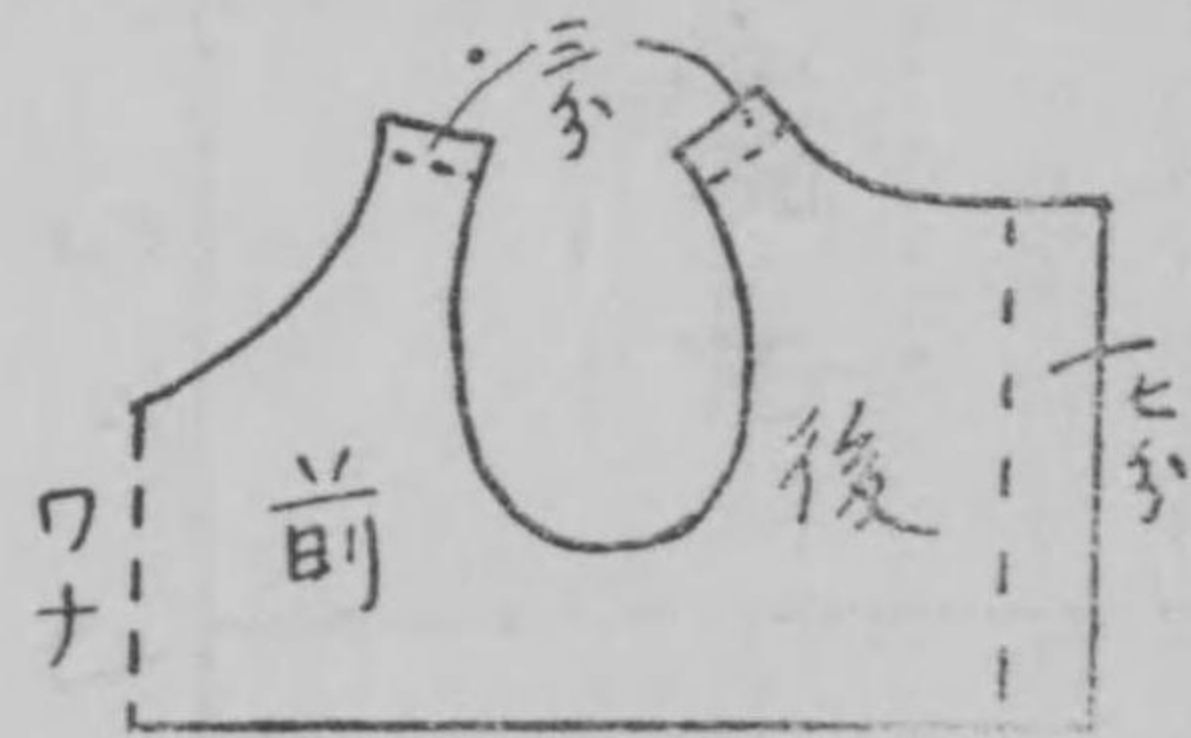
嬰兒服の恰好はこれ一つに限られたものではなく、色々ものがあるが、此の一つの型さへ會

得すれば他のものは自然に分つて来るのである。

尙ほ此の上着は男女の別なく二三歳までは充分に着られる。即ち生後十ヶ月頃になつたならば其子供に合せて裾を裁ち落し、裾折りをなして用ふれば宜しいのである。



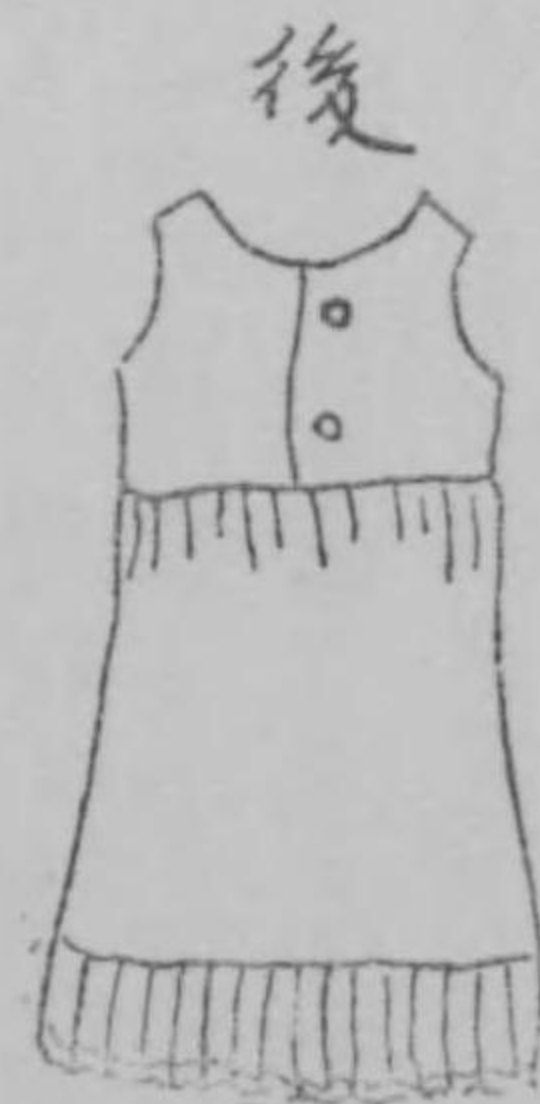
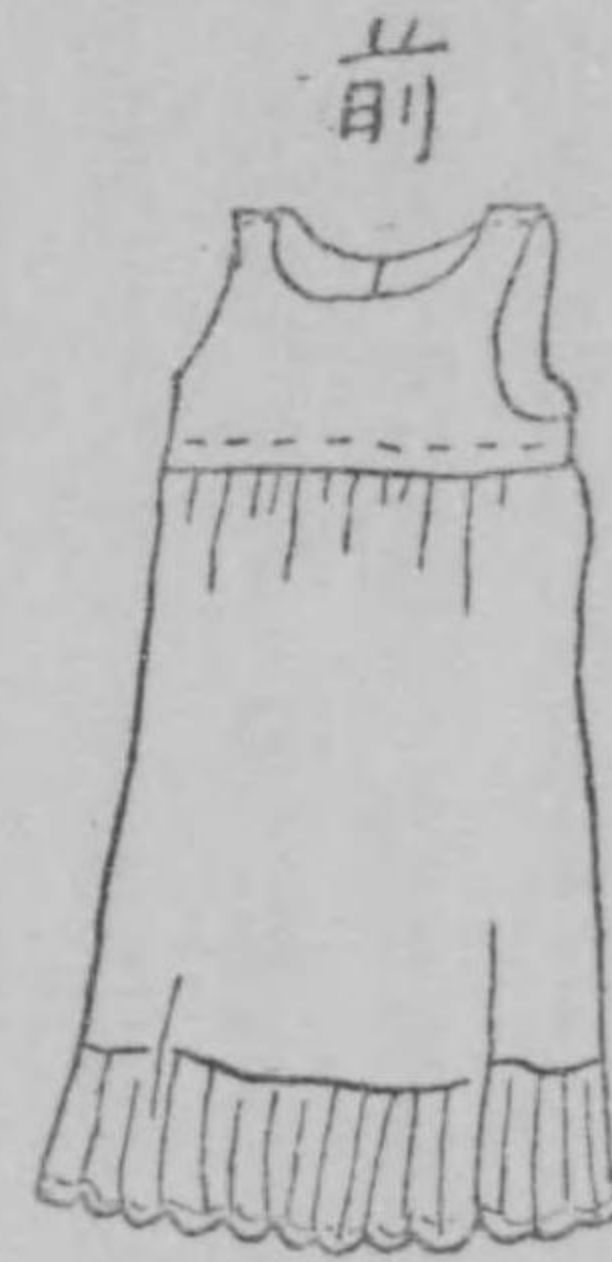
下着の裁方



縫代のつけ方

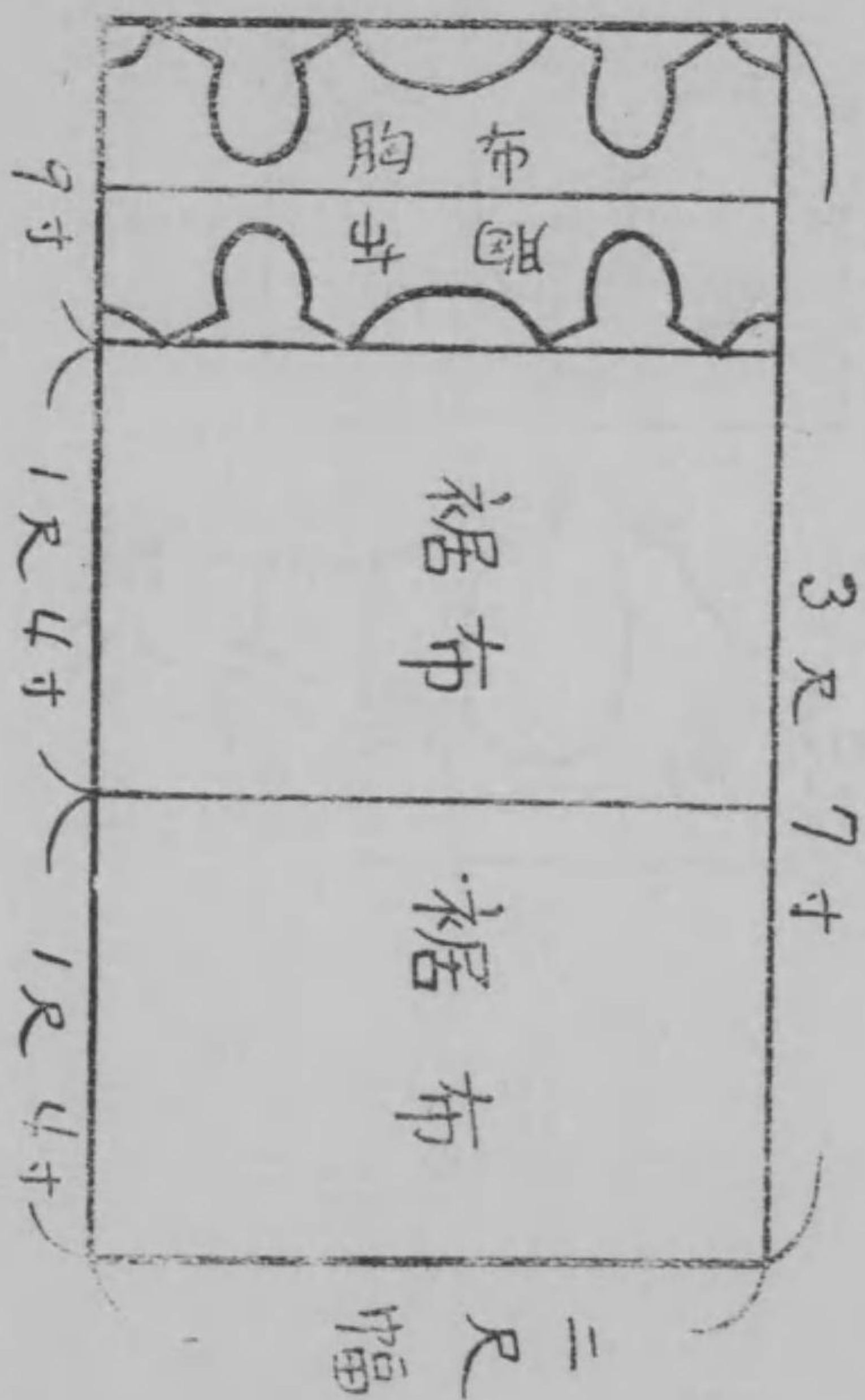
第二節 下着

着用
出來上り図



幅二寸以上のものをニヤール半。
用布。糊なしキヤラコ、ナインスツク、ロオン等が宜しい。此外に裾に附ける片耳の布レース

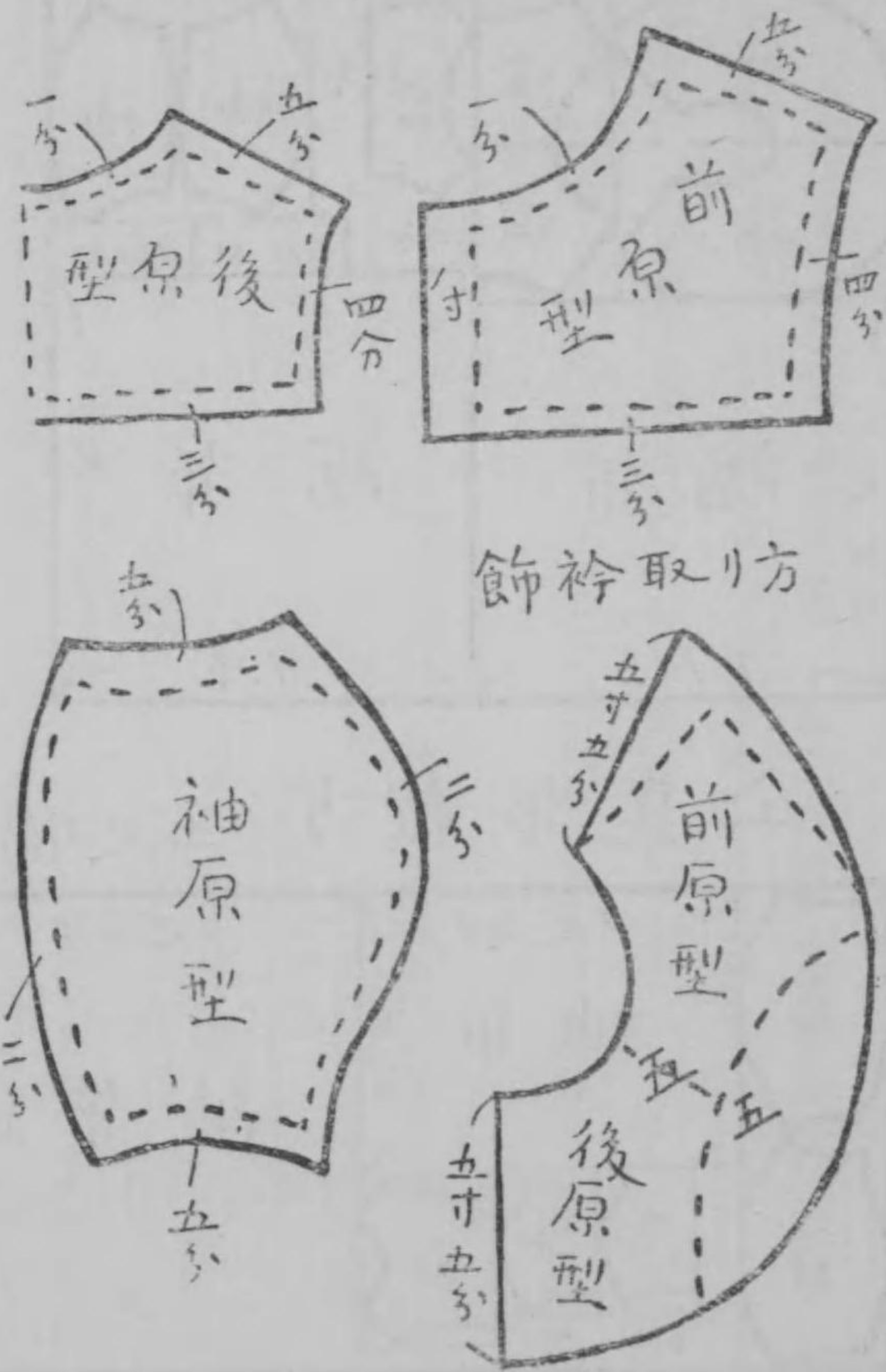
總合圖 下着



裁方。先づ原型を第一回の如く前後の脇を合せて襟元袖ぐりを裁ち落し。總合圖の如く布を裁つ。此の場合胸布は第二圖の様に原型に縫込みをつけて裁ち切るのである。

縫ひ方。上着と同じく裾布を丸く縫ひ合せて縫目を開き、レースは裾布に合せて縫ひ締め、レースの裏と裾布の裏を合せて縫ひ、折りを身頃の方に返し、其縫目を裾布で包む様に表からミシンで抑へる。又裾の上端縫目の處を二寸五分開き、裏に一つ折りにしてミシンを、尙ほ胸切れに合せて全體を縫ひ締め、胸布の表と裏にて裾布を挟み縫ひになす。そして後ろの中心上前(右身)の方は七分程縫込み下前(左)は二分程縫代になし、襟廻りと袖ぐりの丸味の處は所々に切込みを入れ、兩方から内側に折り込んで表からミシンをかける。後ろ上前の襟元から二三分下に一つ、上下の縫合せの處に一つ、其の中間に一つと都合三つの横穴を明け、下前にはボタンを附ける。

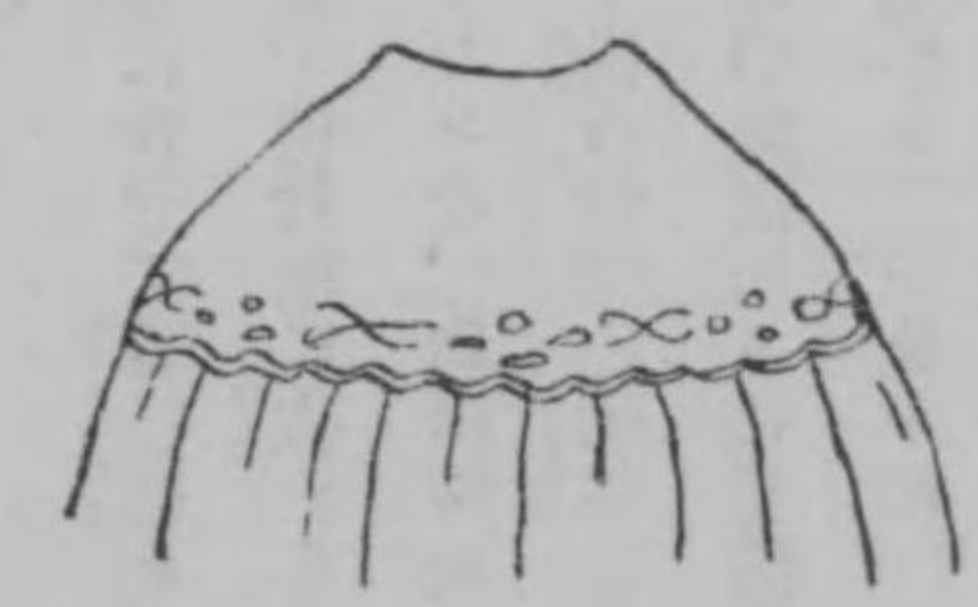
裁方圖



外套 出來上り図 前

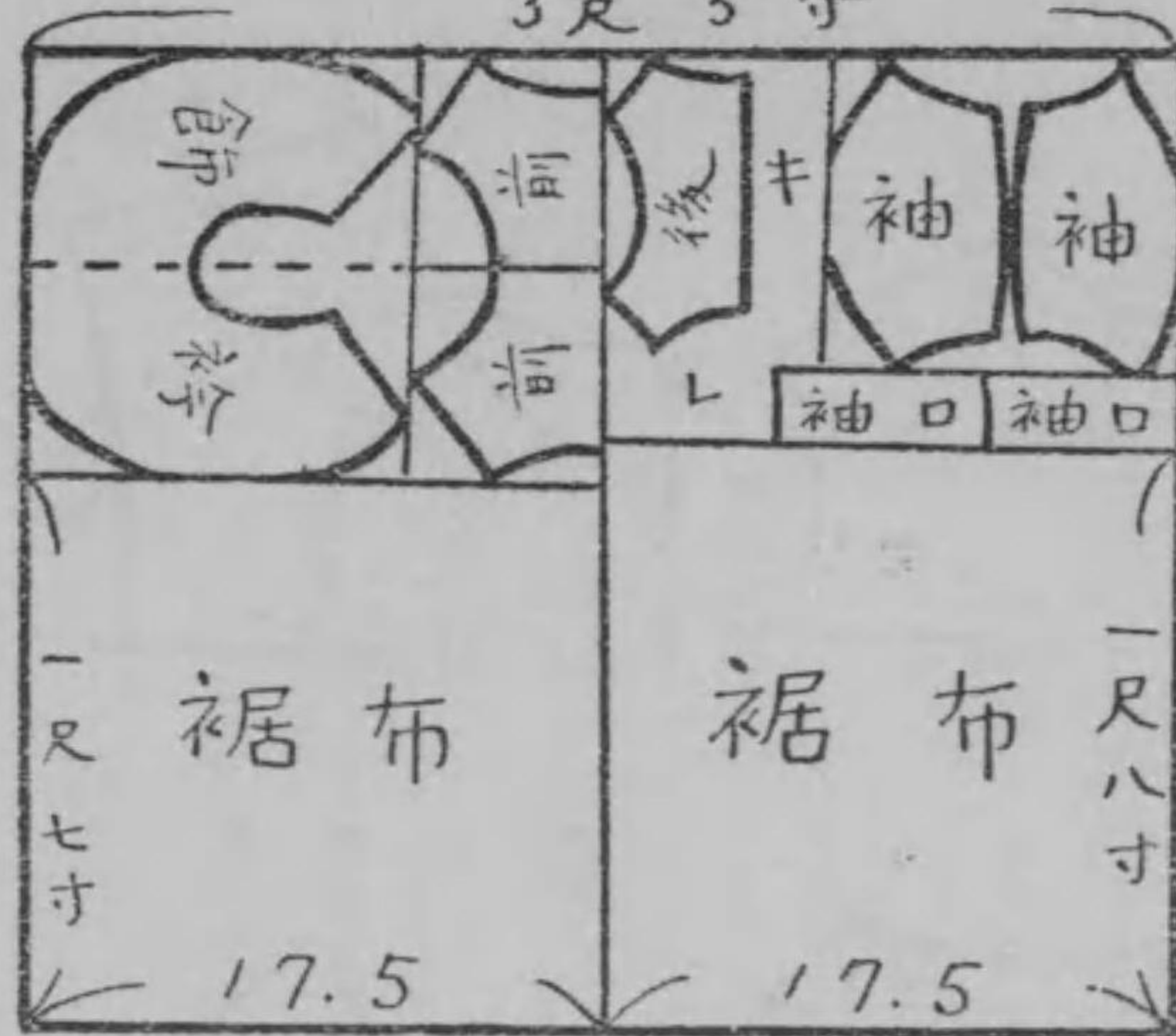


後

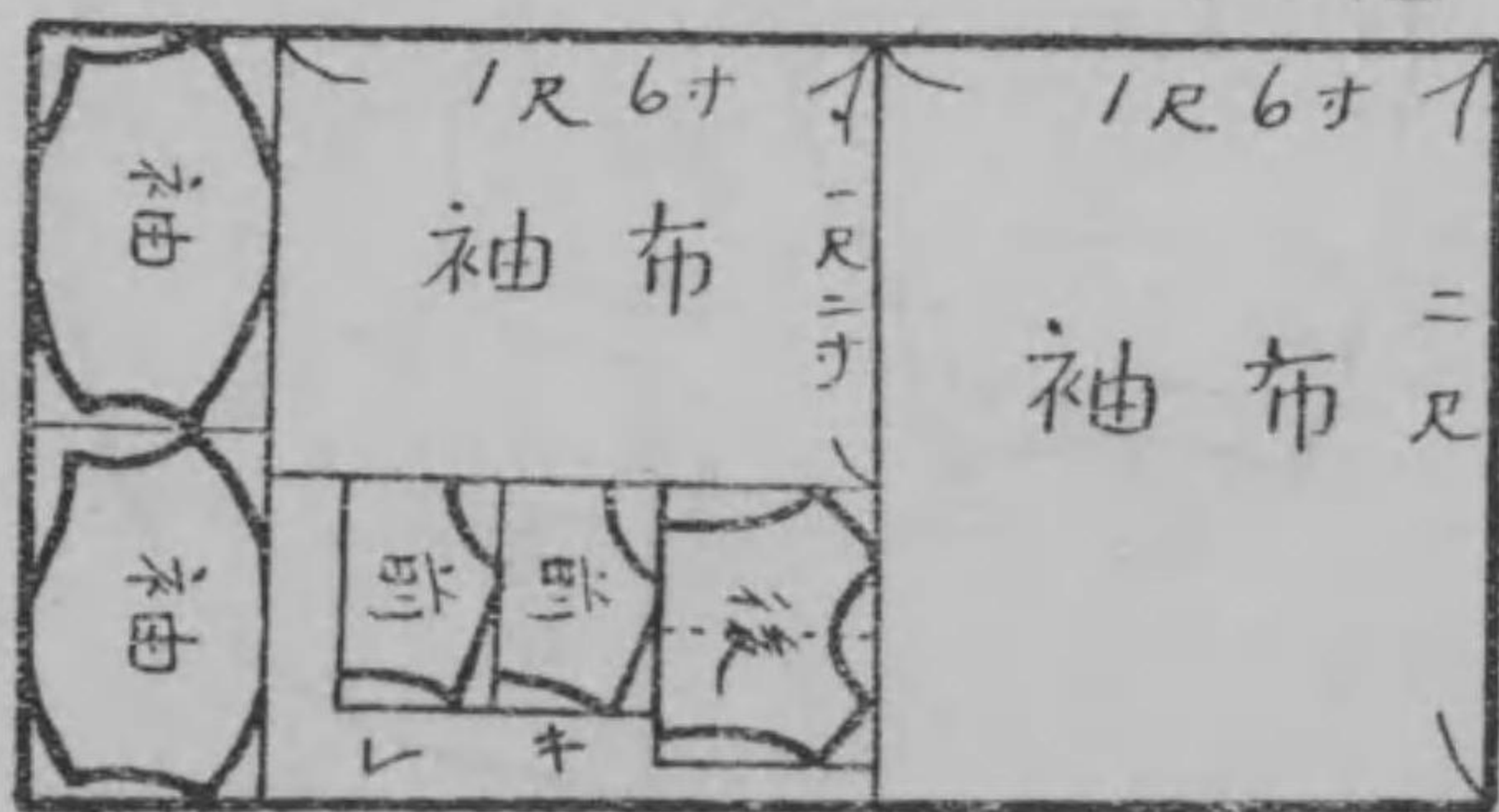


第三節 外套

総合圖 カシミア 三尺幅
3尺 5寸



全裏布裁方 二尺幅



用布。白カシミア、白セル、白羽二重、ビケ等で裏地は白毛襦子か片面の綿ネルの類を用ひる。
 裁方。上着の原型を其儘に第一圖の裁方圖に従つて総合圖の様に各部分を裁つのである。
 縫ひ方。袖は表裏とも袖下で別々に縫ひ合せ、縫目を開いて表裏を合せ、袖口切れを丸く縫ひ
 合せて縫目を開き、これに合せて袖山を縫ひ縮める。(此處は襷でも宜しい。)それから袖口の表
 と袖裏を合せ縫つて折りを袖口の方に返し、袖口切れの端を一つ折りに表に返して縫目を匿す様
 になら抑へミシンをかける。

身頃。裾布も裏表とも別々に縫ひ合せて縫目を開き、表裾と裏裾の真中を合せて裾を縫ひ合せ
 折りを裏の方に返す。次に表裏の上端を揃へて表を裏の方に折り返る丈け返し、兩横を丁寧に揃
 へて表を裏の方に返し、恰度額縁の様にして上端を合せ、裾布を四つ折りにして上圖の様に兩脇
 を裁ち落とす。そして各胸切りに合せて縫ひ縮めをなし、前後胸切の表



裏にこれを挟んで縫ふが、此時に上前の方は胸切を一寸残して置く。
 此の一寸の折込みの分は裏表一緒に裏に返し七分位の上り幅に裏布に
 まつる。兩肩も表裏別々に前後を縫ひ合せて縫目を開き(裏表とも中

に縫目の出る様に、袖下の縫目を胸布と裾布の縫合せた處に合せ（袖の丸くなつた方が前）、それから袖の方を緩目加減に身頃と縫ひ合わせる。そして袖の大きい處は肩山の縫目の處から後ろに一寸、前に一寸五分の間にたるみを持たして縫ひ合せ、これも縁布で包むのである。然し裏表の縫代が一緒に重なつてころ／＼するのであるから、初めは一度縫ひにして其先きを今一度縫ひ、又端を少し太い糸でまつて置くと宜しい。

衿は飾衿に縁をスカラ縫ひにするか、又はレースなどを付けて兩角に白の糸でフランス刺繡などを施すと綺麗である。そしてこれを衿元の上に載せて斜の切れを當て、縫ひ合せてから裏に折り返して細く身頃にまつり附けて置く。

斯うして出来上つてから胸布の上前の上下に（胸布はぎの上）一個づゝ穴を明け、下前にボタンを附ける。尚ほ衿元のさみしく感じられる場合には、紐を兩飾衿の下に附けて結ぶ様にするると宜しい。

此の外套は前述の上着の様に、大きくなるに従つて裾を裁ち切つて短かくすれば、三四歳頃ま

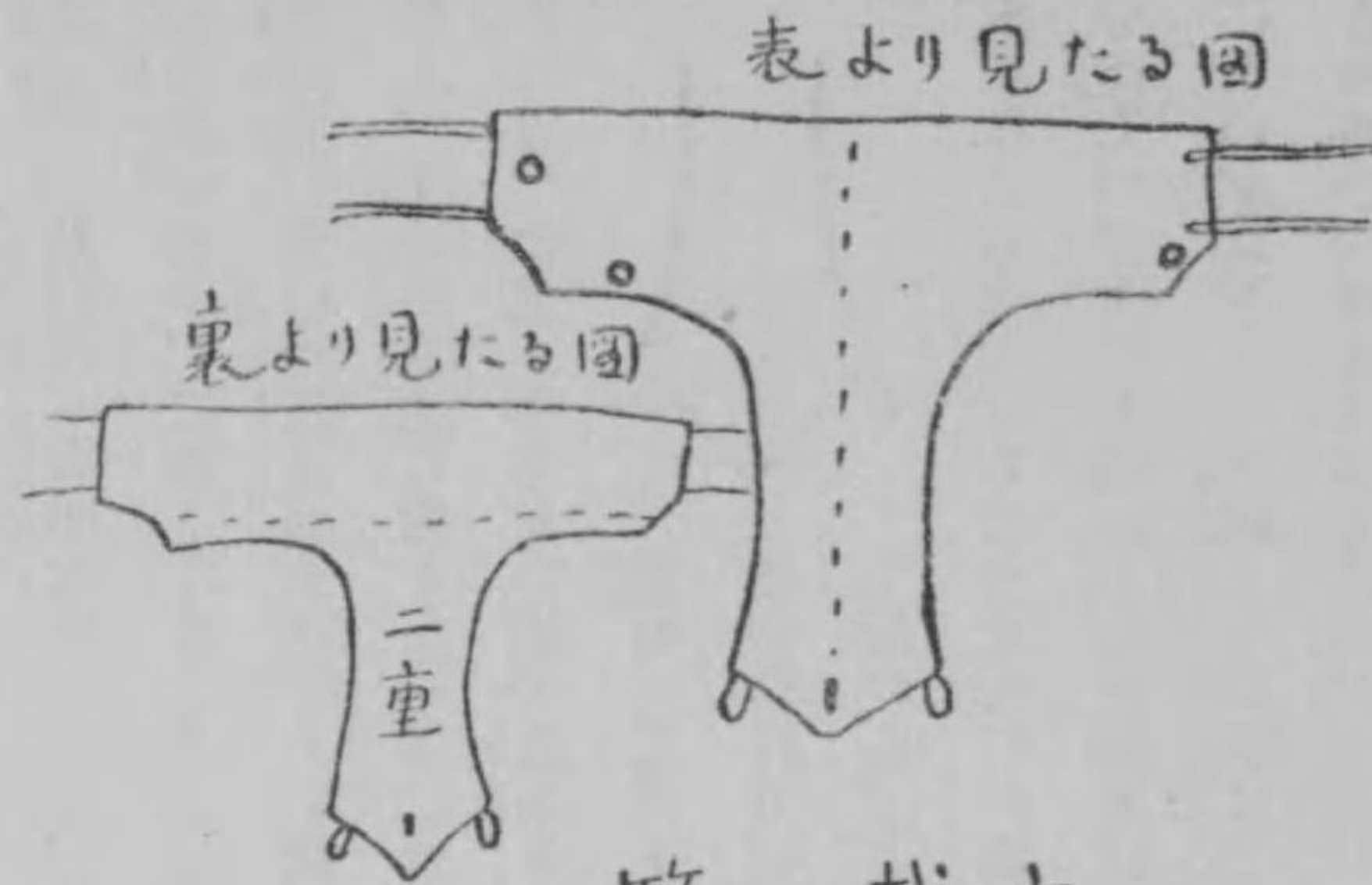
では着られて仲々重寶なものである。

第四節 襖 褌

襖褌の布地としては綿ネルの極薄地が最も宜しい。先づこれを縦横二尺づゝの四角切れとして取り、一角と其對角とを以つて三角に折り、其れを更らに今一遍折ると都合枚重ねの三角になるそこで其間に軟かい晒の様な切れを挟んで最も長大な一邊を脊中に當て、兩角を左右の腰から廻して前に合せ、他の一角を股の下から持出してこれに重ね、この點を大きな安全ピンで留めて置く。それで洗濯の時などは一枚であるから乾きが早くて非常に便利である。（襖褌の端は裁ち切つた儘下縫はずに置く。）

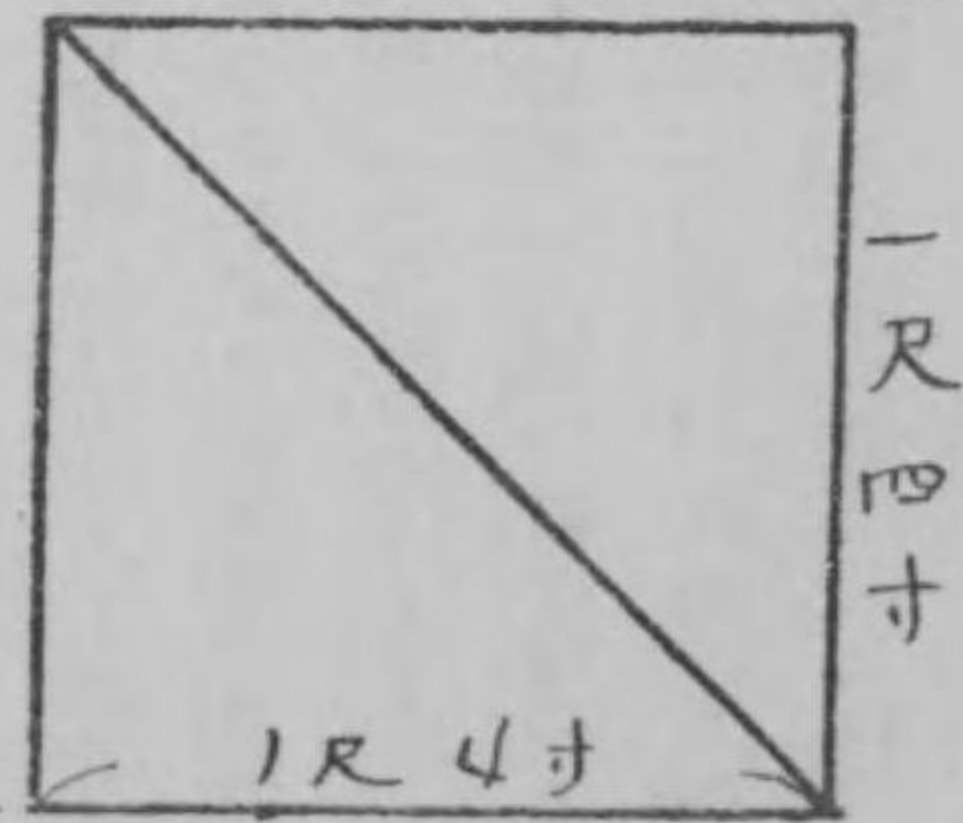
我國では在來の習慣で、生後直ちに三角の襖褌を用ふる事は股が擴がつて恰好が惡くなるからと云つてこれを嫌はれる方もあるし、又實際に最初の六七ヶ月間は洋服も大抵長い物を着る時でれるから二尺四方の襖褌を横に二つ折りとなし、お股も在來の方法に従つて宜しいものと考へる。

カバー出来上り圖

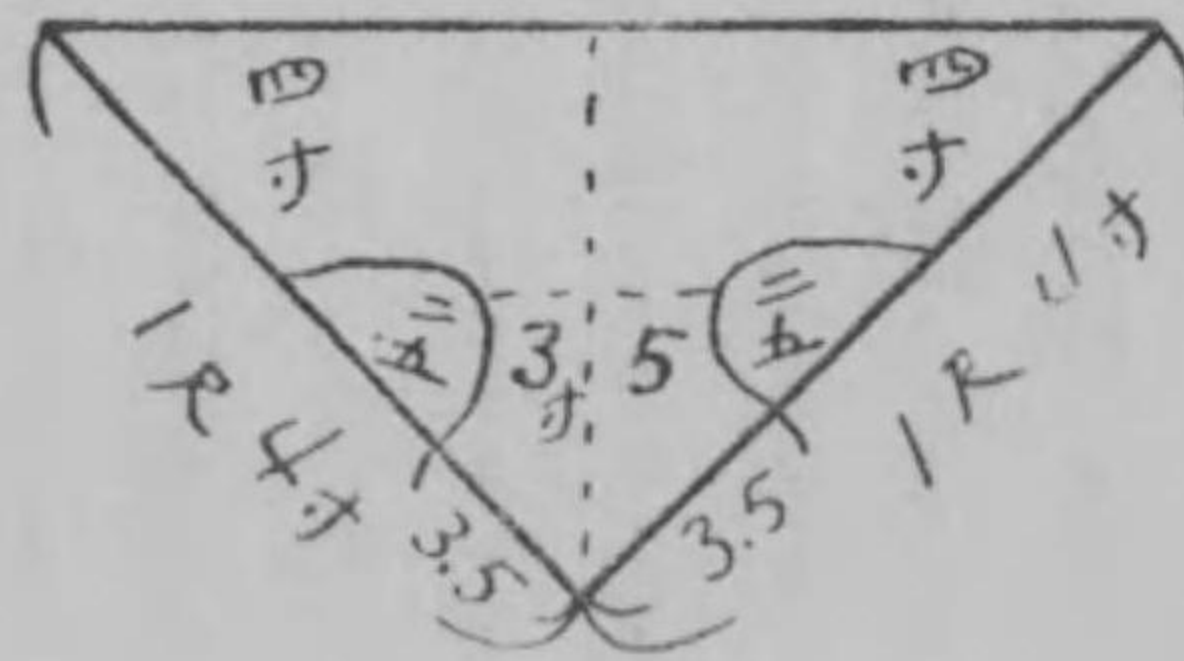


第一裁方

一尺四寸四角で二枚とる



第二裁方



第五節 襁褓カバー

そして其上をフランネルのおくるみで包み、裾を折返して圖の様に安全ピンで留めて置くのである。斯うして段々月齡を増すと共に上着が短かくなり、自然におくるみも出来なくなるのであるから、其時は三角襁褓を當てゝフランネルで拵らへた襁褓押へをするに宜しいのである。此の襁褓押へはゴム製のものや其他種々のものが有り用ひられて居る様であるが、これ等は缺點が多く殊にゴム製のものなどは風通しが悪くて蒸れるのであるから、甚だ不衛生的のものと考へられるのである。其他の製品に於ても各々多少の缺點を見出すか、この中にて比較的良好と思はるゝはフランネル製である次に襁褓カバーの拵らへ方を述べやうと思ふ。

裁方。一尺四寸平方の布地を取り、これを一つの角からこれに對する他の角に向つて第一裁方の様に斜に切り、二枚となす。そして其一枚々々の三角の布を第二裁方の様に裁つのである。

縫ひ方。先づ兩横(角度の等しい兩耳)を二寸程裏に折つてまつり附けるか、或ひは千鳥掛けとなし、上端(直角に對する一邊)は四分位の幅の木綿テープへ縁の様に細かく縫ふ。次に股の山形になつた處(即ち布の端の直角をなして居る處)から點線の處までは今一枚のフランネルを



重ねて二重となし、廻りは前と同様にテープで縁取りの様にする。そして圖の様に其の先端に一つのボタン穴を明け、兩脇に五分位の乳を拵らへて附ける。それから上前になる横の處に上下に六七寸位の紐二本を附け、

下前になる方は端から二三寸入つた處にこれも同様に二本の紐を附ける。次に上前の横の端から一寸程入つた處に上端から二寸程下けてボタンを一つ附け、此處から刻込みに従つて少し進んだ處に小さいボタンを上下前ともに附けて置く(出來上り圖参照)。これで出來上るのであるが、これを後ろから襷襟に當て前の方に合せて紐を結ぶ。そして先端の山形になつて居る處はお股に挟

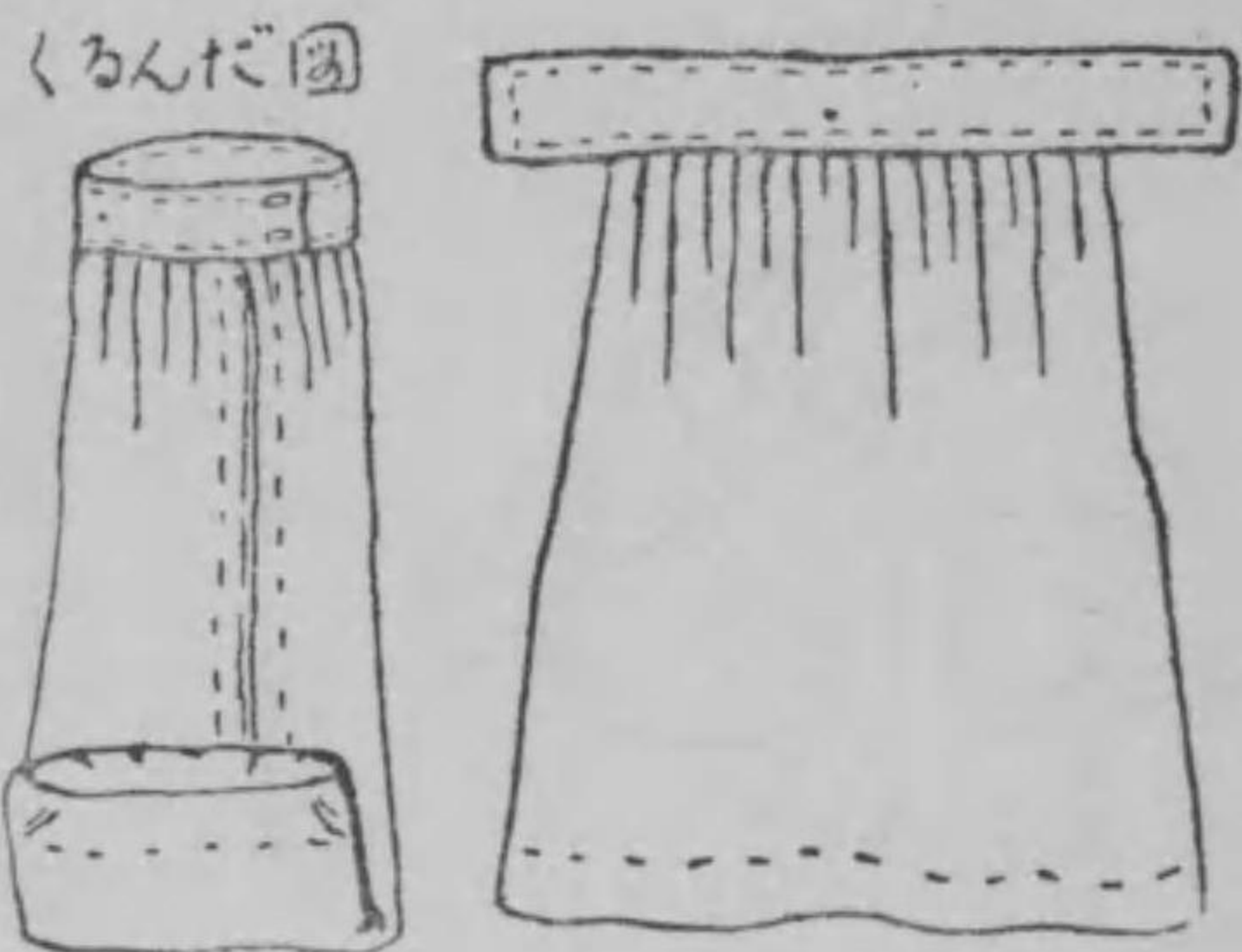
ませて前の真中に出たボタンに掛け、其兩脇に設らへた乳もボタンに掛けて留め置くのである。

第六節 襷襟おくるみ

これは襷襟の上をおくるみするもので、白のフランネルなどは一番宜しいが綿ネルでも差支へない。そして丈は二尺幅のもの二尺もあれば充分である。上端に附ける別布は新モスや其他の軟かいものを用ひるのであるが、長さ一尺七寸ばかりに幅七寸位あれば足りるのである。

縫ひ方。裾布となるべき切れ地の兩横は耳布の儘とし、裾折りは五六分の上りに縫つて上端は

圖 上り出來みおくるみ



一尺二三寸幅に縫ひ縮める。そしてこれの真中を別切れの真中に合せ、別切れの兩端を残して縫

ひ折りを別切れの方に返す。尙ほ別切れの上端はツナにして先きの縫ひ合せの處に折り返し、茲でまつつて置くか又は廻りにミシンをかける。

第七節 沓足袋

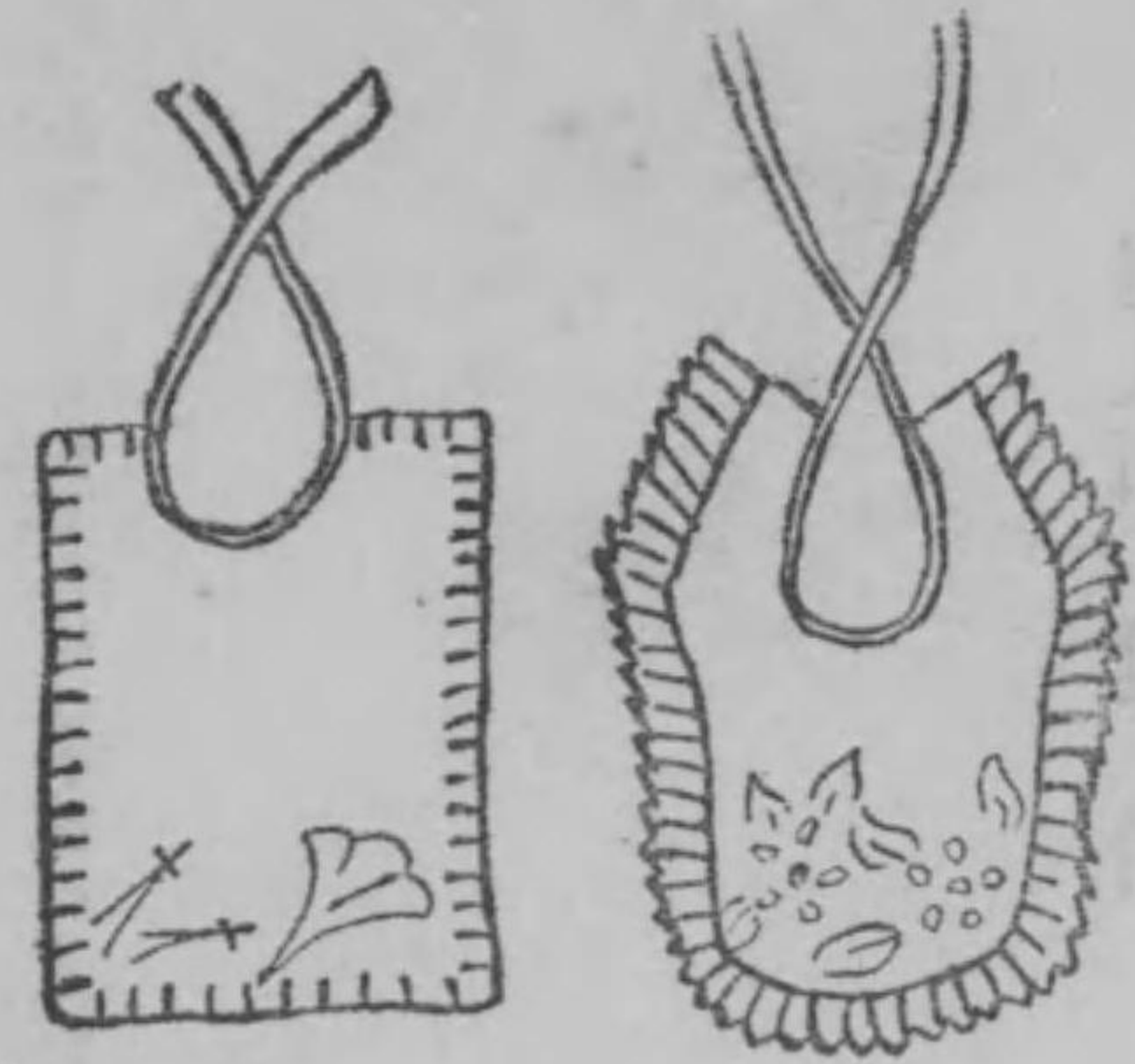


嬰兒は生後三四ヶ月頃になつたならば是非毛糸で編んだ沓下を履かせ、それから段々上着を短かくするに従つて柔かな靴を履かせる様にしたものである。然しこれは日本では仲々難かしい様であるが、少なくとも沓下だけは手編みで結構であるから必らず用ひる様にしたのである。

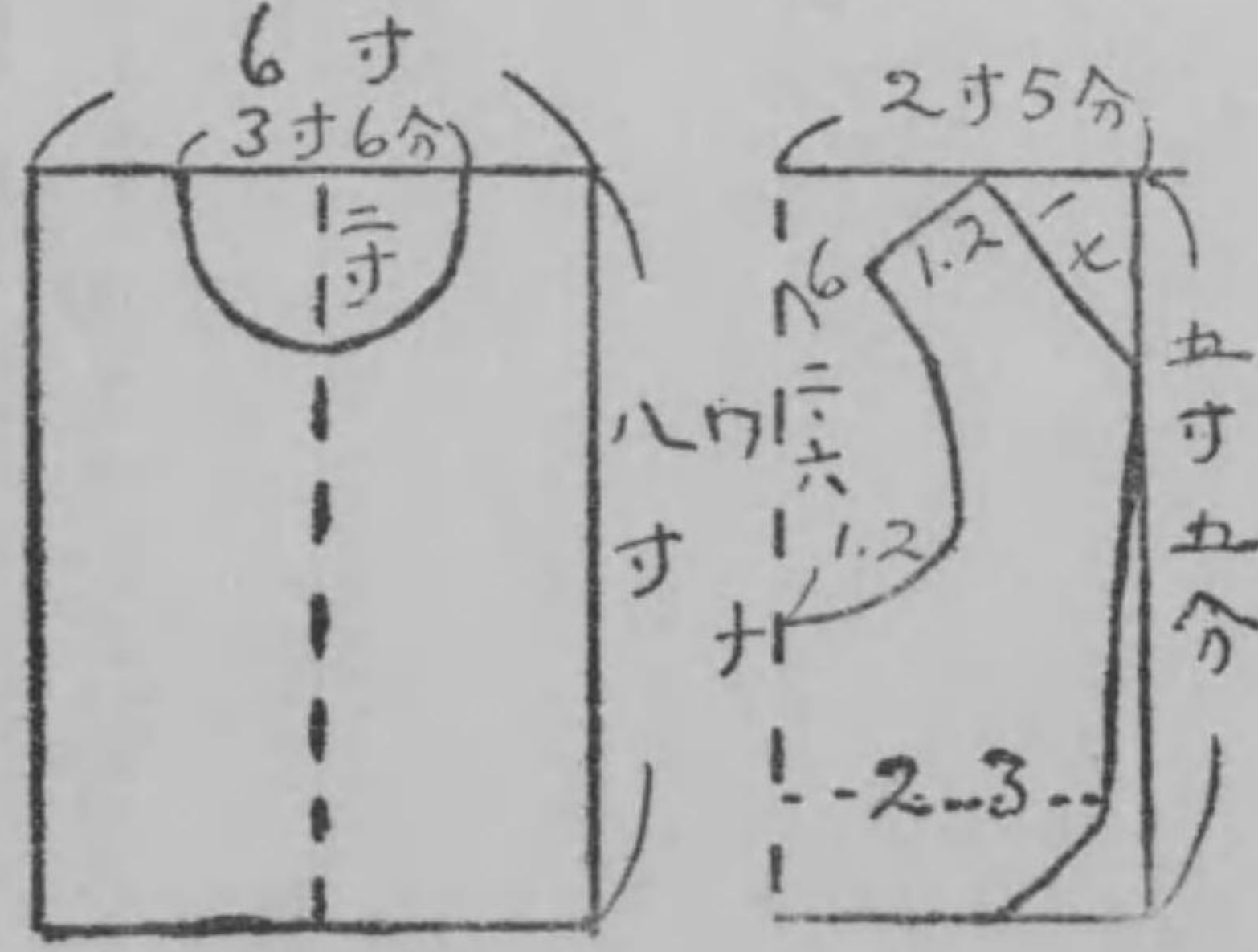
第八節 涎掛

涎掛出來上り圖

第一圖 第二圖



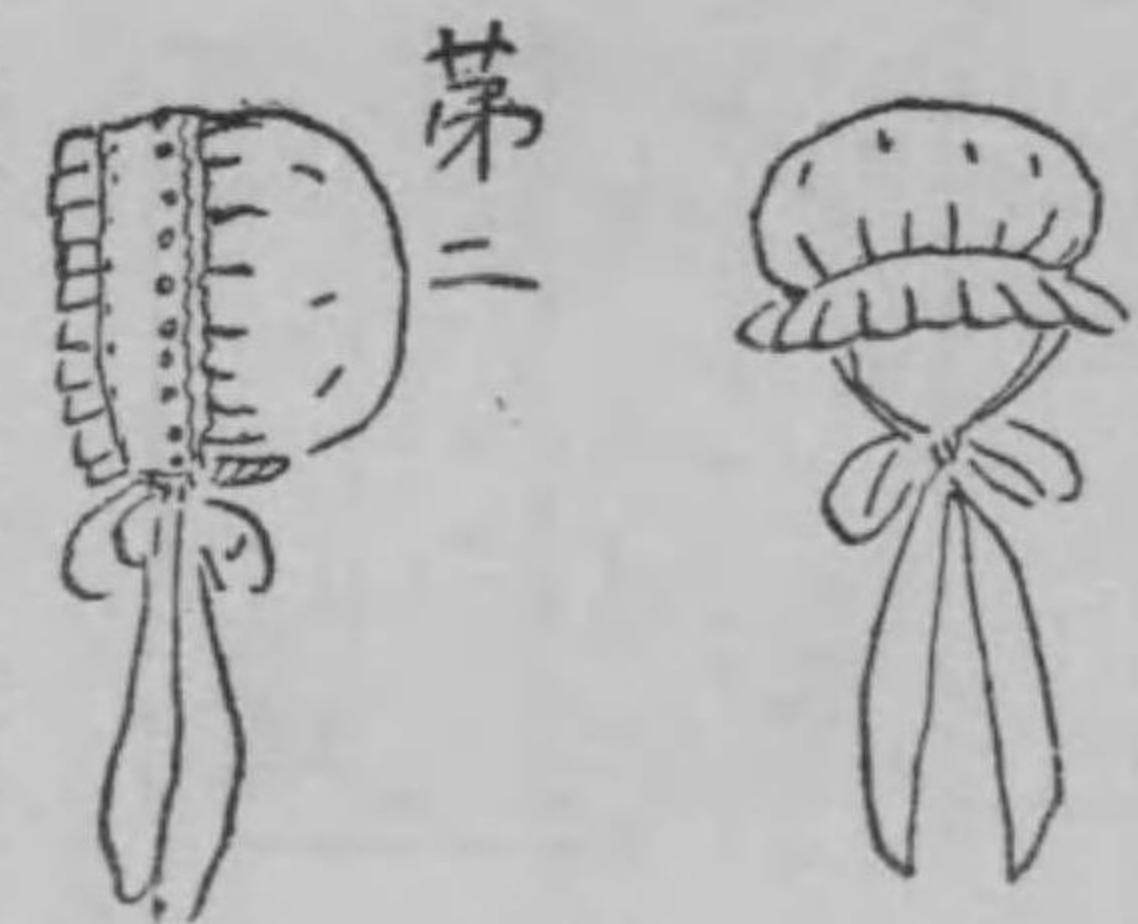
裁 方



用布は六七分幅の布レース二尺、表布はビケ、裏は白の綿ネル等が好い。

帽子出來上り圖

第二章 第一號嬰兒服一揃



第一の涎掛は先づ裁方圖の様に裁ち、表布の周圍に片耳布レースを少し縮め加減にして躰で押へ、裏布を當て、周圍を縫ひ合せる。それから所々に切り込みを入れて表に返し、衿元はテープで縁の様に包み兩端を六七分出してミシンをかける。

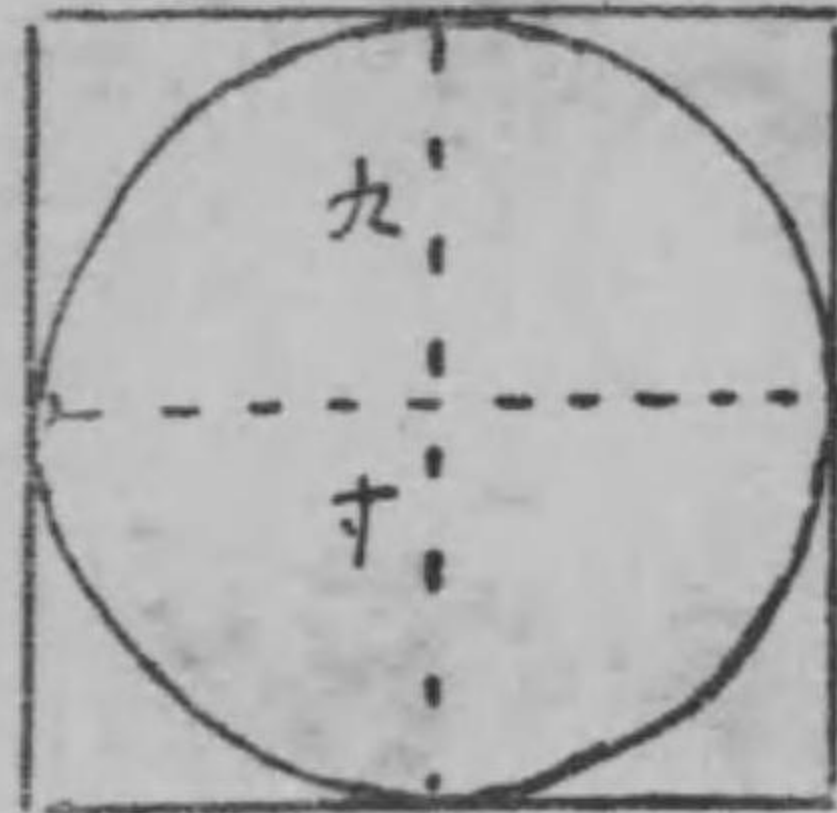
第二の涎掛は前と同様の用布で第二圖に倣つて裁ち、裏表の布を縫合せる時に周圍を刺繡糸で

スカラ縫ひにするのが宜しい。又此の前に表布にフラス刺繡でも入れると非常に引立つて來るのである。衿廻りの處は前述のものと同じくテープで紐を附ける。

第九節 帽子

用布。ナインスツク、ロオン、白麻、ビケ等。其他白色の絹布等を用ひても宜しい。又裏地は、極く薄地のものを撰ぶのである。

第一裁方



一、第一號型

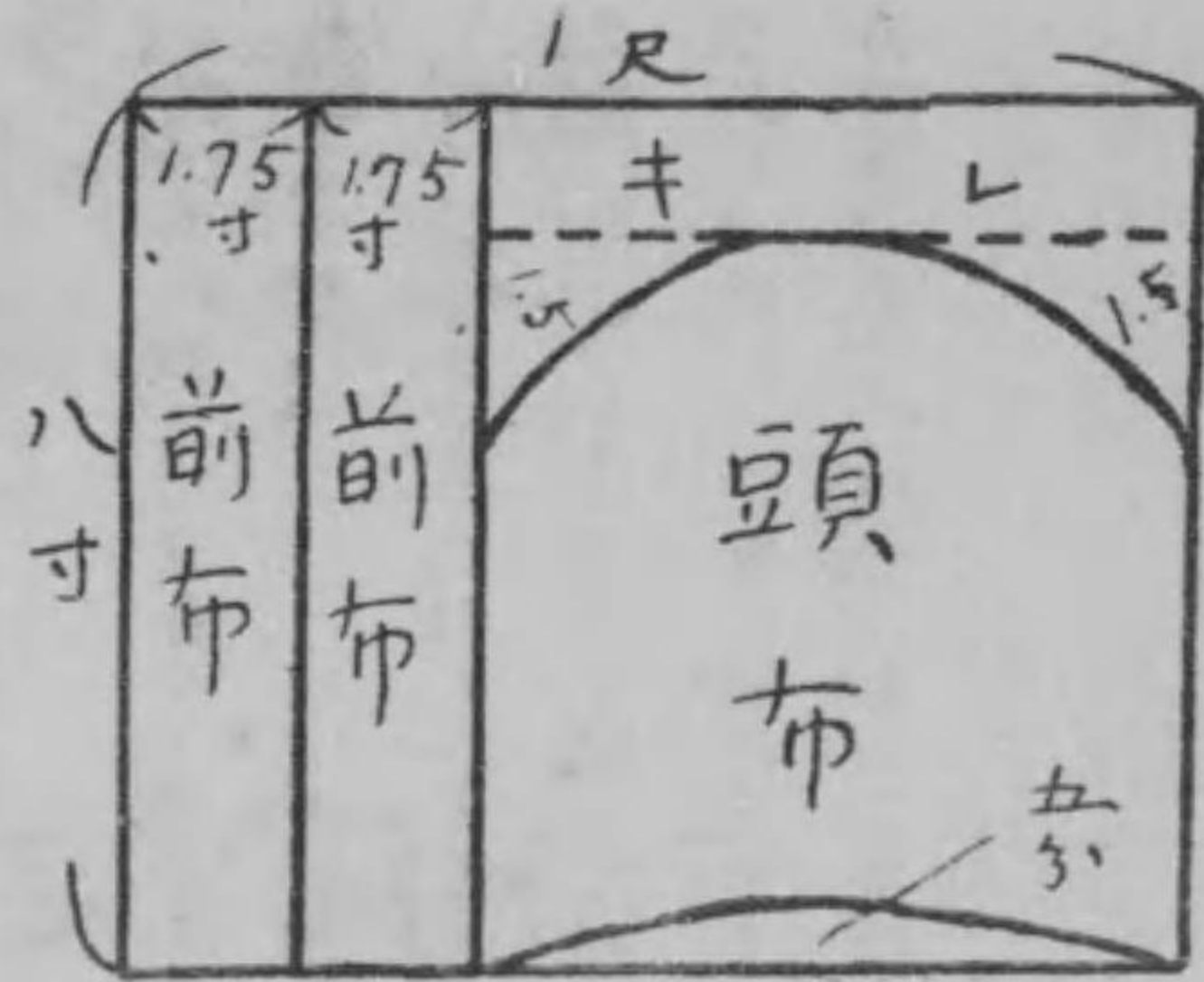
圖に示す通り直經九寸の用布と、幅五六分の片耳の布レース二尺八寸程あれば出来るのである。

縫方。先づ裁方圖の様に裁つてから表裏を綴ぢつけ、これを其子供の頭の大きさよりも七分位の緩味を持たして襷を取る。次にレースは端と端と縫ひ合せて輪となし

頭の寸法に倣つて襷を取る。(襷の数は幾つでも良い)それから前の頭布の襷の寄つた處とレースの襷の寄つた處との表と表を合せ、其上に斜の布を載せて縫ひ合す頭布にまつり附ける。そして兩横には一尺五寸位の軟かい絹すの紐二本を附けて出來上るのである。

二、第二號型

第二裁方



せて其兩端をまつり附けて置くと綺麗である。

用布は第一號と同じものであるが先づ裁方圖に據つて裁つたならば、頭布の中央から兩端に向つて前布の丈に合せて襷を取り、次に前布に一枚の蕊布を入れてから二枚の前布で頭布を挟み縫ひにし、前の端は兩方から中に折り込んで片耳の布レースの端を其間に挟んで縫ひ合せる。(レースは帽子の表の方に裏を出して挟む)それから下端には斜見返し布を表に合せて附け、裏に二三分の上り幅にしてまつりつける。尚ほ頭布の下端の間に、護膜テープを三四寸程入れて置くと適當に縮むのである。斯うして出來上つたならば、更らに前布の端の裏に適宜に縮めた五分幅位の軟かい糸レースを表に一分位覗か

紐は、第一號のものと同様に宜しい。

此の外、帽子には色々澤山の種類があるけれども、右の二種に留めて他は割愛して置かなければならない。

又、編物等で作つたものも嬰兒の間は結構である。これは白絹糸を一本針で編んだもので夏は其儘に用ひ、冬は毛糸で編んだ同様のものを内側に重ね、所々を留めて置いて用ひると誠に重寶である。殊に、之等は始終洗濯する事も出来るから至つて衛生的で經濟である。此の様に嬰兒服の間は、凡てに純白のものを用ひて常に洗濯の出来る事を心掛けるのが肝腎である。

第三章 第二號嬰兒服

前に述べた第一號嬰兒服を用ふる事は、從來用ひられて來た和服仕立のものに較べて衛生上から經濟上から、又は嬰兒を取扱ふ上から見て非常に優つて居るものであるが、何分昔からの習慣上、我國の多くの家庭でこれを用ふる事は大變に其取扱を不便がり、臆惑がる風があつて仲々洋服に親しんで來ないのである。それで私は、我國の習慣に従つて洋服の長所を取入れた和洋折衷式のもの考案して用ひる様にした處が、何れも好評の様であるから、次に第二號の嬰兒服としてこれを述べる事にする。

最初二三ヶ月の間は此の折衷式のものを用ひ、段々と純洋服に移つて行く日本服は一枚も作らないで育てる事が出来るし、用布なども綿ネルの白を用ふれば經濟でもあるし、衛生的でもある、襦袢は晒木綿で良い。兎に角赤ん坊の間は毎日洗濯をしなければならぬものであるから、右の嬰兒服の様に單仕立になつて居て乾きの早いものが最も便利とされるのである。それに洗濯

の場合でも、日本服の様に手数は要らないし、揃ひのものが三組あれば充分事足りるのである。

左の圖の中にはマントもあるがこれは巻蒲團の代りとしてこれで包むのである。さうすると、思ひ掛けの無い處から風の這入る事もないし、抱くにも便利である。又偶に外出する場合等都合良く利用する事が出来る。萬一從來の習慣上これ丈では寒いと思ふ様であつたら眞綿などを入れて作ると宜しい。用布はカシミア等なれば上等である。

出來上り圖

下着

襦袢

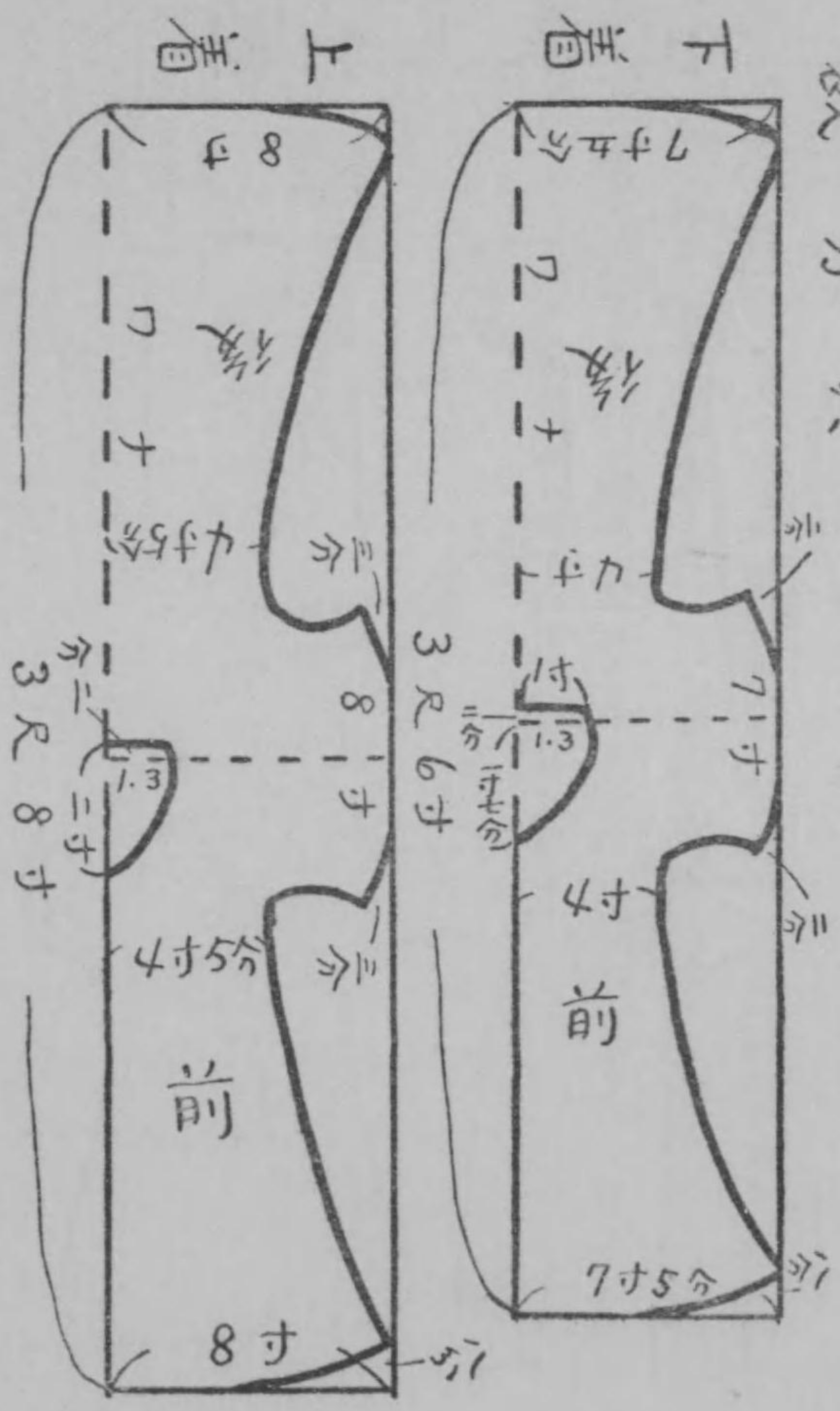


マント

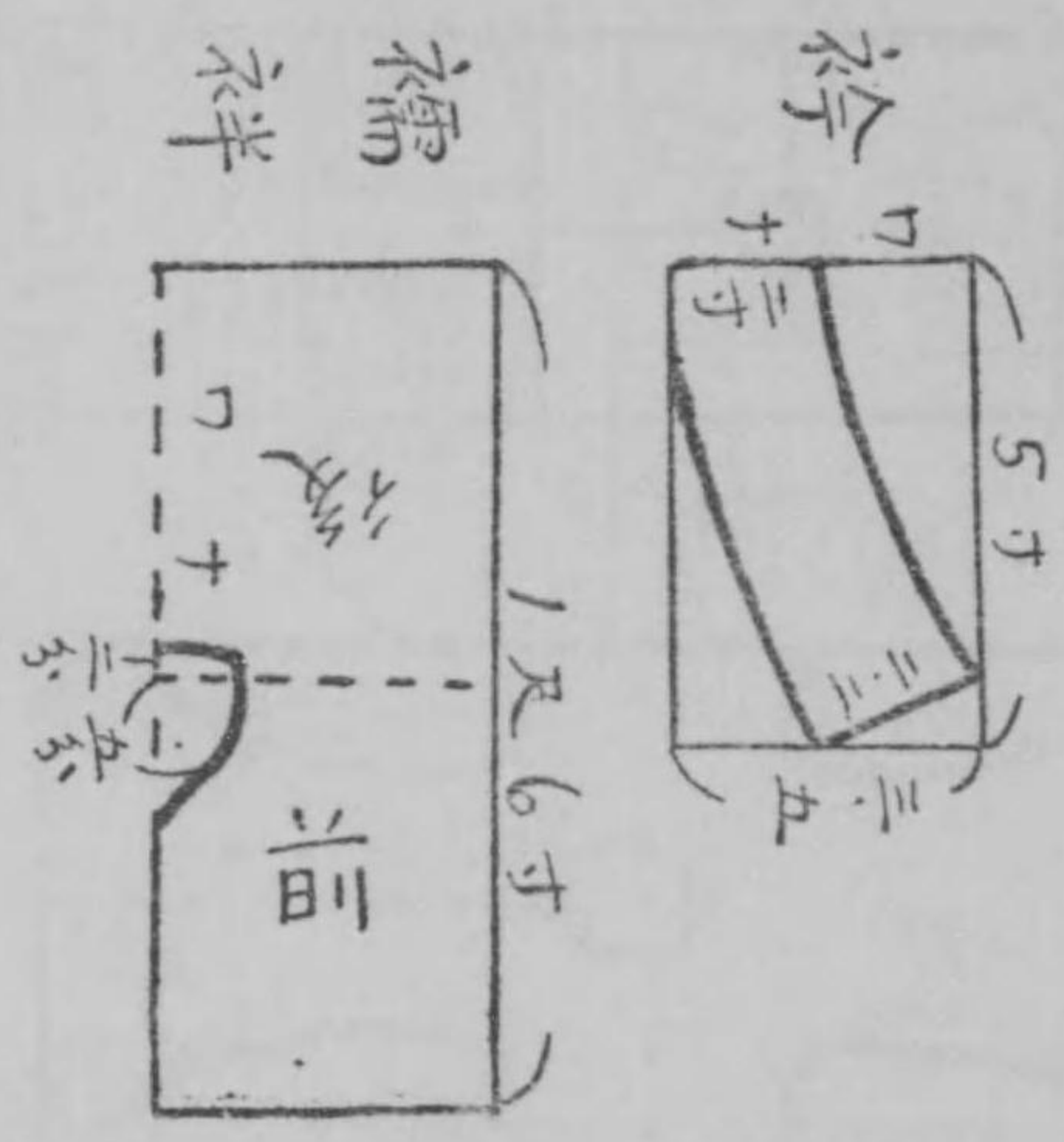
上着



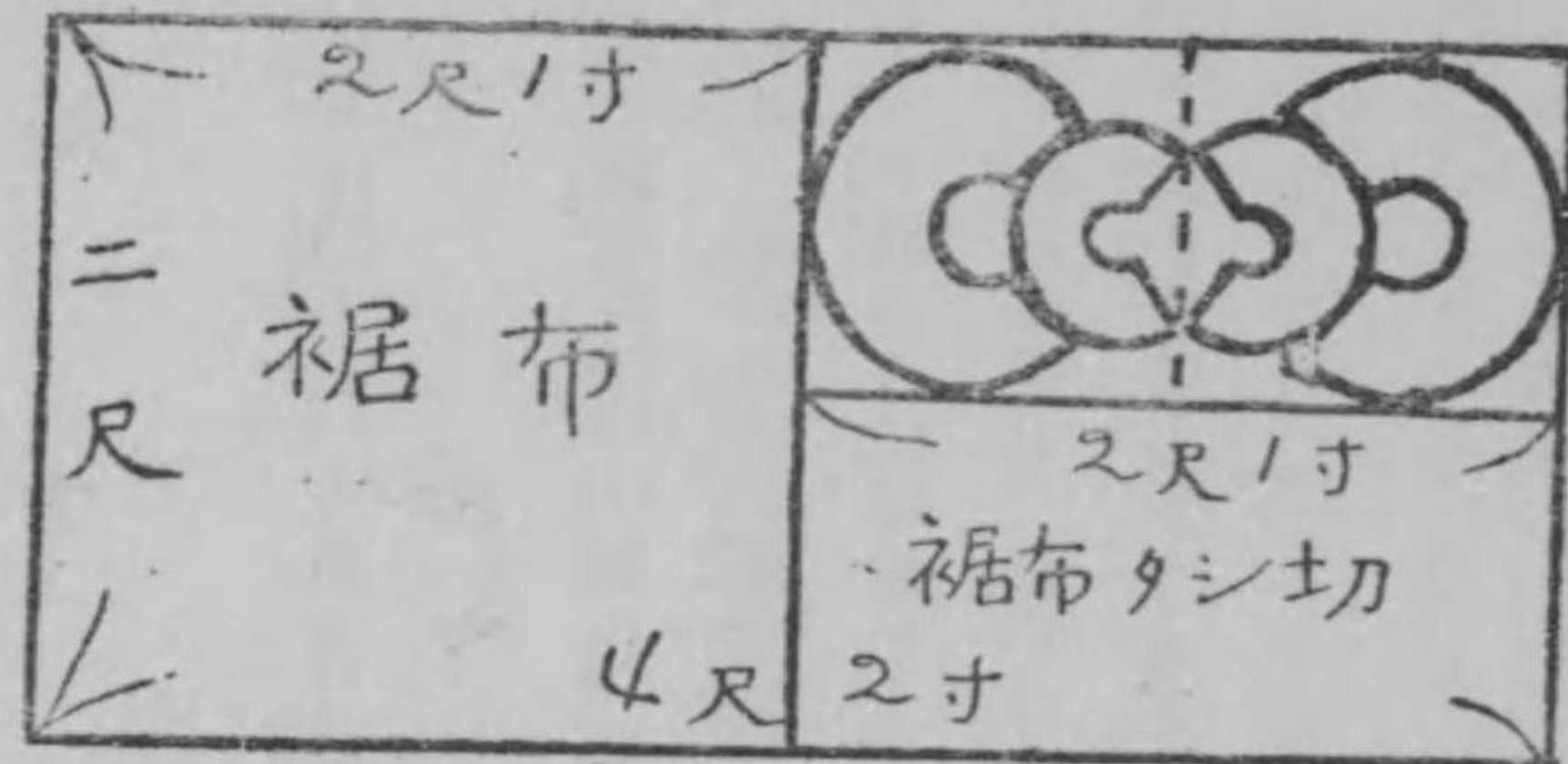
裁方 其一



裁方 其二

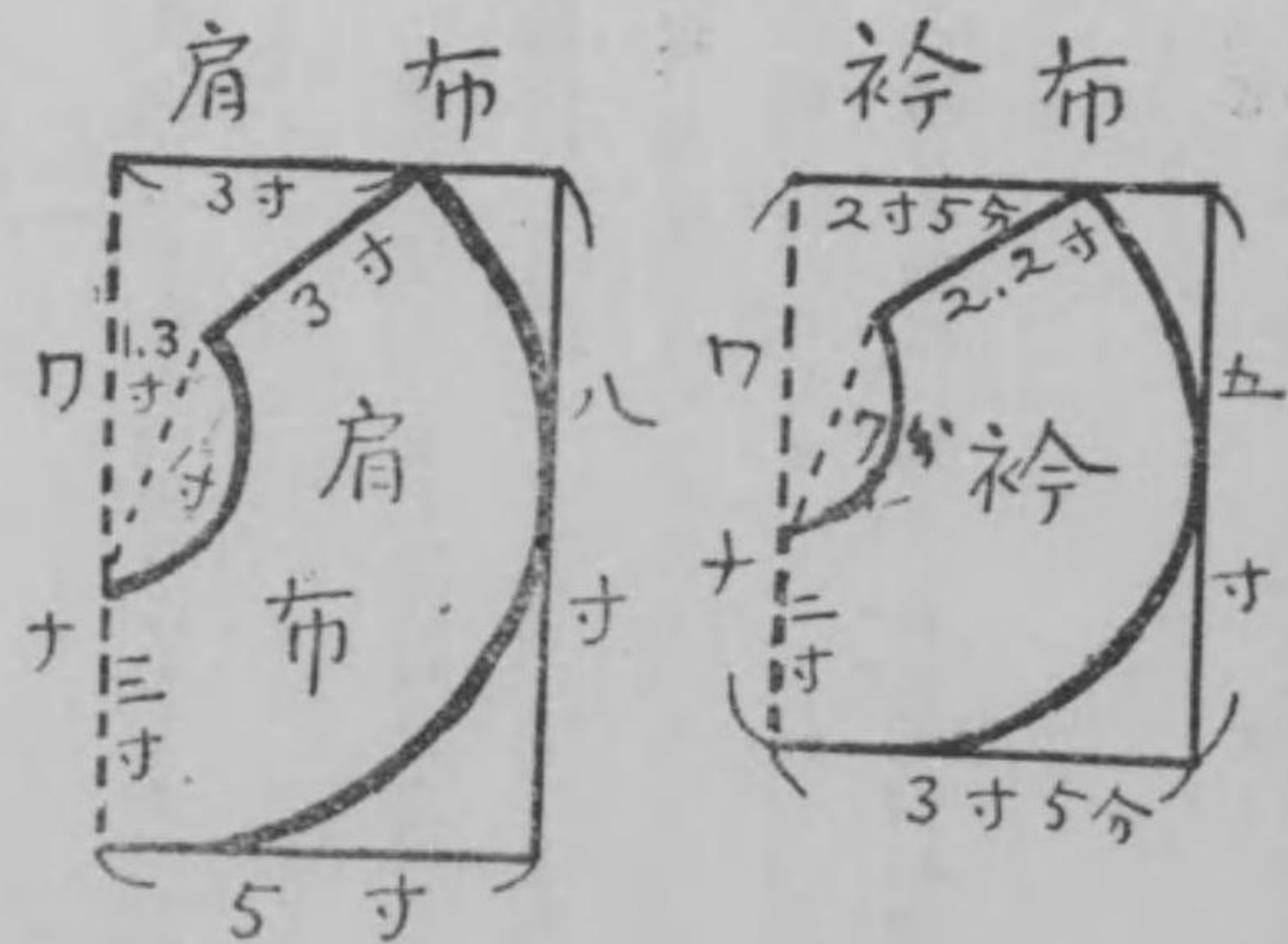


総合圖 マント
(おくるみ代用)



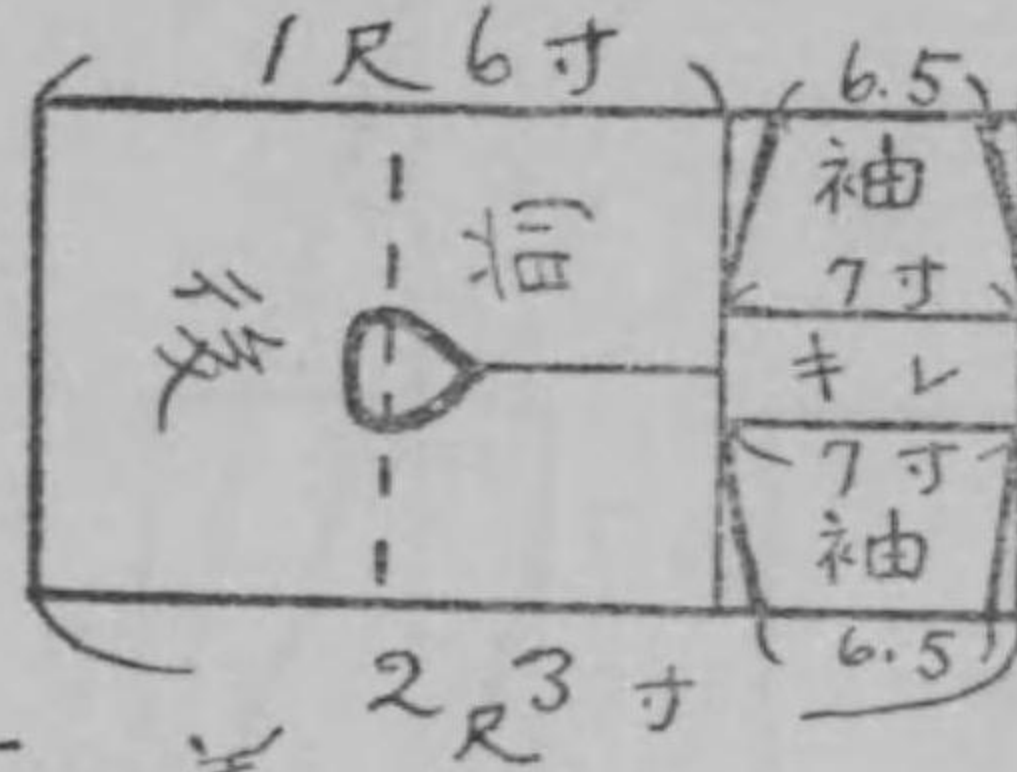
(裏布は裾布だけ二枚おくるみはよろし)

マント裁方

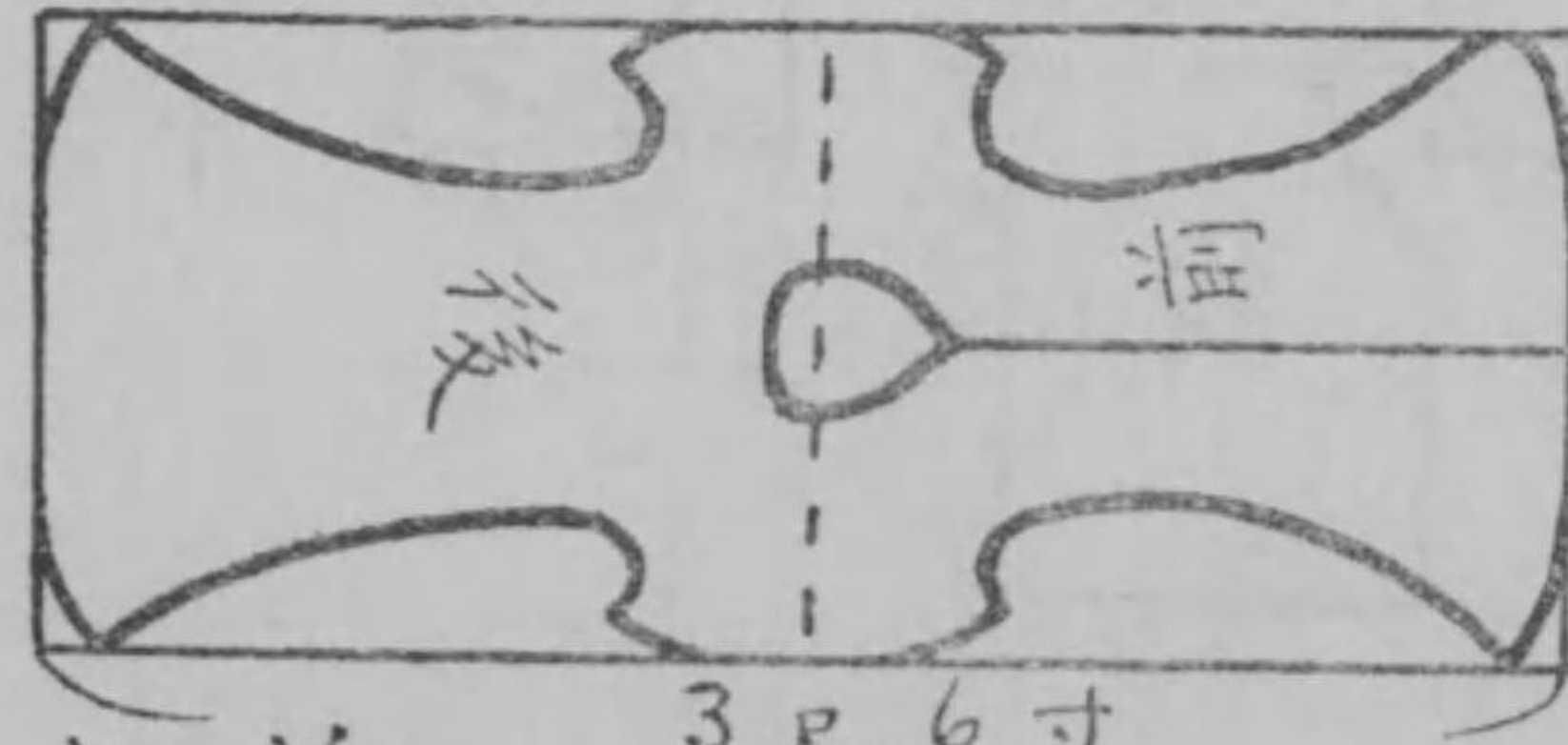


総合圖

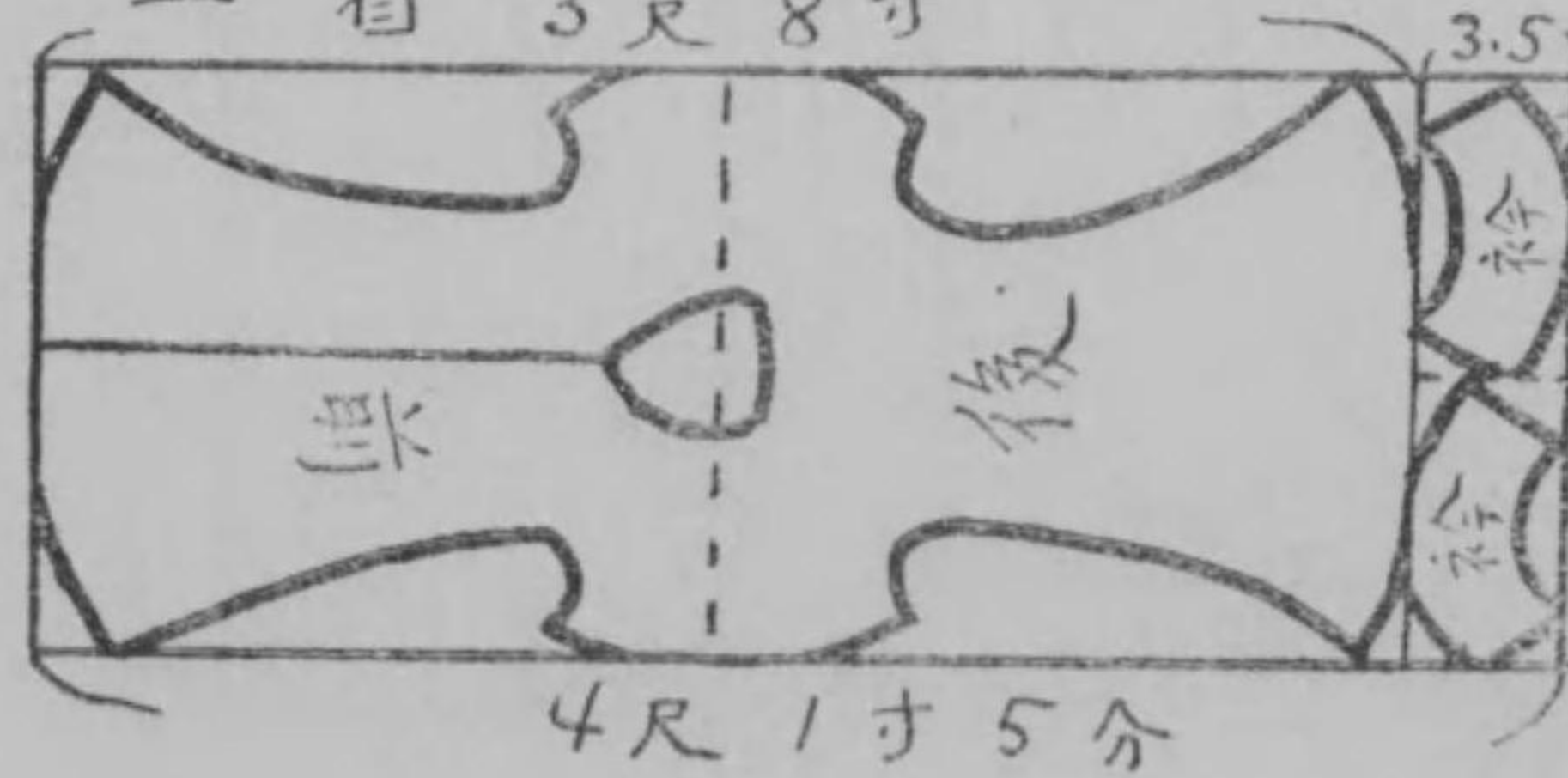
襦袢



下着



上着 3尺8寸



縫方

一、襦 袷

圖の様に裁つたならば袖下は一方出して縫合せ、更に出した一方を一つ折りにしてまつり附けて置く。

衿廻りはテーブ布で縁取りの様に包み、兩脇を縫わせて袖を附ける。そして縫目は全部表の方に出して置くのである。裾は裁目の儘を木綿糸でまつり縫ひにして置く。又紐は、切つた布を其儘用ふるのであるが、下前の方には長いものを、上前には三四寸のものを附ける。そして下前の紐を上前の脇に道して後ろに廻し、前に持つて来て上前の紐に結び合わせる。(これは一つ結びでしい)尚ほ紐を廢して釦止めにしやうとするならば、縁を附ける前に、兩方に見返し切れを附けて置くのである。

二、下 着

下着は兩前に見返し切れを縫合せ、裏に折り返してまつり附けて置く。それから袖下から脇に

かけて前後を縫合せ、折りを前に返して千鳥がけになし、袖口は裏に折り返してまつり附けるのである。衿廻りは斜布を表に合せて縫ひ、裏に折返してから上り幅を二分位に身頃にまつつて置く。裾は、一寸位折り返し、之れを三つ折りにまつり附ける。

終りに上前の衿元の一つと、それから二寸五分づゝの間隔を置いて二つと、都合三つの釦穴を明け、下前の同位置に釦を附ける。

三、上 着

下着と同じ様に脇縫ひまで済まし、それから二枚合せた衿は一方を残して縫ひ合せ、圓味の處に切り込みを入れて表に返し抑へ置く。そして衿の真中と後身頃の真中とを合せた上に斜布を當て、縫合せ、裏に返して二分位の幅にまつり附けるのである。(此の時兩方の衿先から五分づゝあけて衿をつける)裾折りは下着と同じ様に、一寸位折り込んでまつり附けて置く。釦穴も同様下着に倣つて三つか若くは四つの穴を明ける。

これで出來上るのであるが、更に袖口と衿廻りの處にフランス刺繡糸を持つて刺繡を施すと大

變可愛いものになるのである。

四、マント

先づ裾布を縫ひ合せて縫目を開き、裏布も同様に縫ひ合せてから兩布の裾を合せて表に返し、兩横の表は恰度額縁の様に少し中の方に折り返して置く。それから上部を合せて縫縮めをなし、肩布の表裏に挟んで縫ひ合せ、表に返すのである。衿は一方を残して三方を縫ひ合せて置いたものを衿廻りの上に載せ、これも斜の見返し布を當て、裏の方にまつり附ける。そして衿元の兩端に配合の良い少し太目の紐を附けて置くこと可愛いのであるが、尙ほこれにも小衿に刺繡をなすと一層引立つて綺麗に出來上るのである。

第四章 二三歳幼兒服

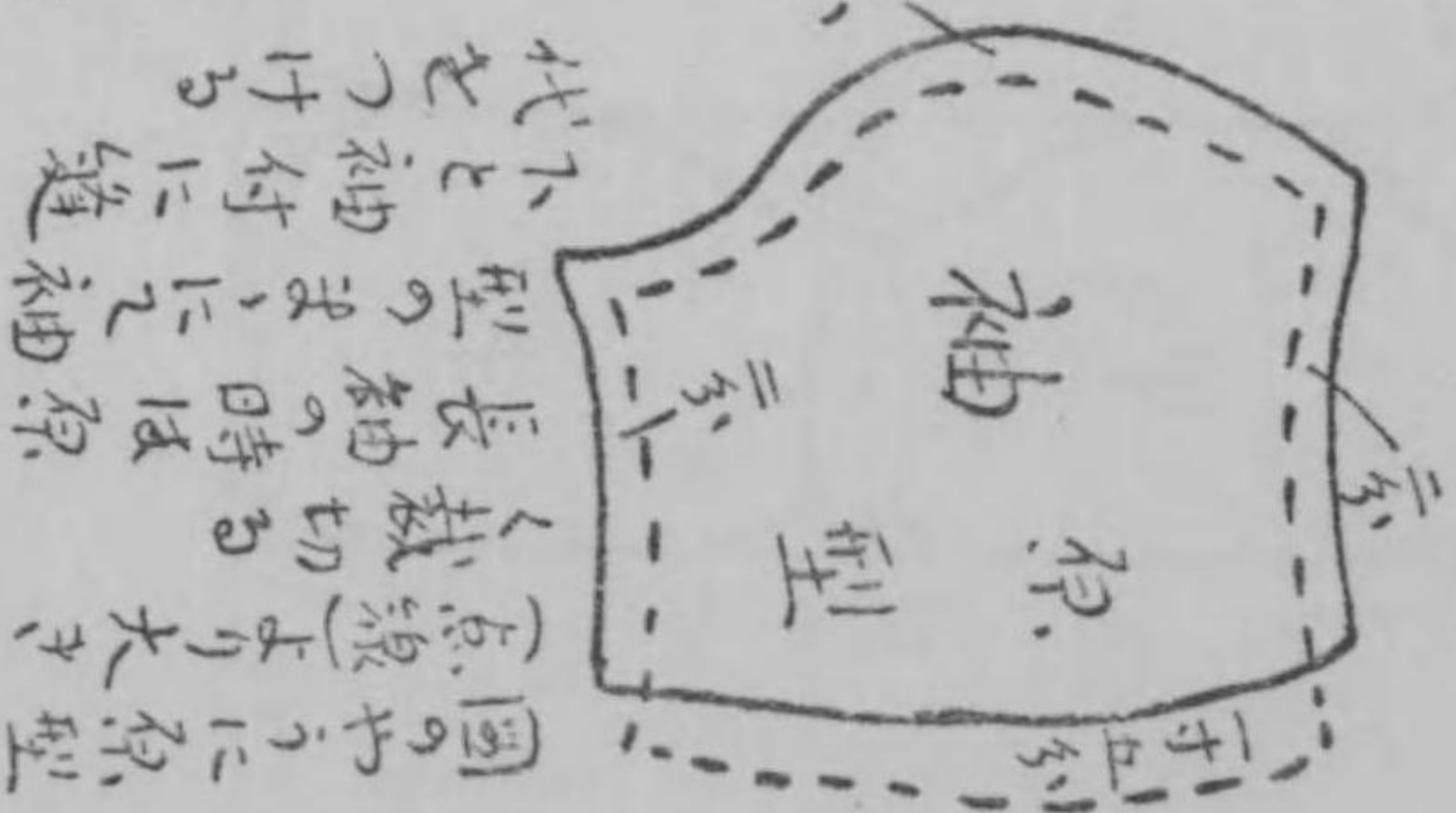
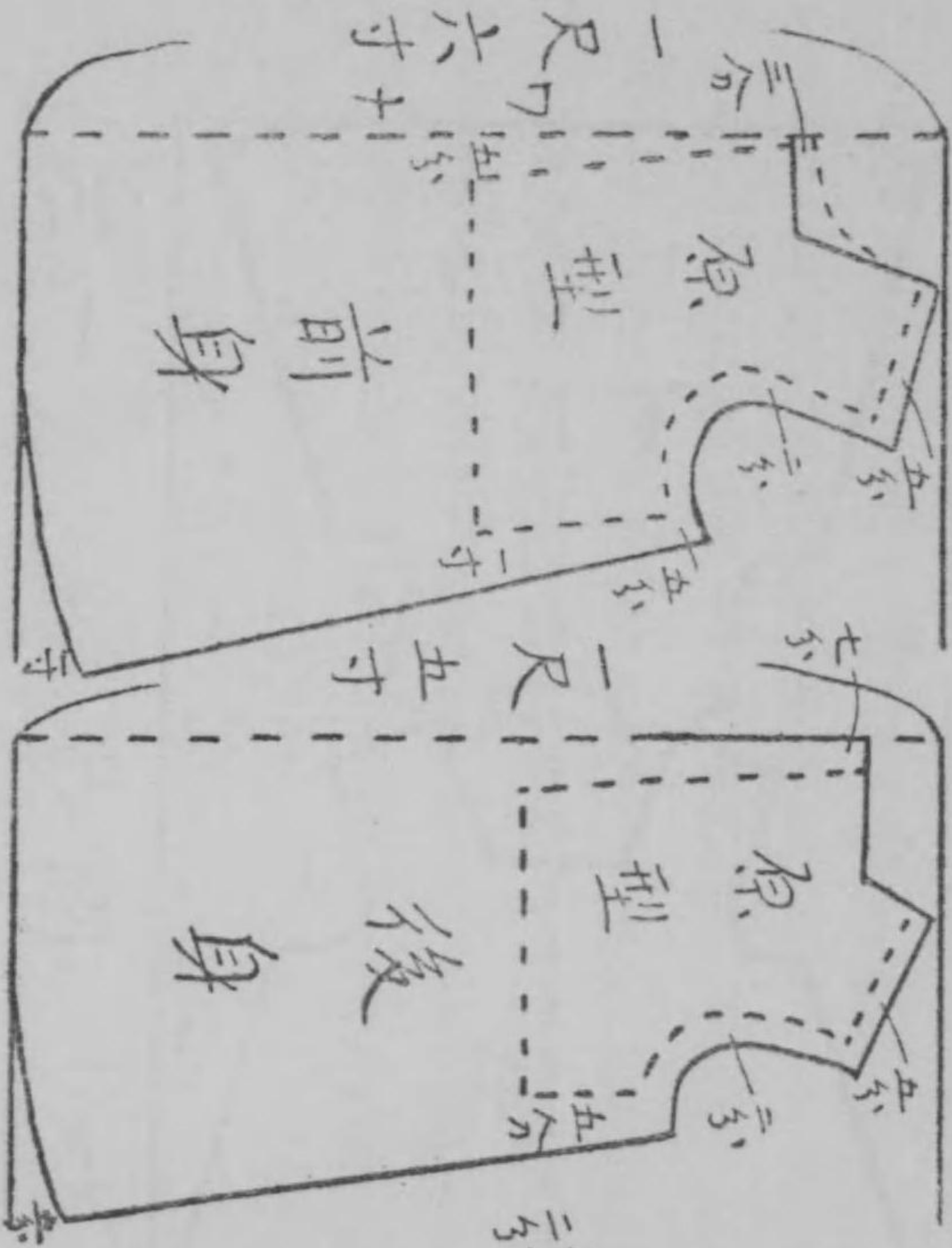
二三歳の幼兒服と云つて色々澤山の型があつて一概には述べ難いものであるが、然し或る一種のものを確然と理解するに至つたならば他は繪形に依つてそれを應用して、如何様にも裁つ事が出来るのである。それ故に此處には多數のものゝ煩を避けて、代表的なものゝ二三種を擧げて述べて行くに留めるのであるから其事にも留意して貰ひたい。

第一節 第一號

二三才幼兒服
出來上り圖
後 前

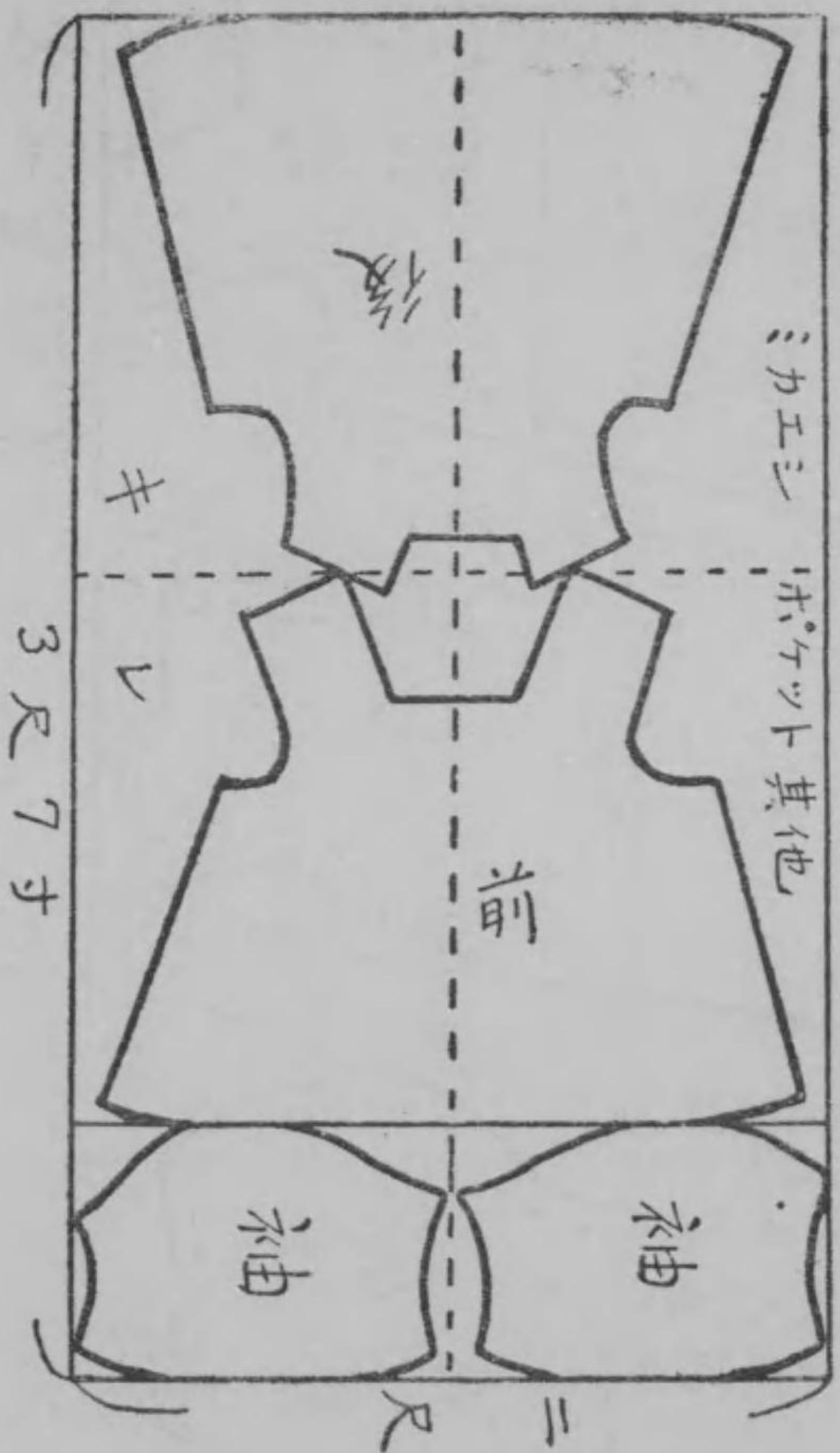


第一号裁方



圖のやうに原形
(点線より大き
く裁切る
長袖の時原
形のまゝに袖
下と袖付に縫
代をつける

第一号 總合圖 (二尺幅)



第一、裁方

前述原型の作り方に倣つて二三歳の寸法で第一號裁方圖の原型を作り、次に之れを用布に當てゝ成るべく無駄切れの少ない様に裁ち落すのである。

先づ用布を二つ折になし、次に裁方總合圖の様に總丈に裾折二寸の肩の縫代三分とを見て後原型を布の上に置き、ワナの方から七分離して裁方圖の如く縫込みを附けて裁つ。

落布も後と同じく布を縦に折つてワナになし、前原型を當て、衿首の處をワナ布と合せるが、此の時に下部は五分程離して原型を少し斜にすると布全體が弛んで出来上りが非常に良い。(尤もこれは出来上り圖に贅のない場合に布をゆつたりと取る方法である。)斯うして後と同じ様に裁つのであるが、更に袖が半袖である場合には袖口から一寸五分位で裁ちおとし、縫込みは二分若くは三分づゝ附けて縫つ。

第二、縫方

袖下の袋縫にしてから、袖口を裏に三分位の上り幅に折つてまつりつけて置く。次に後身ワナ

の切込みのところ（下前—後の左）に見返し布を表から當て、縫ひ合せ、裏に折り返して六分位の上り幅にまつり付ける、上前（同じく右も同様に六分上りに裏に折り返してまつる。そして下前と上前とを重ね、切込みの下端は特に丈夫にミシンで留めて置かなければならない。前後の兩脇を袋縫に縫合せて折りを前に返し、裾折をなす。裾折をするには先づ脇の縫ひ目を揃へて角張らぬ様に切り揃へ、總丈を定めて折り返し、膝で抑へて裾折幅を揃へ、奥の方で所々に小さい襷を取つてまつるのである。

其次には前後の兩肩を合せて袋縫にし折を後に返し、衿元には斜の見返布を表を當て、縫ひ合せ（角々には小さい襷を一つづゝ寄せて縫ふ）、裏に折り返して二分の上り幅にまつり付ける。袖付は袖下の縫目を脇の縫目から一寸三分位前に寄せて前身頃を合せ、袖を少し緩め加減に膝でおさへ、身頃の肩山の處を起點として、後に一寸前に一寸位の間で袖を少し縫ひ縮める様にして縫ひ合せる。其時に見返し布を身頃の方に宛て、三枚一緒に縫ひ合せ、縫目を包んで縫目にまつり付ける。

そして釦は、後上前の衿元に一つと其下を三等分して各々三分位の横穴を明け、この穴かがりが濟んだならば、これに對して下前にシャツボタンか又は小さい飾ボタンを附ける。

又衿元と袖口には、用布の色と配合の好いフランス刺繡絲を撰んで二三本合せ、これで少しあらく又は短針と長針等の變化を見せて、恰度穴かよりの様に絲をかけて飾縫ひを施すとなく、面白い出来上りとなるものである。

尙ほポケットは各々其人の好みに從つて可愛らしい恰好を撰ぶ事が必要であるが、其位置は手を垂下して手頸の丸骨の處が適當である。

第二節 第二號

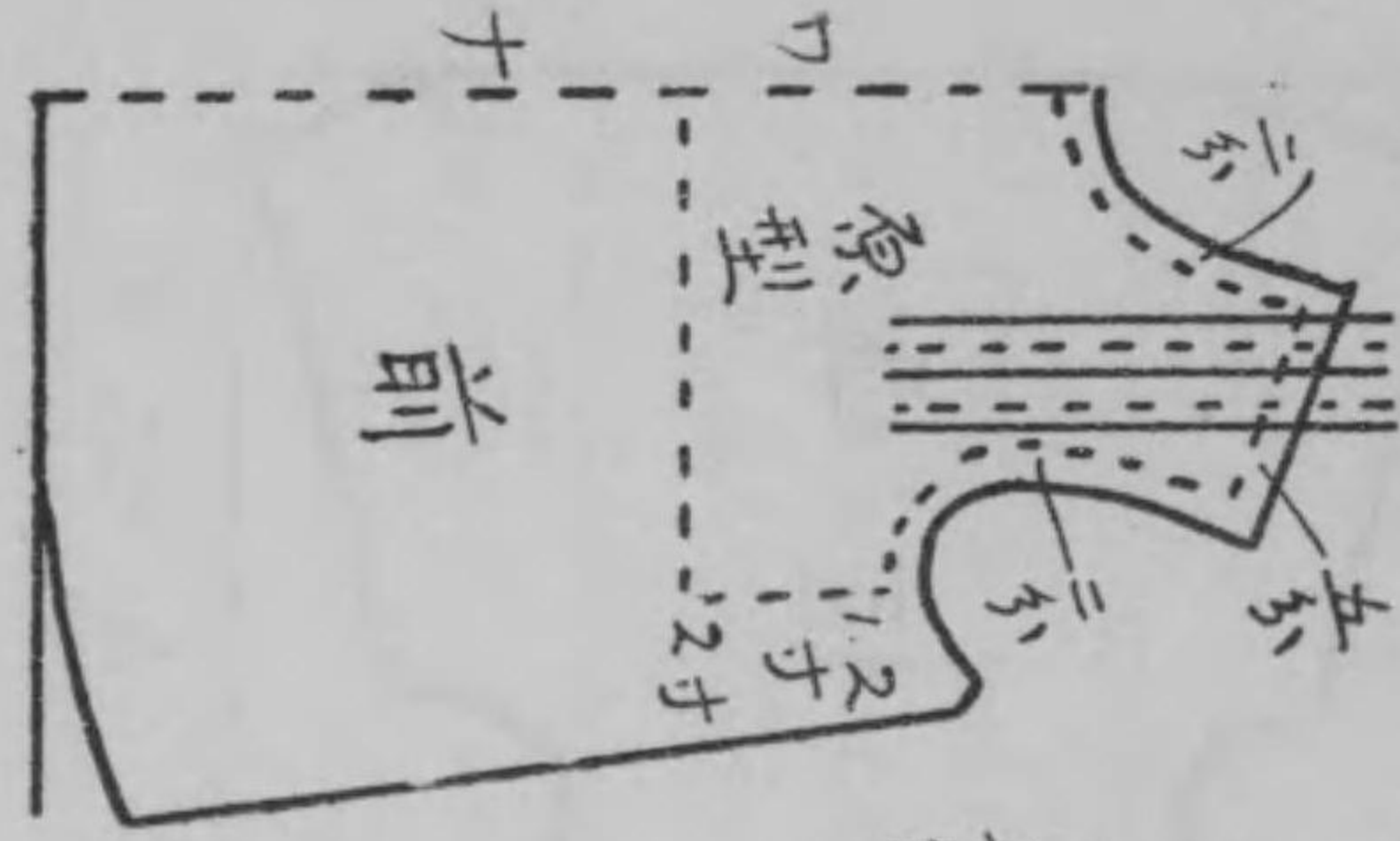
出來上り圖

兒童の洋服

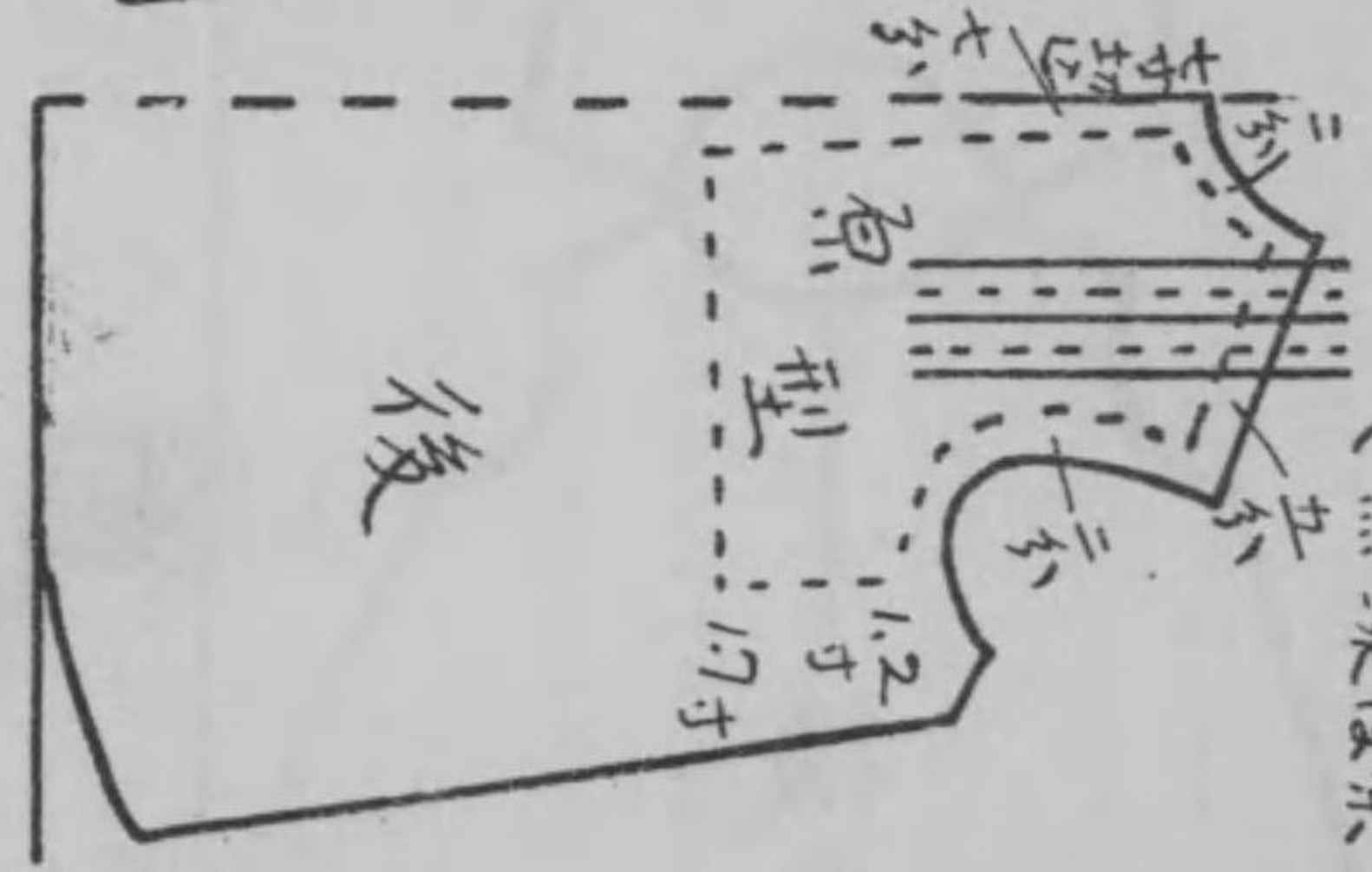


六四

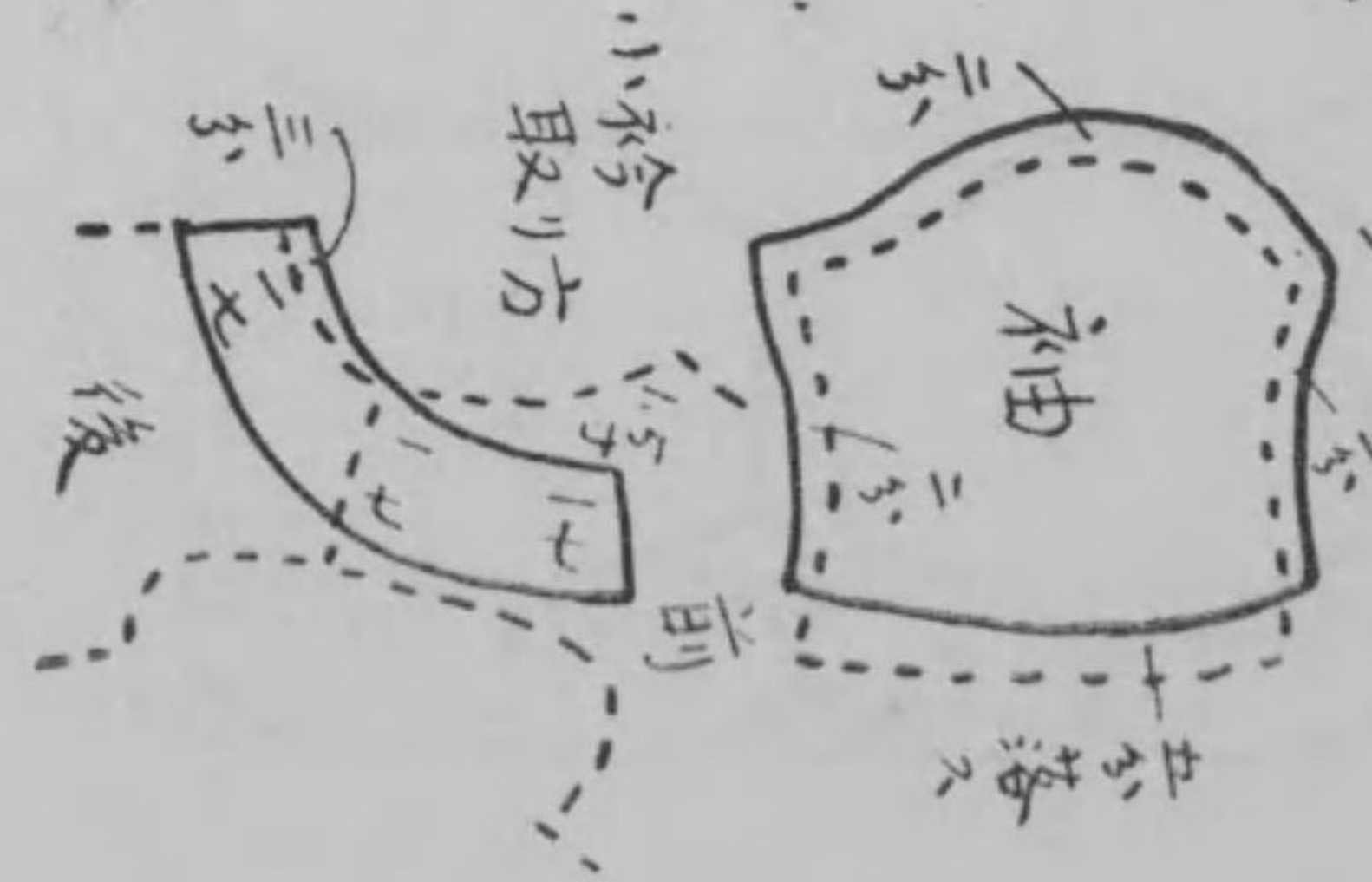
第二号裁方



第五章 四五歳女兒服

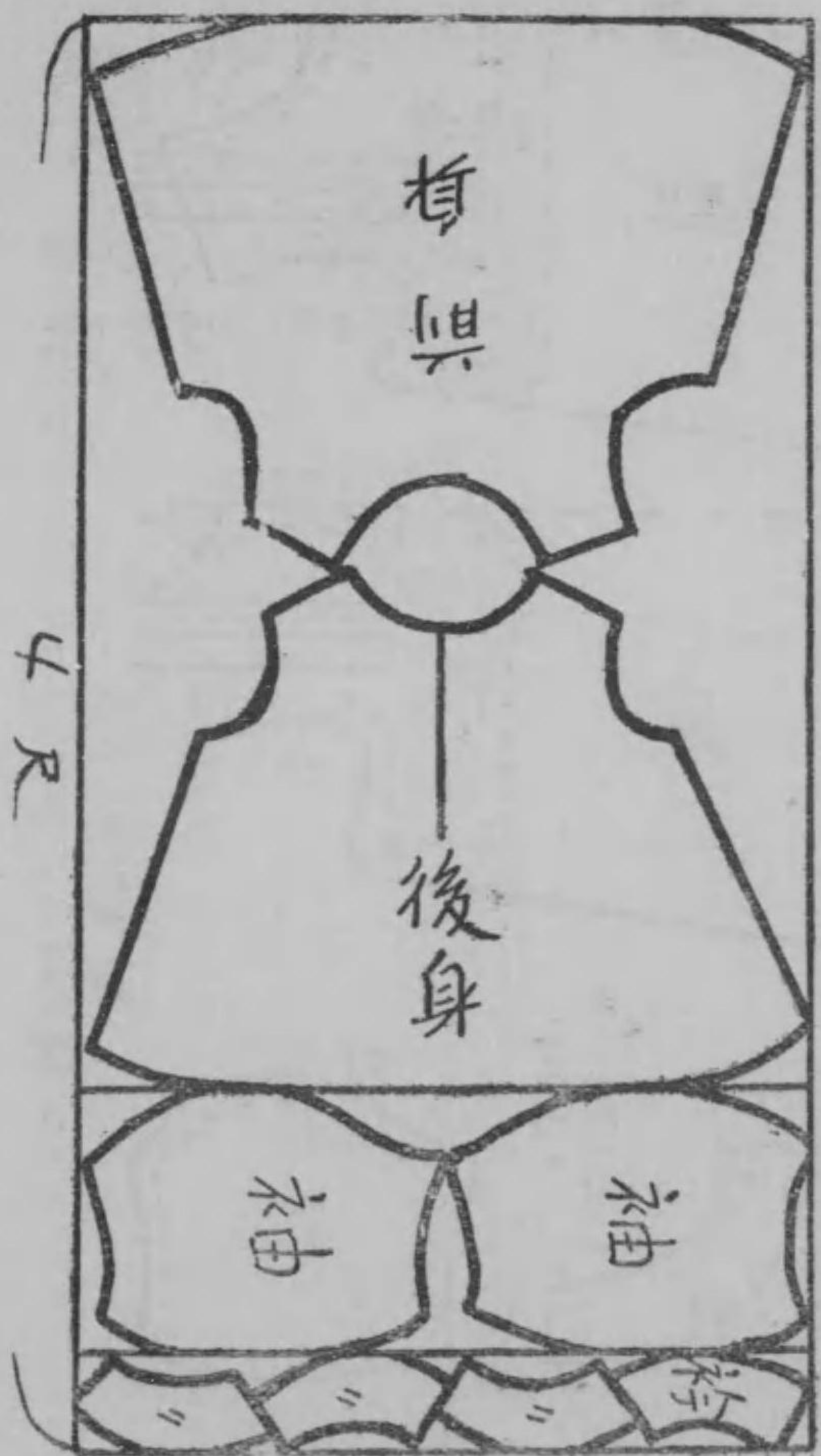


(初めに「ガ」を取り裁つ)
(点線は原型)



六五

第二号 總合圖 (二尺幅)



第一、裁方

此の恰好は前、後、脇に一つと、尙ほ肩にも襷が寄せられてあるから、裁つ時に注意する事が肝要である。それには最初に用布から前後とも裾折りや縫込み等も入れて裁ち落とし、前布を二つ折にしてワナの方に原型を當て、出来上り圖の様に先づ兩肩の處に三本程の小襷を取る。即ち衿ぐりから五分程離して標をつけ、そして出来上り二分の時には第一の襷を二分つまみ、第二はそれから六分程はなした處を襷山にして二分揃み、第三の襷は更に第二から六分測つて二分つまむ。(一體に襷と襷とが重なるのは大變見苦しいものであるから、右の様にするると重なる事もないし樂に取る事も出来る。)そして折は兩方共脇の方に返し、襷の長さは五六寸縫へば宜しいが其の絲留めは縫先を裏にして上下の絲を抜き出し、布の裏に二本揃へて結ぶ。後の布も眞中に切込みを入れて第一號と同じく下前上前を作り、上前に原型をあて、前身頃と同様の襷を取り、折りは兩方共脇の方に返す。それから裁方圖の様に原型を當て、脇ヒダの分として上部で一吋二分位折り込んで前後とも裁ち落す。

袖は原型よりも袖口分丈短かく裁ち、衿は前後の原型の肩の處を圖の様に合せ下に別紙を入れて原型を作り、それに當て縫込みを附けて裁ち落す。

第二、縫方

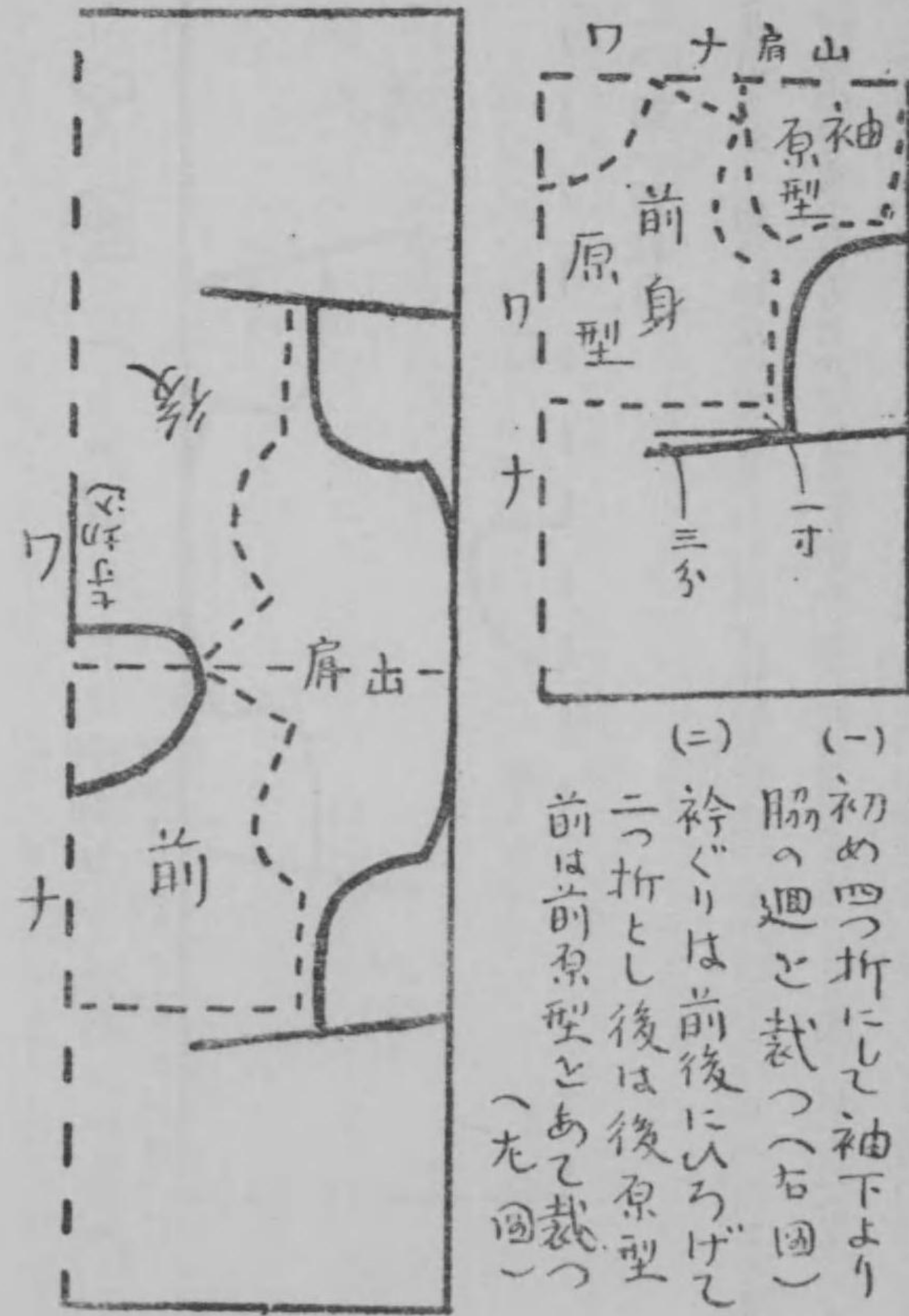
最初に袖下を袋縫ひに縫ひ合せる。袖口は袖下から兩方に各一寸位づゝ残して縫ひ締め、丸く縫合せた袖口布の表を袖裏と縫合せ、三分位の上り幅に二つ折にしてミシンでおさへる。此のミシンを掛ける時には、袖の表を内側にしてクルクル廻し乍らするのが最も容易である。後身頃は切込みを第一號の縫方と同様にして前後の脇を袋縫ひになし、裾折りも第一號と同様にする。次に前後の肩山を縫合せて折を後に返し、衿は表裏を三方縫合せてから、外の方に切込みを入れて表に返し、飾りミシンを掛けて衿元に當て、身頃表と衿と見返し布と三枚一緒に縫合せて身頃裏にまつり附ける。袖付けは先づ身頃の脇の縫目を真中に、前後から襷を取つて縫目の上に兩方からつき合せ、袖ぐりを直して袖下の縫目を脇の縫目よりも一寸三分位前に寄せ、脇襷も一緒に縫合せて第一號袖付けと同じ様にする。ボタン付けも第一號と同様である。

第五章 四五歳女児服

前述のやうに原型の割出し方は全く一樣の方式に據るものであるから、最初四五歳の寸法に依つて原型を作つて置いたならば、其原型を應用して色々に裁つ事が出来る。

第一節 第一號及び第一號參考

第一号裁方



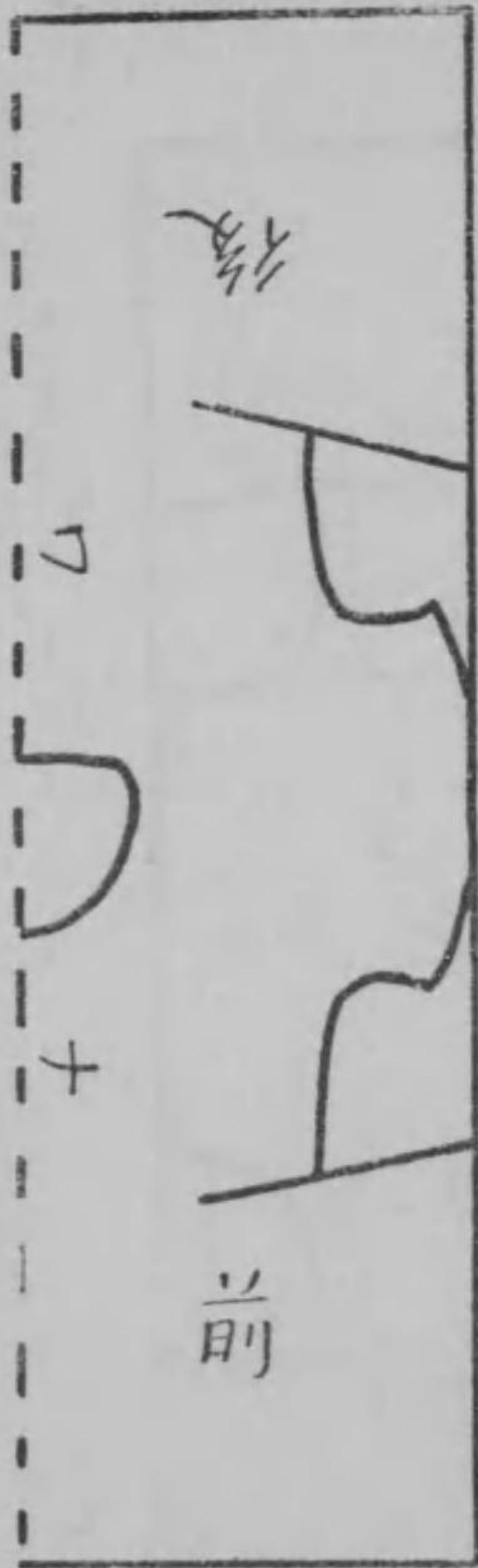
第一号参考
出来上り圖

第一号
出来上り圖



總合圖 (ニ尺幅で)

参考の分は裾丈と袖丈
七尺より裁き替へばよろし



第一、第一號裁方

これは袖と身頃とが一続きになつて居るから割合に簡單に裁つ事が出来る。先づ繪形を見て、脇の切込みが原型の春丈よりも上か下かを見定める事が必要である。(此繪では七八分上である)それから裁方圖の様に布地を縦に二つ折りにし、更に六七分前後の差をつけて四つ折にする。

そして前身頃の原型と袖の原型とを當て、袖下から身頃脇にかけて、圖の様に袖ぐりの處に丸味を持たせて春丈よりも七分程上まで裁切り、脇の處には切込を入れ、圖の様に裁ち落す。これで袖と身頃は裁てたのであるが、衿元を裁つには、前は前衿ぐりの通りに標をつけてから布を縦に長く擴げ、後は後原型の衿ぐりに倣つて裁つ。此時には出來上り圖の様に餘り大きく裁つと、出來上つて子供に着せた場合に肩が外れて困るから、初めは原型一杯に裁つてそれで小さい時には後で裁ち落す様に注意して裁つがよい。又裾折りの縫込みは前と同様に二寸位に見て裁つ。

第二、第一號參考に就て

一寸と見た處、第一號と此の參考の方とは大差あるものゝ様に見られるが、此二つの裁方は殆んど同じ事である。たゞ飾布を裾に三段と袖に施し、飾りにリボンを用ひたゞけで此様に見違へる様に綺麗に出來上るのであるから、此種の應用は前彼を斟酌して凡ての女兒服に試みる様に心掛けて頂きたい。けれども此の格好の場合に注意しなければならぬのは、これを裁つ時に裾の折込みを省いて總丈よりも飾布だけ短かく裁ち、袖丈も同様に短かくする事である。用布は成る

べく絹物や薄物を用ふるのが一層引立つて見える。

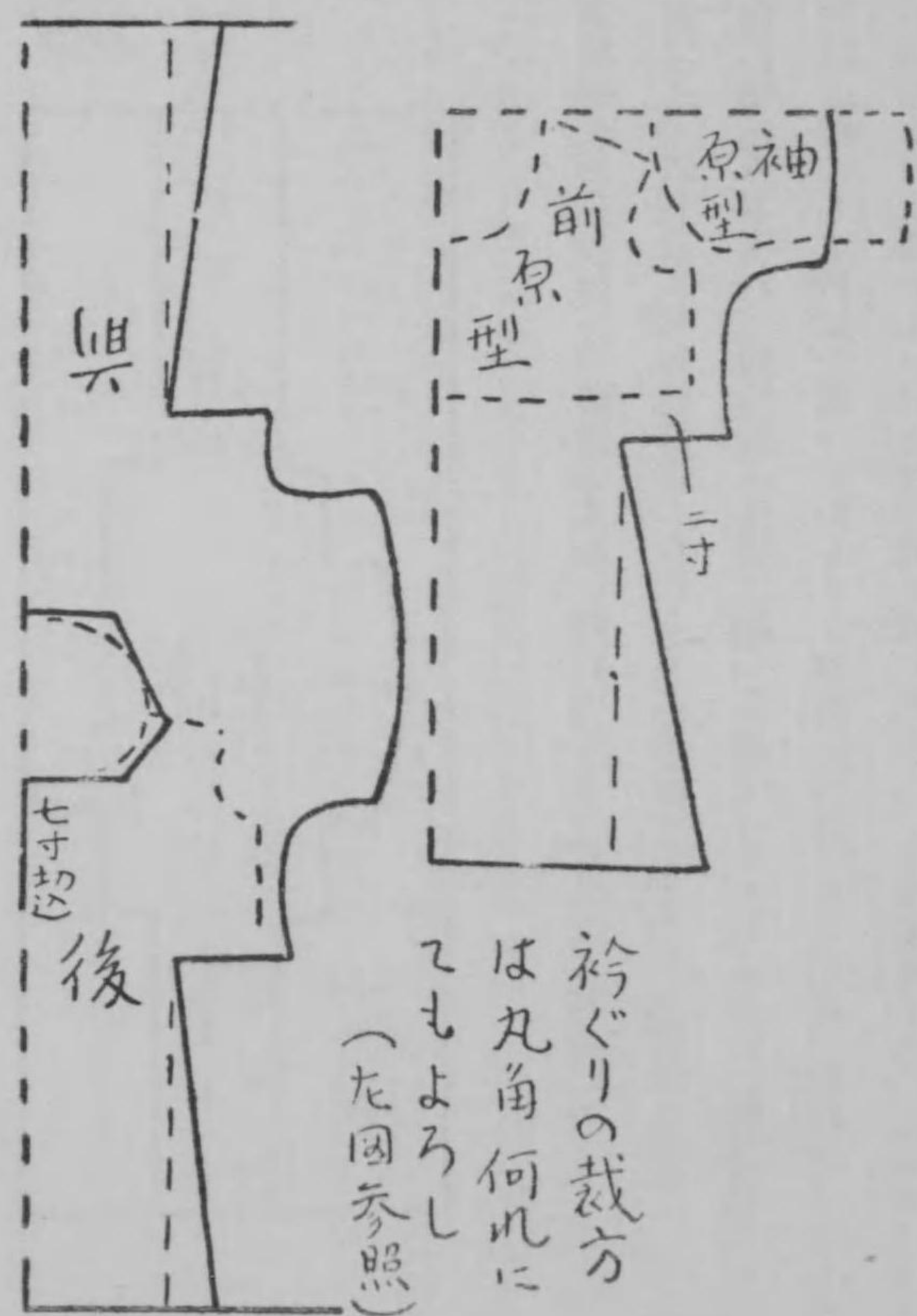
第三、縫方

先づ後切込みの下前持出しと上前見返しになる様に二寸幅位の布をとり、切込みの下の處は出来るだけつれない様に、これを一方の端から他方の端に裏から縫合せ、下前上前表に返して縁取りの様になし更に上前(右の方)は縁の處から裏に返してまつり附ける。次に飾布を袖口裏からつけ、裏の方に縫込みだけ残して表に返し、ミシンを掛ける。それから袖下より脇にかけ切込みまで袋縫ひにし(初め縫ひ合せる時布を延ばし加減になし、鉄を入れて返し、二度目を縫ふ時も布を延ばす様にして縫ふ)、脇下裾布を丸くはぎ合せて縫目を開き、上身頃に合せて切込みの間を縫縮め裾布の方に見返し布を載せ、上身頃と裾布の縫縮めた部分を縫合せて見返し布で上身頃にまつり附ける。裾折は總丈を定めて折返し、前述のものと同じ様に縫ふ。衿元にも飾布を裏からつけ、袖口と同様に表に返しておさへる。これで出来上りとなるが、更に胸の邊りにフランス刺繍を應用して花鳥等を縫ふと、一層引立つて可愛らしくなる。

参考の方は縫方も大した差はないが、袖口と裾とに飾布を附ける。これには先づ裾を丸く縫合せてから別に縫縮めてあつた飾布を取り、飾布の身頃の表とを縫合せて折を身頃の方に返し、縫目を身頃の布で包む様にしてミシンをかける。袖口も裾と同じ様に第一の飾布の縫合せが隠れる位に第二の飾布の表と第一の表と合せ、飾布を上の方に返してミシンをかけ袖口の方に向けて折りかへす。衿元は飾布の表と身頃裏と縫合せるので縫目が表に出る様になるが、後に飾布を返すと縫目は隠されて綺麗に出来上る。尙又、出来上り圖の様にリボンを結んで前後のギャザーの端に附けると、殊に可愛らしいものとなる。

第二節 第二號

第二号裁方

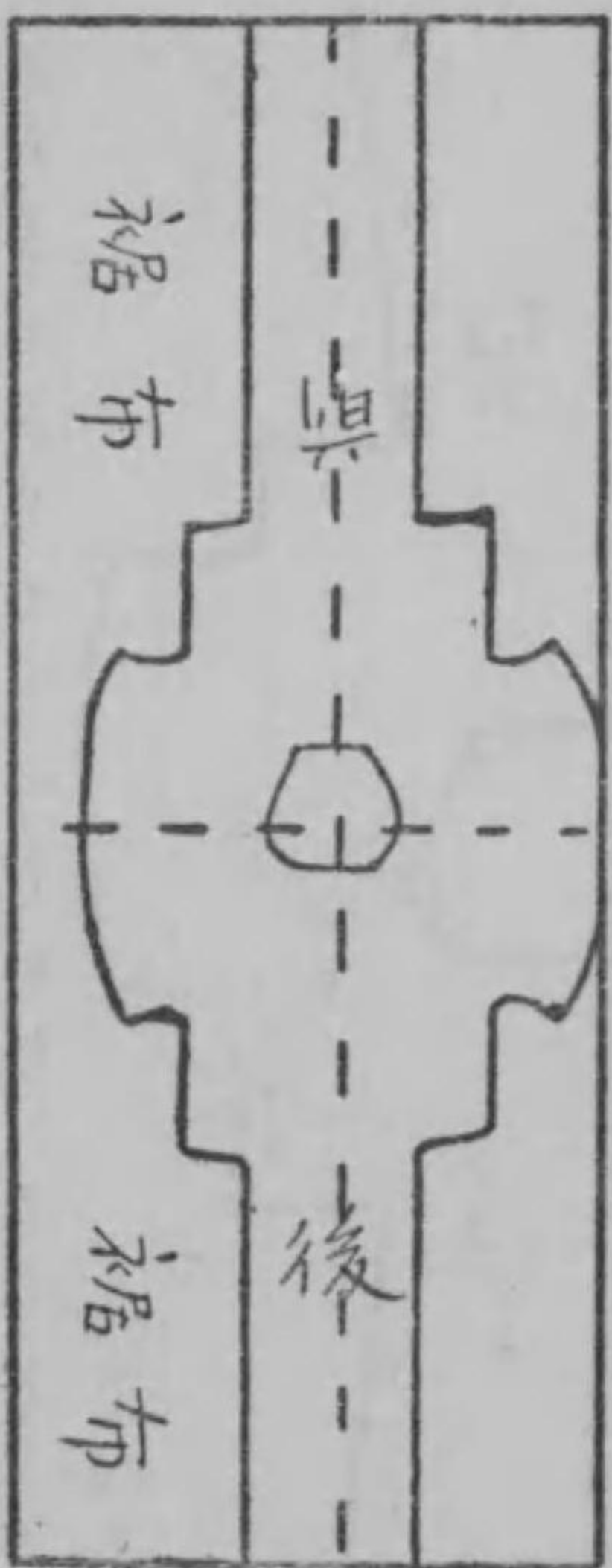


衿ぐりの裁方は丸角何れにてもよろし
(丸角参照)

二号出来上り圖



総合圖



第一、裁方

初め總丈に裾折縫代の分を加へた前後の丈を一緒にして布を縦に二つ折りにし、更に丈に五分の差をつけて二つに折り（肩の處は四つ折になる）、前身頃原型をワナの方に當て、それに袖原型を並べて脇に切込みを入れ、四枚揃へて圖に倣つて裁つ。それから前後の裾を裁ち、前身頃原型を其儘第二圖の様にして衿元を裁つてからワナの處に切込みを入れる。裾脇布と袖口布は、用布が縦縞のものであつた場合には總合圖の様に横にとり、多少變化があつて出来上りに面白

味がある。

第二、縫方

後身頃の切込みに幅二寸位の持出し布を裏から當て、縫合せ、下前から上前にかけて縁取りの様にし、上前は裏に折り返して見返しとする。袖口布は袖口に合せ縫縮めて其裏と袖口表とを縫合せ縫込を袖の方で包む様にして抑へミシンをかける。そして袖口から脇にかけて袋縫ひにする（此時も第一號の袋縫ひと同じ注意が要る）。裾布切れも矢張りギャザーにして身頃表と裾布表とを合せ見返し布は裾布の方に當て、縫合せ、身頃の方にまつり附ける。そして前後の残りの處は内側から縫合せて端はまつて置く。裾折は襞でおさへて前述のものと同様にする。衿元に飾布をつける時は、飾布を裏に當て、角々を緩めて縫合せ、縫込みだけ縁の様に表に返し、角々に注意して三分位の幅にミシンを掛ける。これで出来上りとなるが、後の見返しにプレスボタン（スナップ）を三つ四つ附けて留める（後で合せる時には、前でするよりもボタンの數を多くして、よく留める事が必要である）。

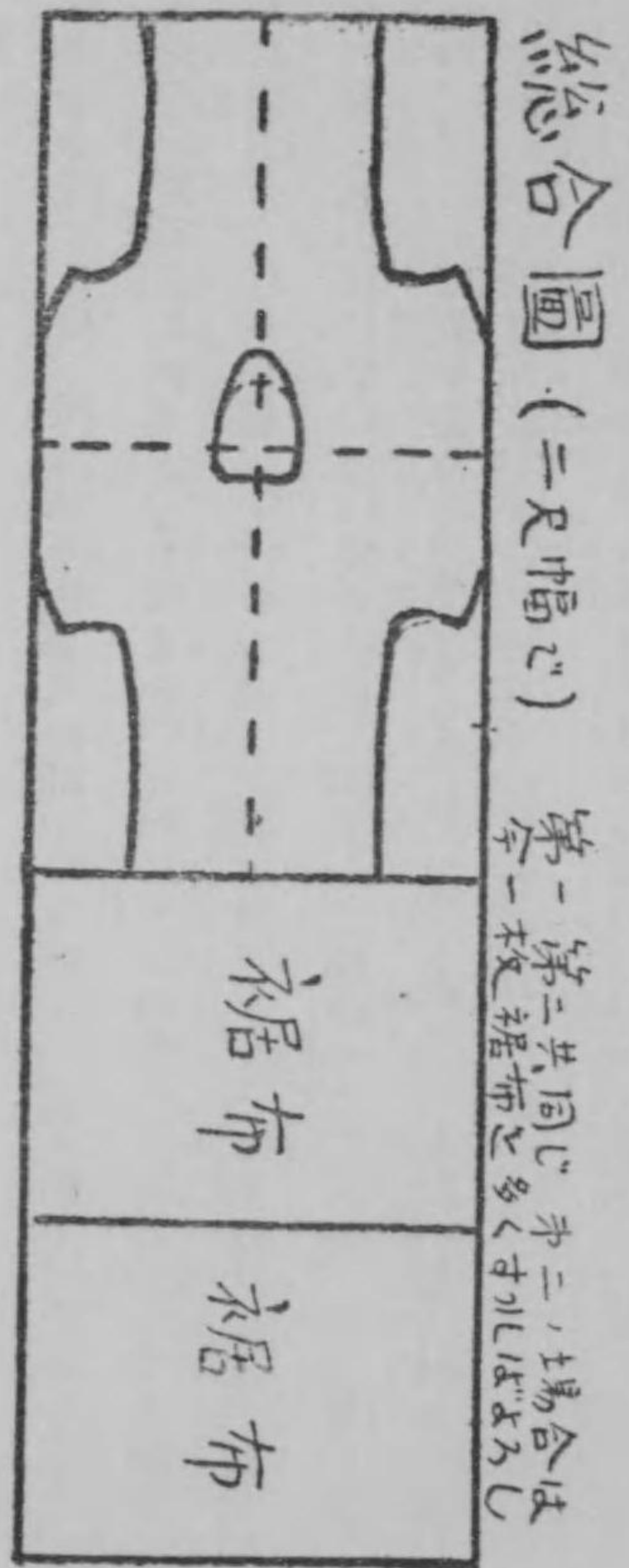
第六章 七八歳から十二三歳迄の女兒服

次に述べて行かうと思ふ参考の三四種の型はどれを選んでも良い。總じて七八歳以上の子供にはこれとといふ特定した型はなく、たゞ其型を選ぶ場合に、其好みと其子供に適應するものを選ぶだけのことで宜しい。従つて裁方等も何等特別の考慮を必要とするものもなく、これまでに述べて來た裁方を斟酌應用して總丈に裾折や肩の縫込み分等を加減する丈けに留まり、用布に多少の長短が出来る事を心得て裁てば宜しいのである。しかし、水兵型や其他二段になつて居るすべての型は、七八歳以上の子供でないと似合はないものであるから、斯ういふ事も忘れて成るべく子供らしい可愛い型を選ぶ事が肝要である。

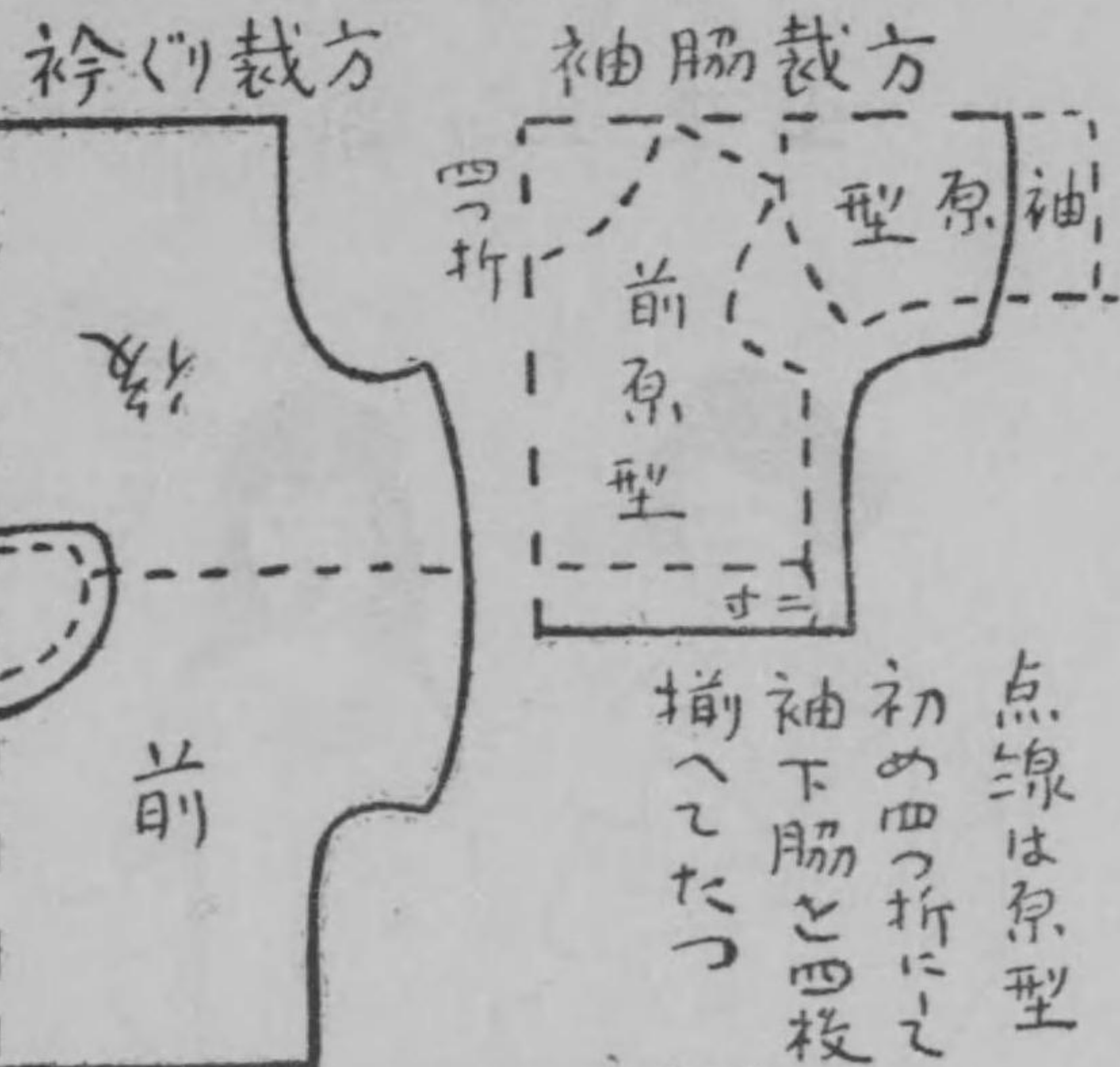
第一節 第一號及び第二號

出來上り圖

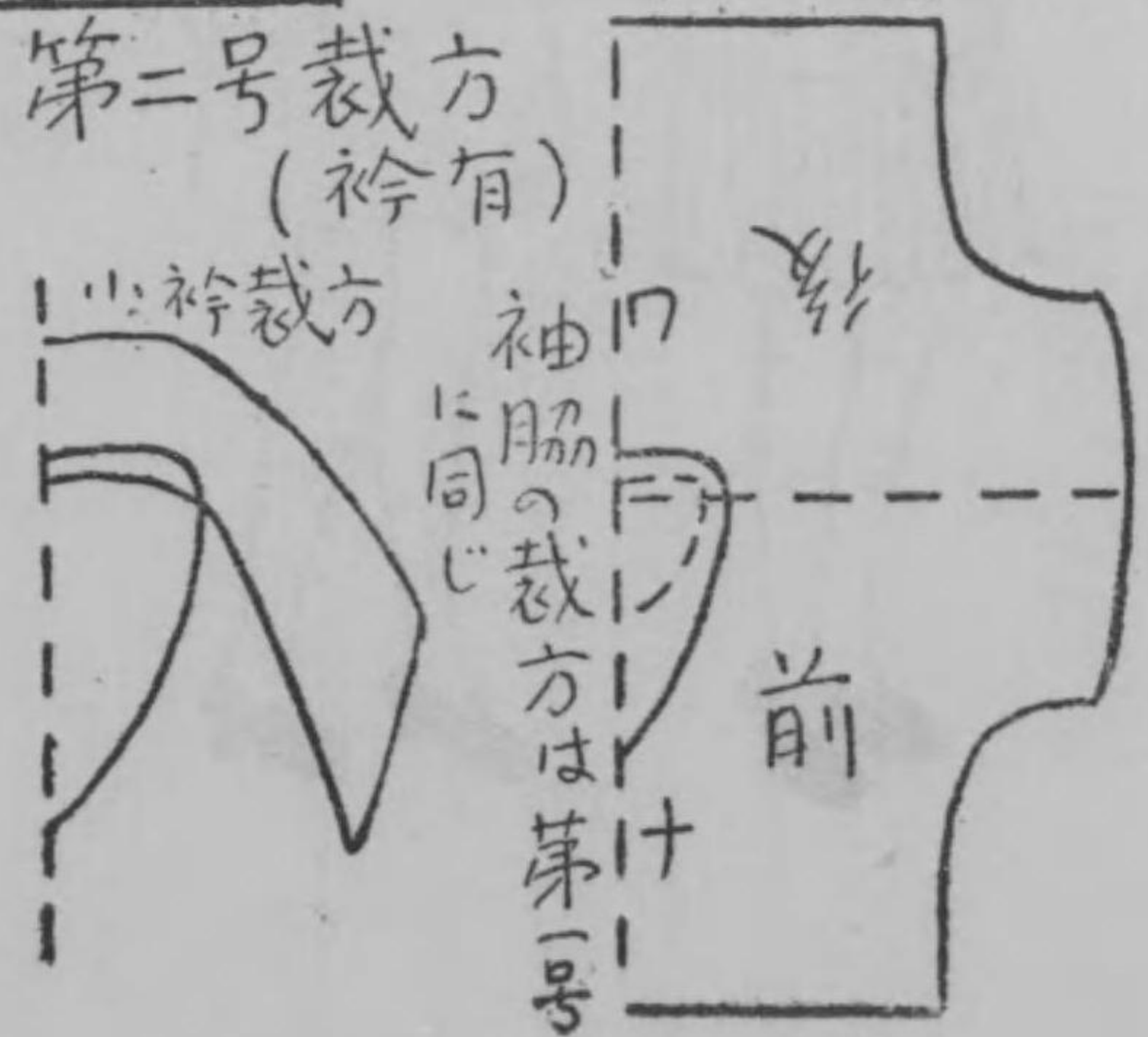




第一号 裁方 (衿無)



子供の洋服



第一號衿無しと第二號衿有りとは裁方及び縫方共、大體同様のものであるから、此處では一緒に述べて行く事にする。

第一、裁方

此の型のものを裁つには、先づ第一に總丈を確かめる事が必要である。それからそれを凡そ三等分して三分の一が裾丈であると見ればよい。それで上胴の分として脊丈よりも何寸か長く見積つて總丈から差引き、残りを裾丈と定めて裁つ。裾布はギャザーする時には二尺幅二幅あれば充分であるが、第二號の様に襷の多い場合には二幅半か三幅は必要である、併し襷の多い時でも、腰廻り寸法の三倍あれば充分足りる。裾の取り方はこれで良いが、上胴の裁方は第一號は第一圖に第二號は第二圖に従つて裁つのである。

第二、縫方

第一號は川布の選び方と飾りの配合丈けに成功したならば、他は別に難かしい事はない。先づ袖口裏に飾布の表を縫合せ、縁の様に縫目を包んで一折にミシンをかける。そしてこれまでに述

べて来た脇縫ひの時の注意を顧慮して、つれない様に脇を袋縫ひにする。衿元にも飾布を裏からつけて縁の様に表に返して三分位の上り幅にする。次に上胴の下端には飾布を表から附けて裏に返し、膝でおさへて置く。裾布も丸く縫合せから裾口に飾布を裏からつけ、表に返して五六分の上り幅におさへる。裾上は縫縮めて上胴飾りの下に入れ、上胴の飾布を抑へる時に、裾布のギャザーの處に見返し布を當て、表から抑へミシンをかけ、見返し布で身頂の方にまつり附ける。後はスナップで留める。

第二號の小衿をつける時は、先づ小衿をつける時は先づ小衿の裏表を重ねて外端三方を縫合せ表に返して飾縫を施し、それを後身頃の衿明きの處でつらせ加減に當て、斜の見返し布を載せ、一緒に縫合せてから身頃の方に返して二三分の上り幅にまつり附ける。胸當布も二枚合せてから適宜の位置に當て、右の方を衿の附け根にとち附けて一方はスナップで留める。

以上は詳しく述べた縫方であるが、これからは斯う詳しく述べずとも、前後を斟酌すれば、ど

第三號出來上り圖

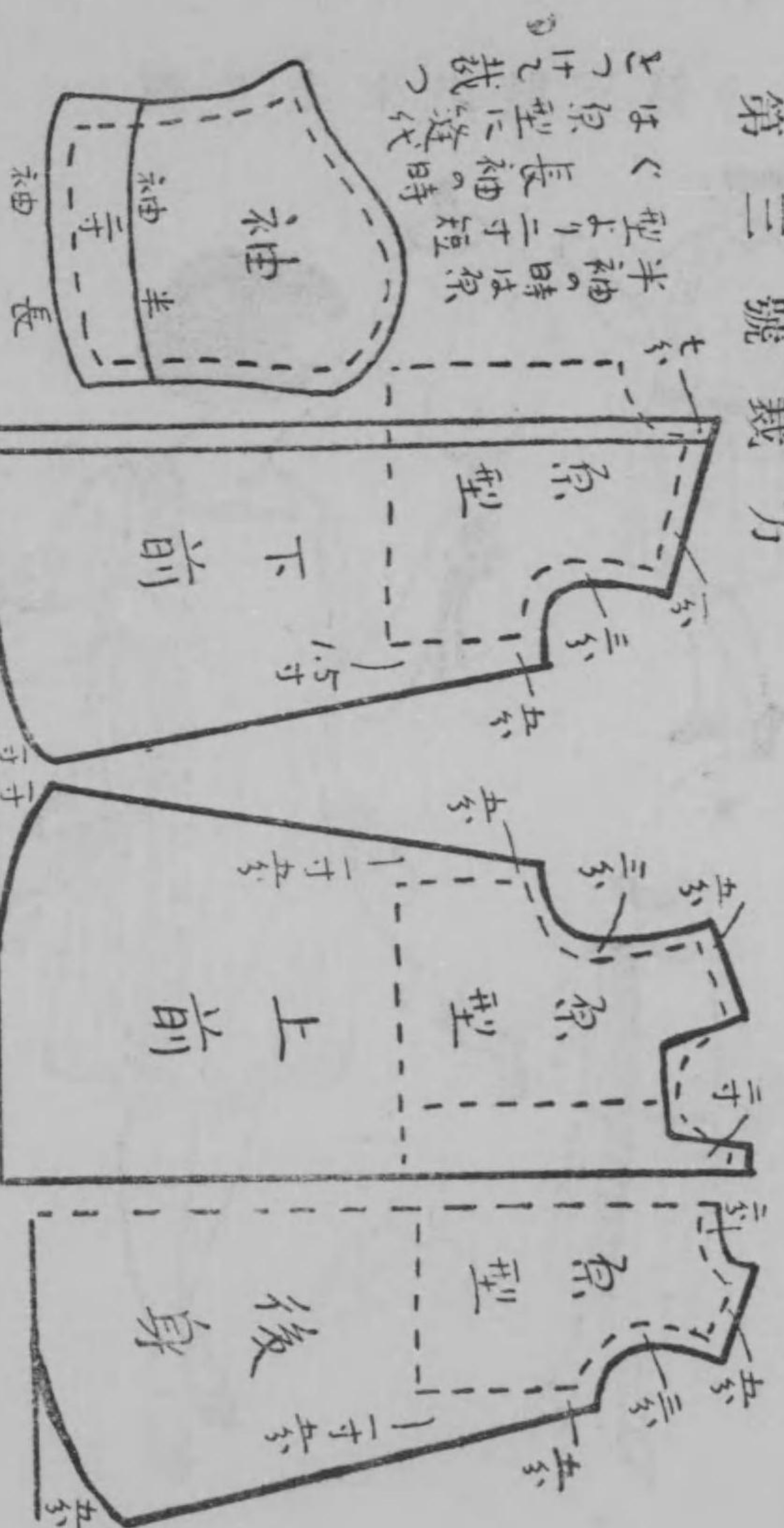


第六章 七八歳から十二三歳迄の女兒服

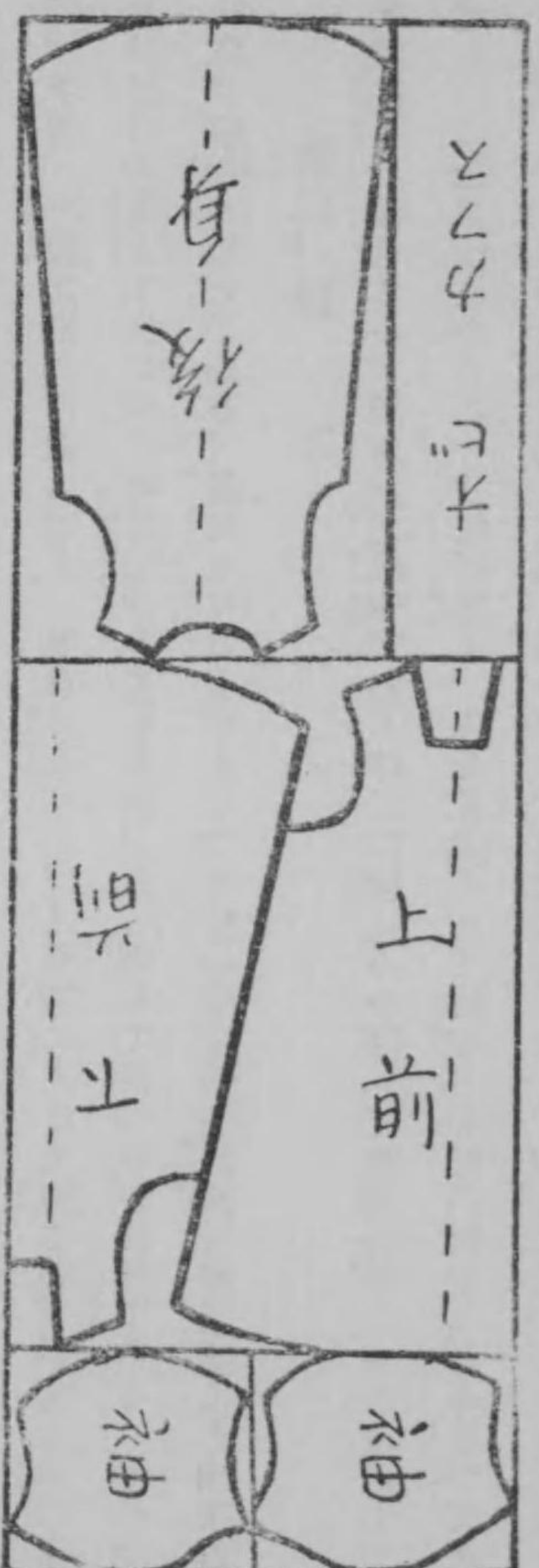
第二節 第三號

子供の洋服
 八六
 んな型も仕立てる事が出来ると考へるから、以下は裁方縫方共多少簡略に述べる事にする。その
 積りで、要點をよく飲み込んでおいてもらひ度い。

第三號裁方



第三號總合圖 (二尺幅・兩面)



第一、裁方

此の型は前身頃横の處で合せる様になるのであるから、後身頃はワナで裁方圖の様に裁ち、前身頃、下前、上前と別々に裁ち切る。袖は半袖にしても長袖にしても宜しい。衿元も丸でも角でも思ひ思ひの裁方で良いが、唯原型をあてゝ其衿ぐりに準じて裁つ事が必要である。七八歳位までに良く似合ふ恰好である。出來上りABCとなつて居る様に衿の加減で如何様にも出来る。

第二、縫方

先づ袖下を縫合せる。用布が毛織物である時には縫込みを開いて兩端を千鳥りがけにして置く。袖口は裏の方に一寸位折返し、先を見返し布で縁取りの様に細かく縁を取つてまつり附けて置く。前身頃の下前は裏に見返し布を附け、上前(左横)は一寸位裏に二つ折りとして下前の上に載せ、重なる分をよく調べて肩から九寸位明け、其下は上前表から下前も一緒に飾りミシンで留める。それから前後の兩脇を縫合せるのであるが、これも毛織物の場合には縫目を開いて兩端を細く縁取りの様にすると宜しい。裾折も袖口と同じ様にまつり附け、袖附けも袖下の縫目を

脇の縫目から一寸七八分寄せ、身頃肩山の處で袖を緩め加減につける。

すべて用布が毛織物である時には折込むコロくするから、袖を包むか、又はほつれない時には千鳥掛けとするのが宜しい。

第三節 第四號水兵型女兒服

水兵形出来上り圖 其二

第六章 七八歳から十二三歳迄の女児服



九三

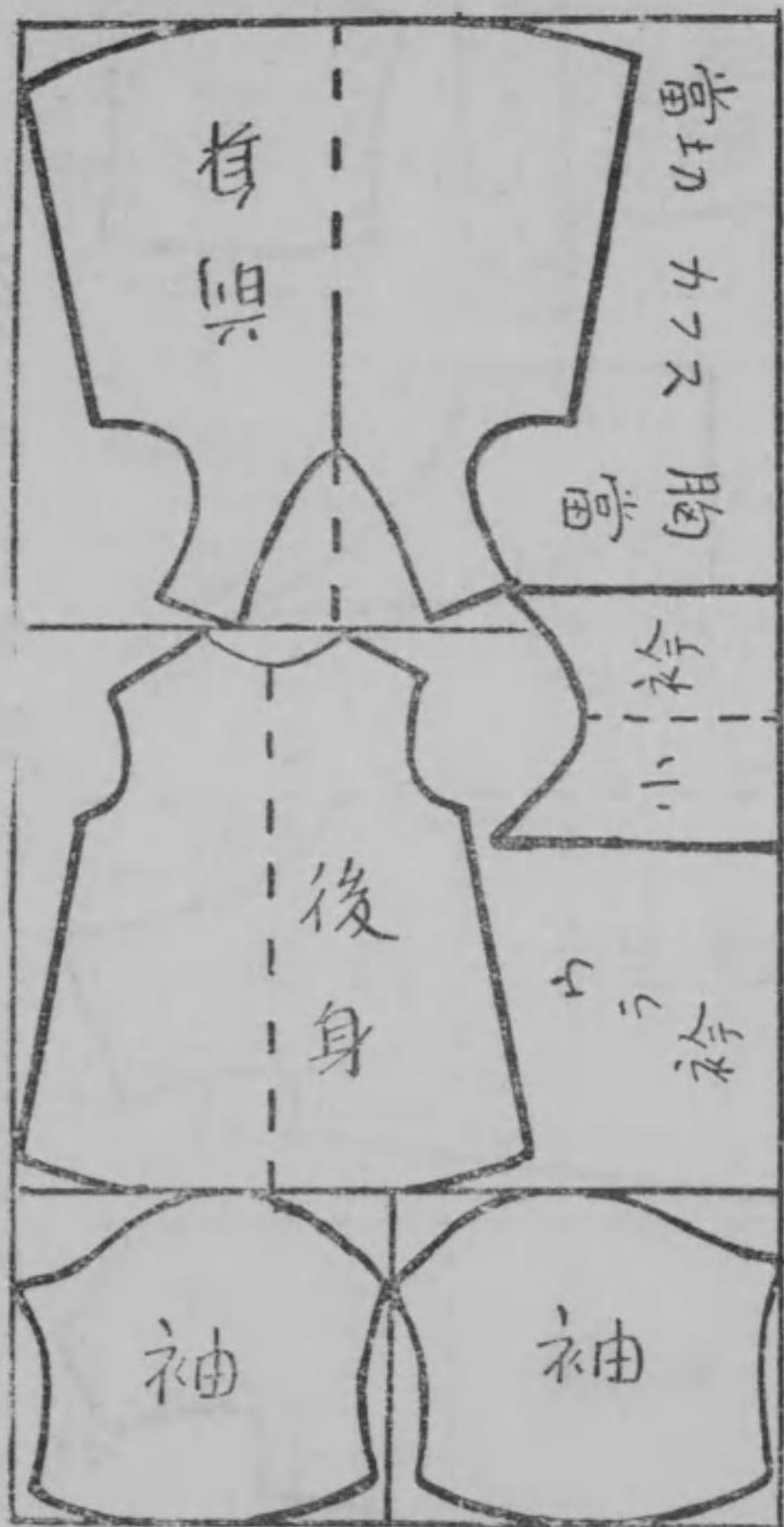
水兵形出来上り圖 其一

子供の洋服



九二

上着総合圖 (二尺幅で)



第一、裁方

上着は原型に據つて裁方圖の様に裁つ。裾は裁方總合圖に倣つて裁ち、裾幅は腰廻りの寸法の三倍もあれば大抵の襷を取るには充分間に合ふものである。此の裁方で最も至難とせられるのは衿の裁方である。衿は其恰好を主とするものであるから、徒らに其寸法に拘泥して裁つときは甚だ不恰好のものとなり、延いては全體の調和を打壞すことになるから、これを裁つには餘程の注意と研究とを要す事を記憶して頂きたい。

又此の型は二重になるものであるから、スカートの上にはシミズをつけて置く。

第二、縫方

先づ裾布を丸くはぎ合わせるが、一個所の縫目は上部を二三寸明けて一つ折にしてミシンを掛ける。そして此の襷を取るには、最初丸く縫合せたスカートをワナにして大凡腰廻りの寸法だけを除き、残りの寸法を適宜のヒダ數に割當て、見ると即ち一襷の深さが得られる。それで前に控残して置いた腰廻りの寸法から、一の襷幅の半分を、ワナになつて居る儘の寸法から除き、其残り

を襷に割當てると第二の襷の表面に出る幅が定まる、夫で第一の襷を基點として第二の襷から順々に襷の深さを入れて襷を取つて行く。斯うして上の方の襷が定まつたならば、裾の方は表襷幅を三四分位廣くすると、出来上つた時に裾の方が開いた様に見えて可愛らしいものである。次に例を擧げて襷取りの場合を述べて見る。七つの襷を取らうとする時裾布がワナにして二尺五寸ありと假に見て、それから腹廻りの寸法を一尺八寸とすればその半分の九寸を除き、残りを七つに割ると、襷の深さ(二寸三分)が出る。次に腹廻りの寸法の半分即ち九寸から、第一の襷幅(四寸と定めて)の半分二寸を引き、残りの七寸を六等分すると約一寸二分に當るから、襷の表幅が一寸二分弱のものとなる。それで先づ縫目明きの個所を後の真中として、襷の深さ二寸三分の半分を各々左右に測つて重ね、恰度後中央で襷と襷とが突き合せになる様にする。此の突き合せから前の真中を定め、ワナから兩方に二寸づゝ標を附けて其處から襷の深さを取り、一の襷を其上に載せて第二の襷表二寸二分位の處に標を附けてそれを襷の深さの處に重ね、斯うしてワナから兩方に向つて襷を取る、上の方が定まつたら裾の方は前に述べた様に襷表を上り三四分開いて(そ

うすると襷の深さが上の方よりも淺くなる譯である)取つて行く。

右の様にして襷が出来上つたならばシミーズの後上前を裏の方に三つ折にし、下前は七分幅に二つ折にしてミシンをかけ、兩脇、兩肩を袋縫ひにして脇折は前に肩は後に返し、衿元には見返し布を表から縫合せて裏に折返し、二三分の上り幅にまつり附け、袖ぐりにも見返し布を表から當てゝ裏に二三分の上り幅にまつり附ける。そしてスカートの前真中とシミーズの前真中とを重ね、見返し布をスカートの上に載せて縫合せ、シミーズの方にまつり附ける。以上が濟んだならばシミーズの後衿元に一つと、其下を等分して三つ程上前に小さい釦穴を明け、下前にはボタンを附ける。

次に上着の縫方を述べる。カフス布の出来上りの真中になる處に蛇腹をつける。これは下に線を引き、其上に、蛇腹をのせ細い溝の處を縫ふ。それから袖口をカフス丈に合せて縫縮めカフス布を載せて縫ひ合せ袖下を丸くカフスの先まで縫ふ。此時地厚なれば縫目を開き、カフスを裏に折返して縫目の上にまつり附ける。次に身頃は前明きの處に見返し布を表に當てゝ縫合せ、切込を入

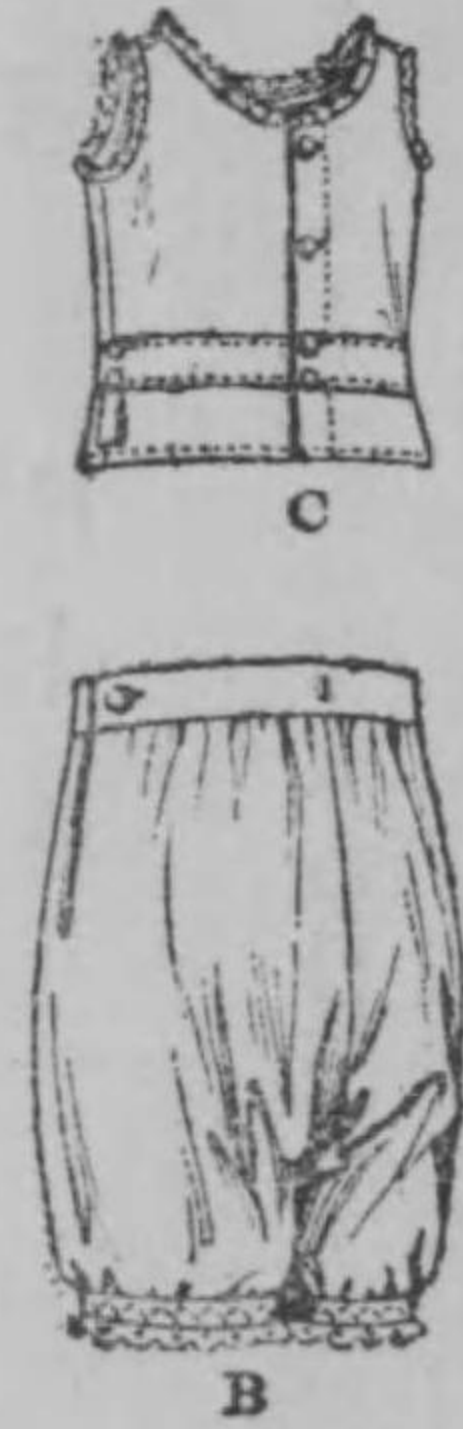
れて裏に折返し身頃にまつり附ける。そして両脇と両肩とを縫合せて折はシミーズと同じく脇は前に肩は後に折返し、裾折りをなす。衿にも蛇腹をつける時は表の方で端から四五分入った處に標を附けて其上に二本なり三本なりをつけ、それから裏を載せて三方を縫合せ、角々に鉄を入れ返して廻りに飾りミシンをかける。次に水兵型は衿附けが最も大切であるから良く注意しなければならぬ。先づ衿の真中と身頃の後を合せてから、後衿廻りの處に小衿をつらせる様にして見返し布を小衿の方に置き、三枚一緒に縫合せて見返し布を裏に折返し衿元に細くまつり附ける。袖附けはこれまで述べたものと同様に脇縫目よりも袖下の縫目を前に寄せ、肩山の處で袖を緩めて縫合せ、見返し布で包む。ポケットも出来上り圖の様に左胸の袖附け位の高さに位置を正してつける。衿元のネクタイは適宜で宜しいが、リボン、羽二重、襦子等が多く用ひられて居る。又胸明きの多い時には別に胸當を作り、一方を衿元に縫ひ附けて一方はスナップで留めて置く。尙ほ胸明きの多少に拘らず、冬は一體に胸當をつける方が宜しい。

第七章 女兒用下着

コンビネーション 出来上り圖



ボデース 出来上り圖 ルロース



A ボデース及び
ルロース
C ボデース後
B ルロース後

ペティコート 出来上り圖



A シミズペティコート
B 全後圖
C ペティコート

第一節 用布

下着類の用布は地薄のキヤラコ、ナインスーク又はロオン、白綿ネル、晒木綿（晒木綿は小幅である爲め仕立ては面倒であるが出来上り着心地は非常に宜しい。特にコンビネーションなどはふさはしいものである。）等であるが、冬向のベテコートには本フランネルを用ふるのが保温の爲めに最も宜しい。

用布の色は、出来得る限り白色無地を使用する様に心掛けて置くべきである。

第二節 ルロース

下着類を裁つには、ルロースと上着の原型とがあれば、どんな種類のものにも適用することが出来るのであるから、先づルロースの寸法の取り方及び割出し方等から述べる事にする。

第一、寸法の取り方

腰廻り——腰骨の最も大きい個處を、上着を着た儘の上から少し弛め加減に量る。

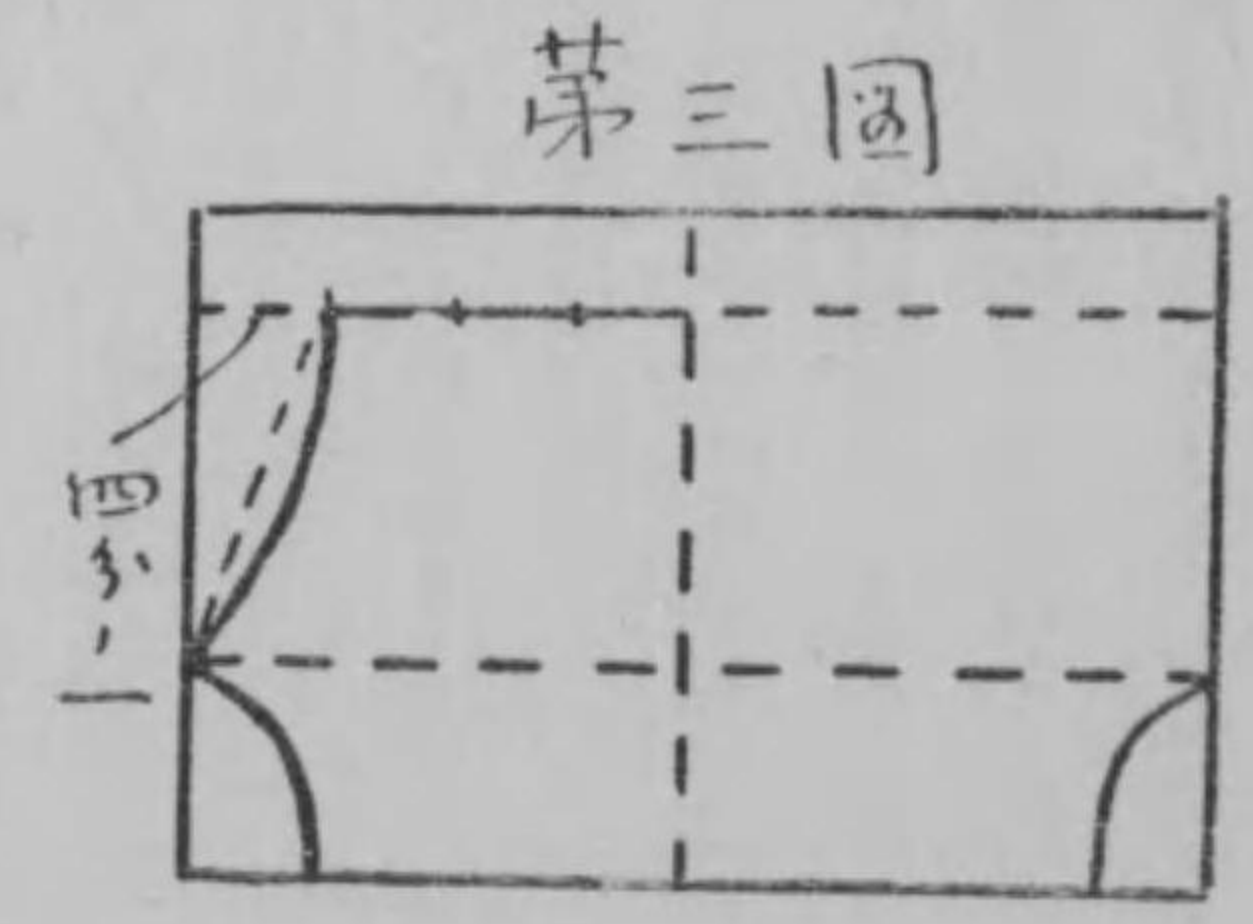
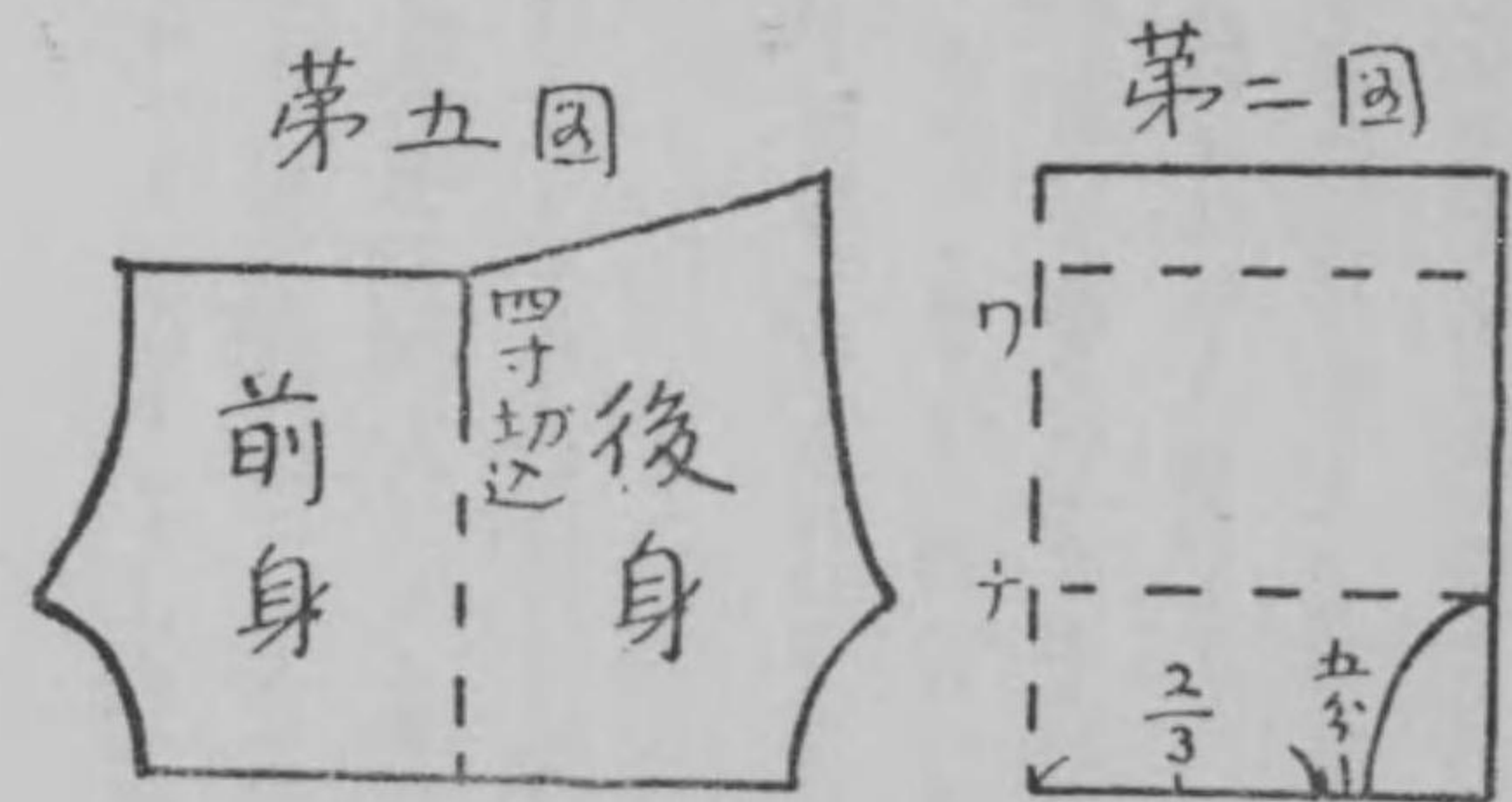
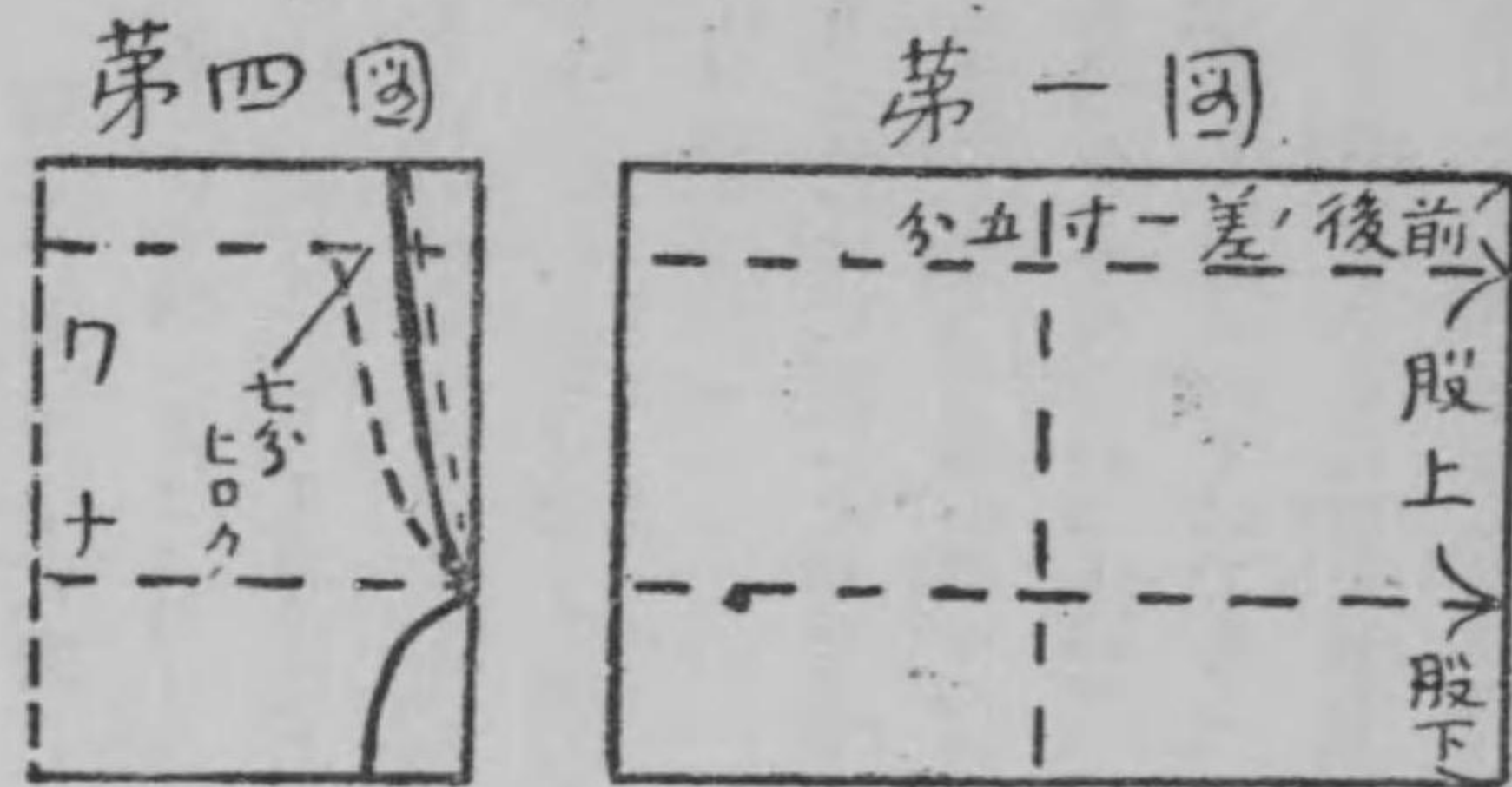
股上——細腰からお尻のふくらみのト端までを量る。

股下——股の内側に於て其上端から膝頭の上一寸程の處までの寸法を取る。

腹廻り——細腰を弛めてはかる。

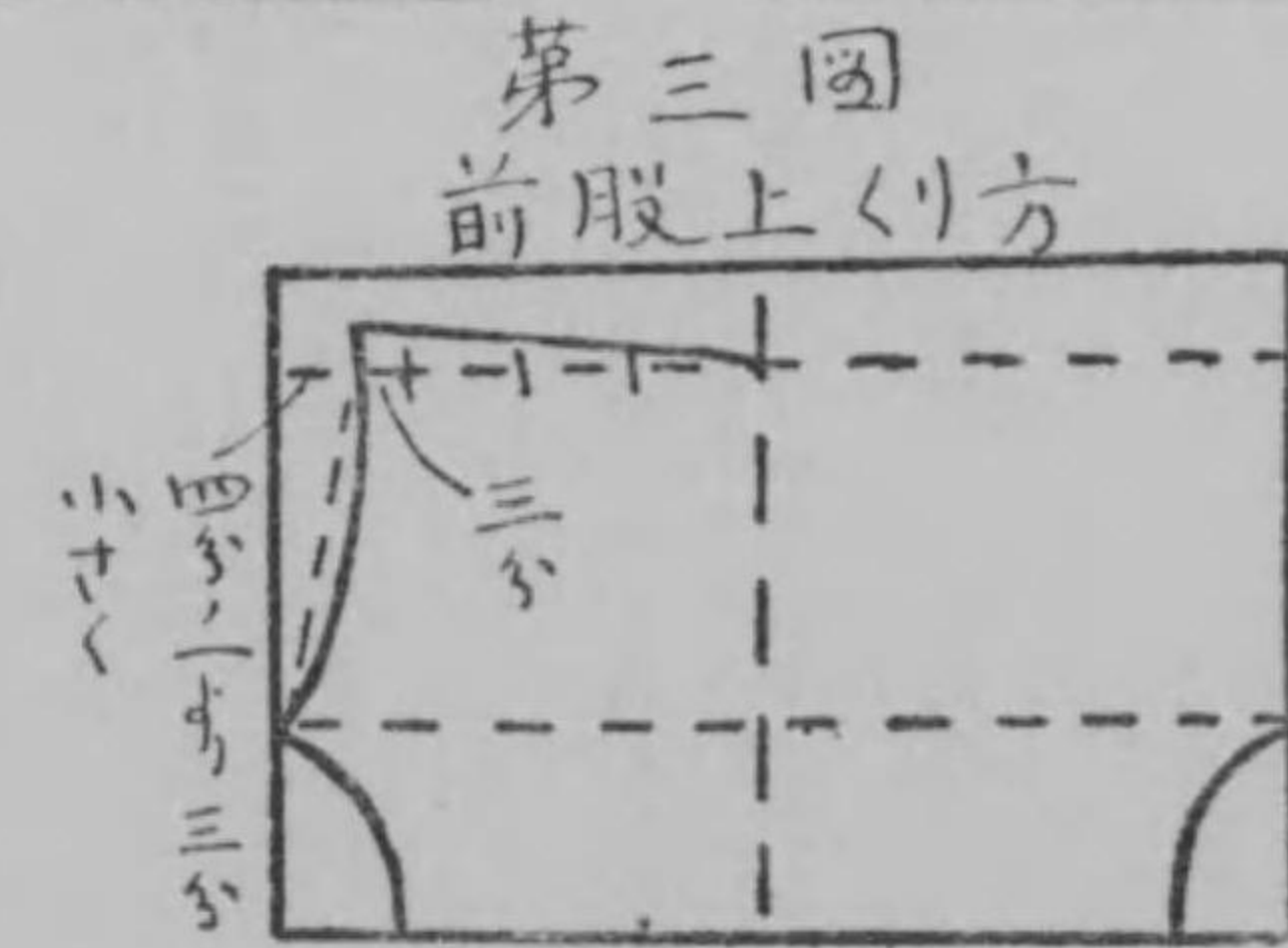
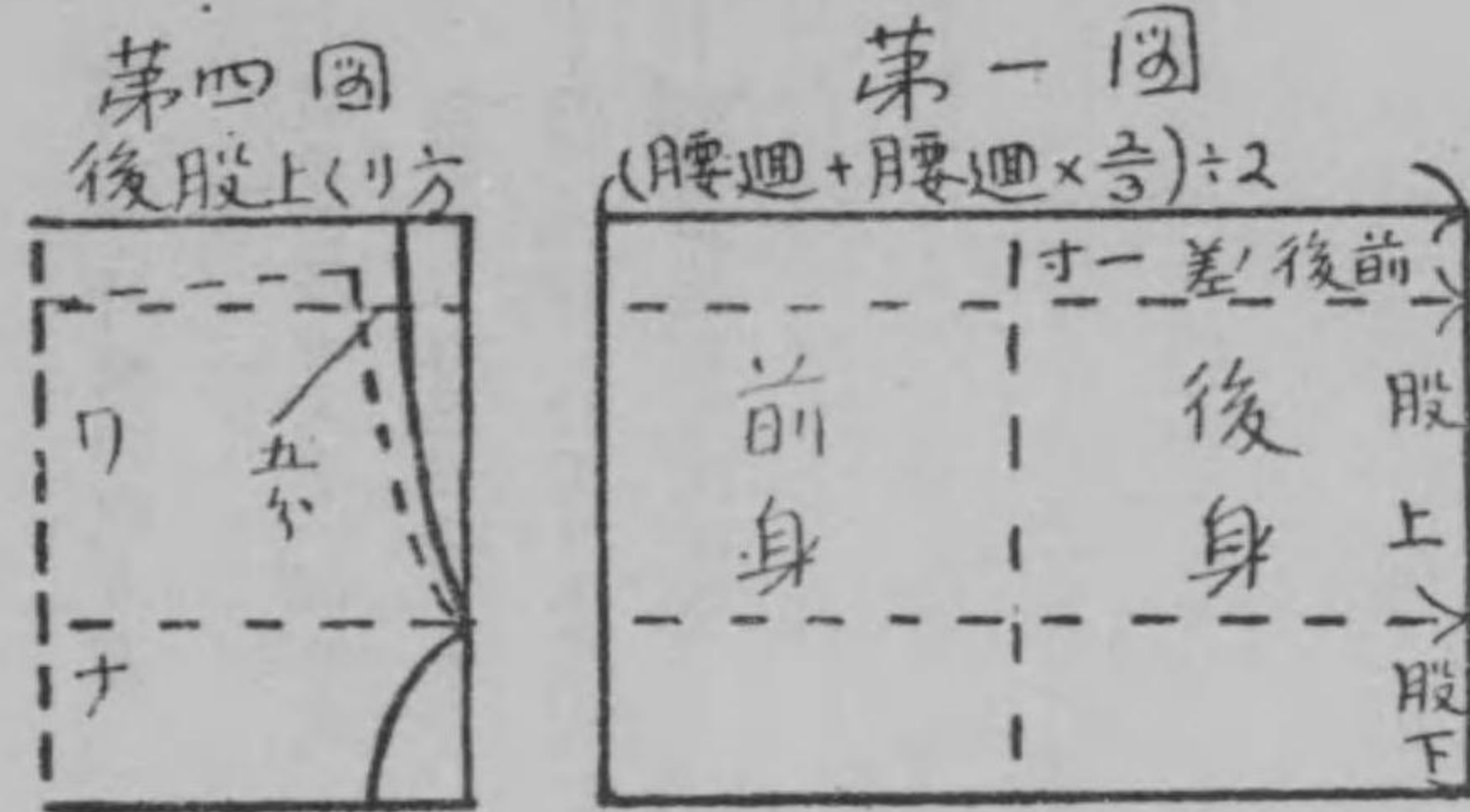
七八才以上

第七章 女児用下着



五六才まじ

児童の洋服



第二、割出し方

先づ腰廻りの寸法に其二三の寸法を加へて二等分すると、片足の腰廻りの寸法が得られるから、其寸法を以て横となし、又別に股上と股下との寸法の和に股上に於ける前後の寸法の差を加へて縦となし、此の兩邊を基礎として第一圖の様な方形をつくる。(前後の差といふのは、後部にはお尻のふくらみがある丈け違つて來るのである。これは年齢の差に依つて著しく違ふものである事を忘れてはならない。)

次に第二圖の様に縦にそれを折り、下部(即ち股下裾口になる方)に於てワナの方から三分の二よりも五分多く量つた處に標をつけ、其處から股下線の端に向つて圖の様に切り取る。

第三圖は之れを又擴けたもので、股上前の上部を四等分して四分の一よりも三分程少ない處に向つて弓なりに裁ち落すのである。(此の寸法は七八歳以上であつたならば、四分の一全部の處から落しても宜しい。)更に股上切取線を前後の線の線から三分丈け上部に延長し、其先端から脇の處で前後の線の線に出合ふ様に斜線に依りて落す。(此の線も七八歳以後には三分出した斜線を作

る必要なく、前後の差の線を其儘用ひて眞直に落して宜しいのである。)

第四圖は再びワナになし、前股上落しに倣つてそれよりも五六分廣く残り、後股上を落すのである。

第五圖に到つて又これを擴げ、前後の差の上端から脇の處に向つて斜線をひく。それから脇の處に四寸の切込みを入れる。

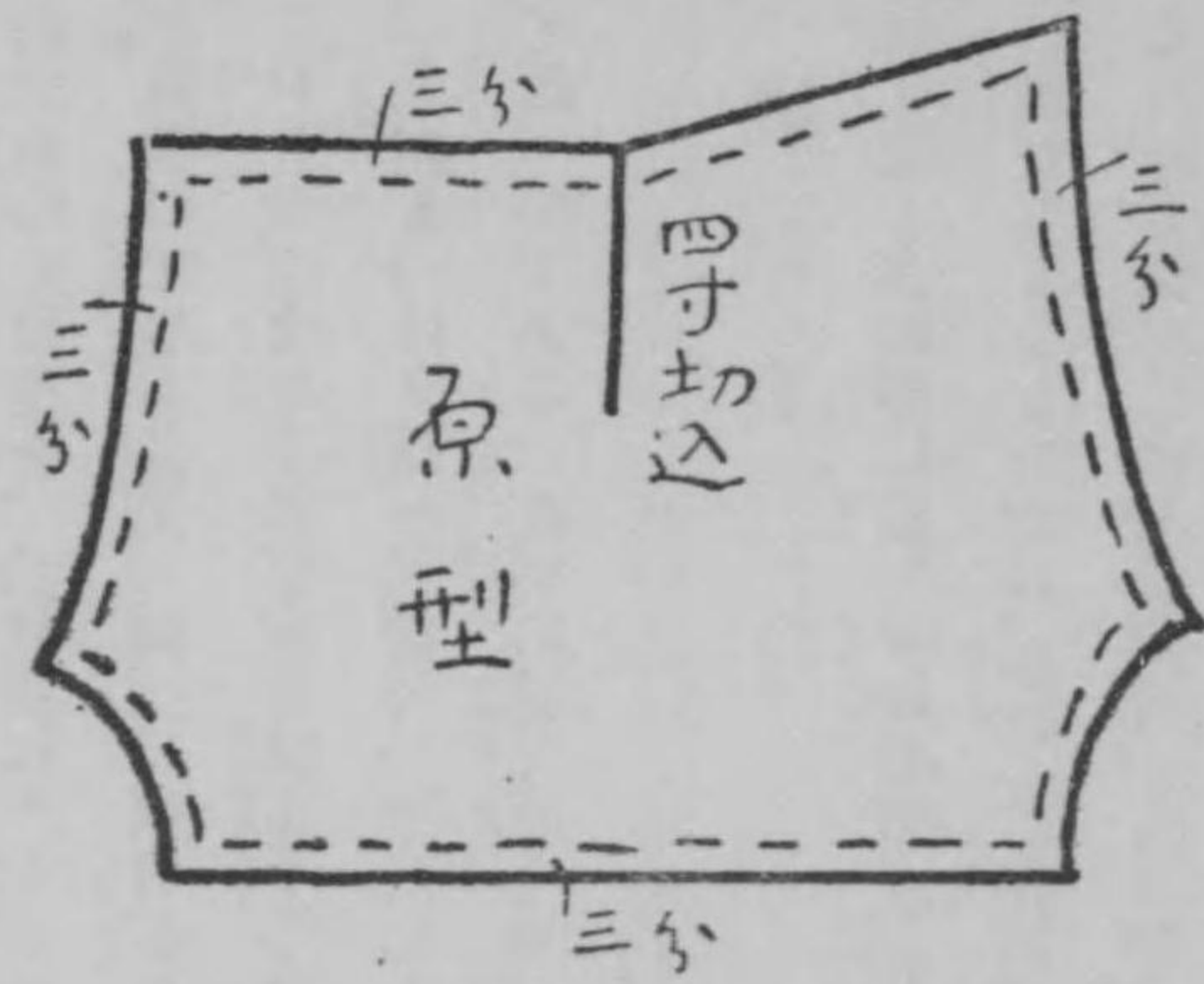
これでルロースは裁つことが出来る。

尙参考として七八歳以上のものゝ圖解も一通り入れて置いたのは前掲の通りである。

次に年齢に依る標準寸法を左に入れて置く事とするが、いつも繰返し述べる通り、洋服は其人に依つて寸法に差異があり、又其人の身體に合はして作られなければ誠に不恰好なものであるから必ず一度は其子供に依りて實際の寸法を取る事を忘れてはならない。

ルロース標準寸法

ルース布地取方



オビ $\frac{2}{5}$

前後二枚

ワキミカエシ $\frac{2}{5}$

二枚

腰廻り	股上	股下	腹廻り	
一尺五寸三分	五寸三分	一寸五分	一寸七分	三四歳
一尺六寸	五寸七分	二寸	一尺七寸三分	五六歳
一尺七寸	六寸	三寸	一尺七寸三分	七八歳
一尺八寸五分	七寸五分	四寸五分	一尺七寸八分	十二三歳

第三、裁ち方

右の様に出来上つた原型を、二枚重ねた布地の上に載せ(縦布に)、裾を除いた他の周囲は一樣に三分の縫代をつけて裁ち落す。裾は、裾口にレースを附ける時には其レースの幅だけ裾丈を短かく裁落し(レースの代りに同じ布を飾布として用ふる事もあるが、其場合にも飾布だけ裾丈を短かく裁つ)。又何もつけず裾を其儘三つ折りにして用ふる場合には、五六分の上り幅になる様に縫代をつけて裁つのである。此外に脇見返し布二枚と、前後の帯布二枚とを同じく縦布で裁つ。

第四、縫ひ方

兩脇明きの處を見返し布を裏に當て、縫ひ合せ、折りは見返し布の方に返して、上り幅六分位に恰度縁取りの様に表からミシンをかけ、後の方は持出しの際から裏に折り返して、奥の方をミシンで抑へて置く。それから裾口には七分幅位の片耳の布レースにギャザーして縫ひ目が表に出る様に縫ひ合せ、折りは上布の方に返して上布で縫ひ目を包み、恰度細い襷の様に上からミシンで抑

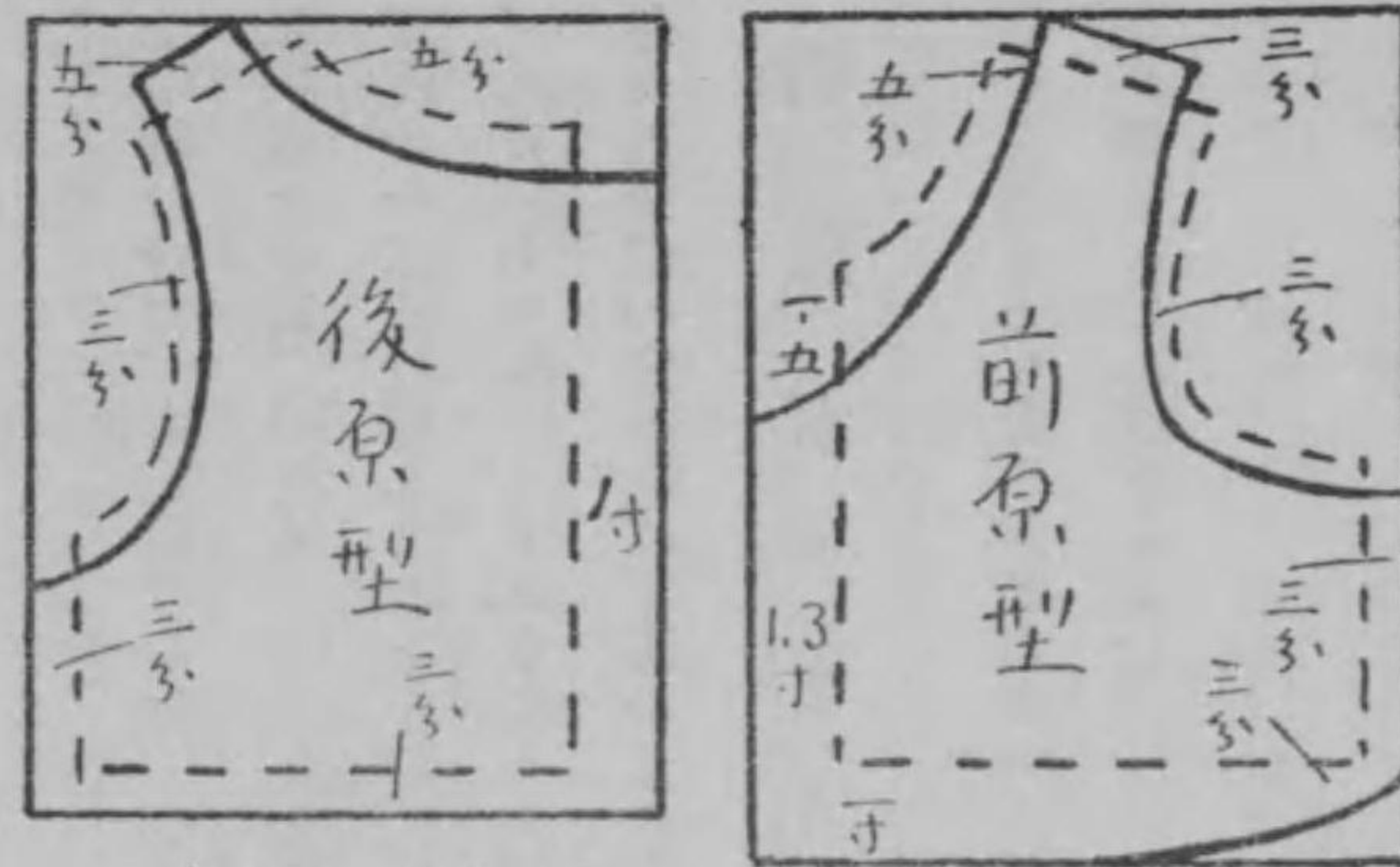
へる。

次に前後の股上を縫ひ合せ、右足の方を高くなる様に折を返して、縫ひ込みの端を折つてまつる。それから前後の股下を縫ひ合わせる。そして前の方に折を返し、縫ひ込みの端を折つてまつる。前後の帯付は兩端を一二寸位残したあとを帯丈に合せて縫せて縫ひ縮め、裏から縫ひつけて折を帯の方に返し、八分の上り幅にして周りにミシンを掛ける。そして前後の帯の真中には縦に、兩脇には横に、各々五分位の穴を明けて穴かゞりをする。

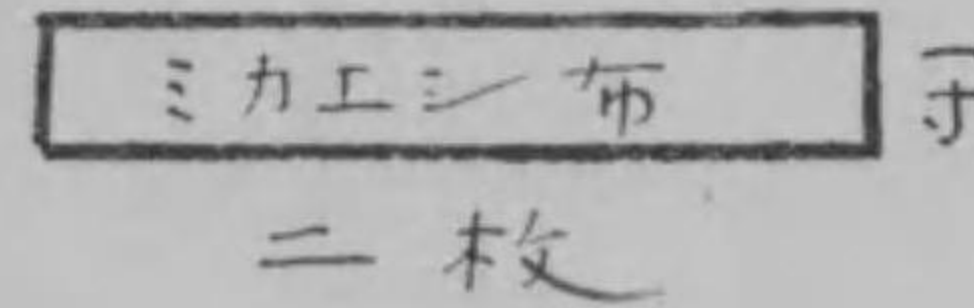
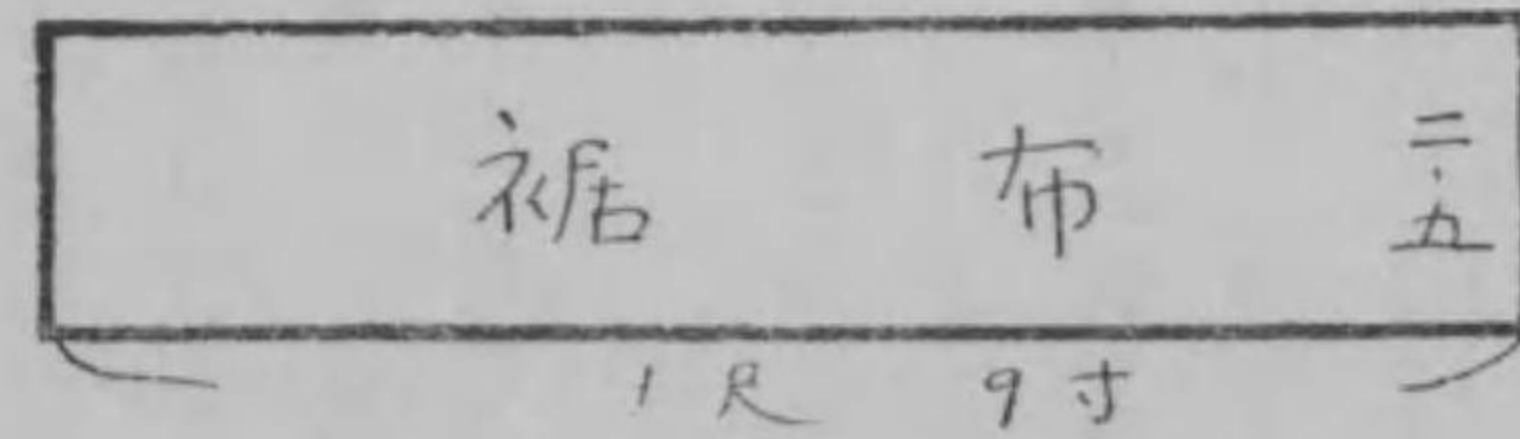
第三節 ボデース

ボデースは洋服の下着として最も大切なもので、而もこれにルロースや脊下留等を吊るのであるから夏冬共に是非用ひなければならぬ。

ボテース裁方



点線は原型
 上着の原型でボテースの裁方
 図の如く原型より大きく裁落す



第一、裁方

上着の原型で圖の様に前後の胴に弛みを加へ、顎下の處で一寸五分以上衿元の處で五分原型より大きく原型に倣つて裁ち落とし、兩袖ぐりは三分落す。兩肩と兩脇には三分の縫代をつけて裁ち、裾は前で一寸、脇の處で三分出し丸く自然に落ち落す。

第二、縫方

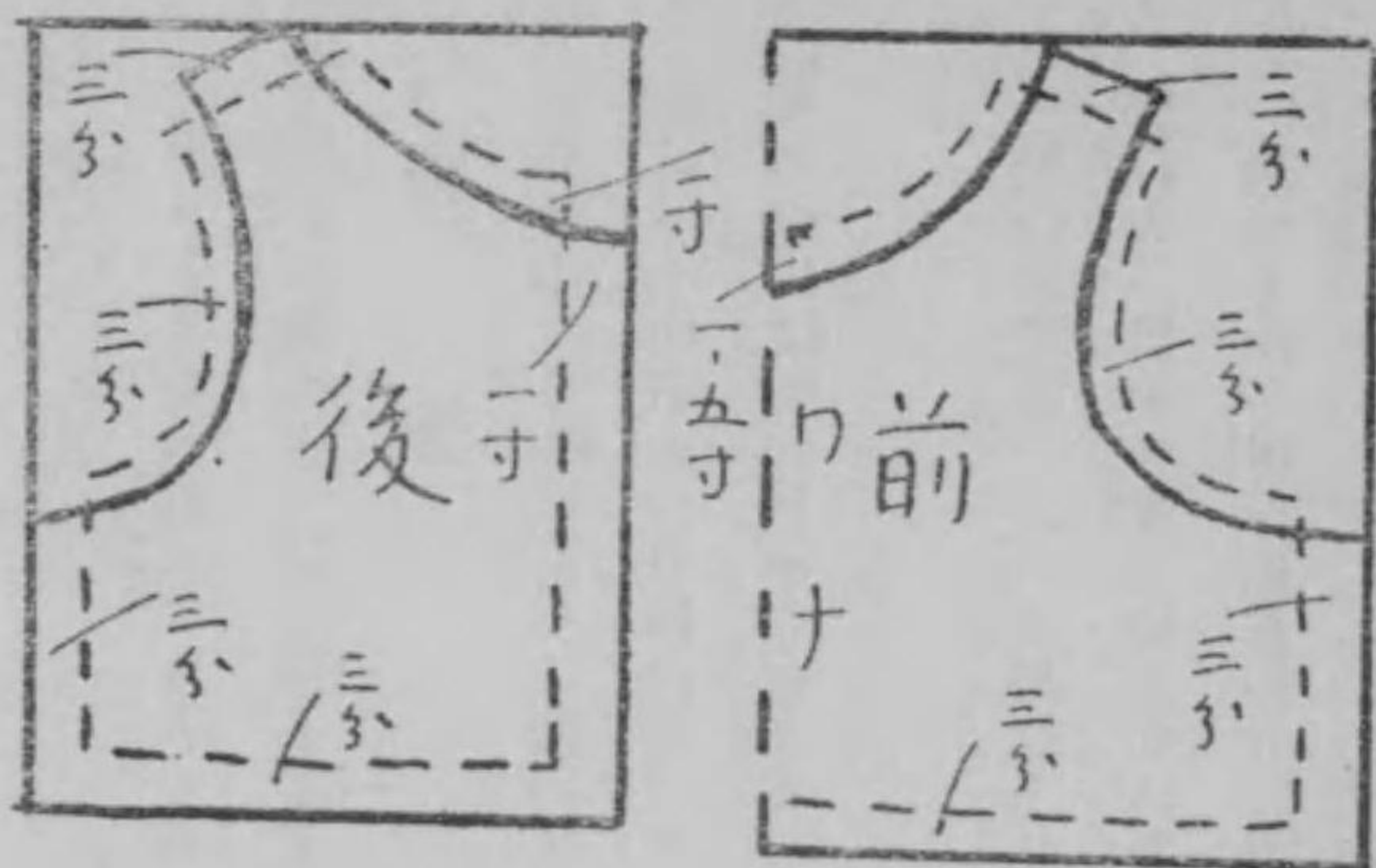
先づ後身頃の兩脇には見返し布を表に載せて縫ひ合せ、裏に返して端を一つ折にしてミシンを掛ける。それから前後の兩脇を(後身頃の方を一分出して)縫ひ合せて折を前に返し、縫込みの端を折つてまつり附ける。次に前身頃の裾口で、兩脇に各々一寸五分位づゝ残した間を裾布切れの丈に合せて縫縮め、裾布の端から八分入つた處と身頃とを表に縫目を出す様にして縫合せ、折を裾布の方に返す。そして縫目の上にはバイス布(斜布を三分位の上り幅に兩端を折つた布)を戴せてミシンで抑へ、又八分縫ひ込んだ裾布の端にも同様にバイスを附ける、此のバイスを抑へる下端のミシンを掛ける前に、兩脇の縫目の處にガーチスを吊る爲めの紐の輪を附けて置く(これ

は出来上り幅五分、長さ一寸位の紐を輪にし、輪の方を下に向けて附けるのである。ミシンが済んだらバイスの両端は裏に折返してまつりつける。裾口は細く三つ折にしてミシンを掛ける。それから両肩山を縫合せて折を後に返し、前後の衿元は大凡身體に合せて縫ひ縮め、斜の見返し布を附けて細く縁取りの様にまつり置く。袖附けの時にも斜布を表から縫ひ合せて裏に返し、二三分位の上り幅にまつり附ける。

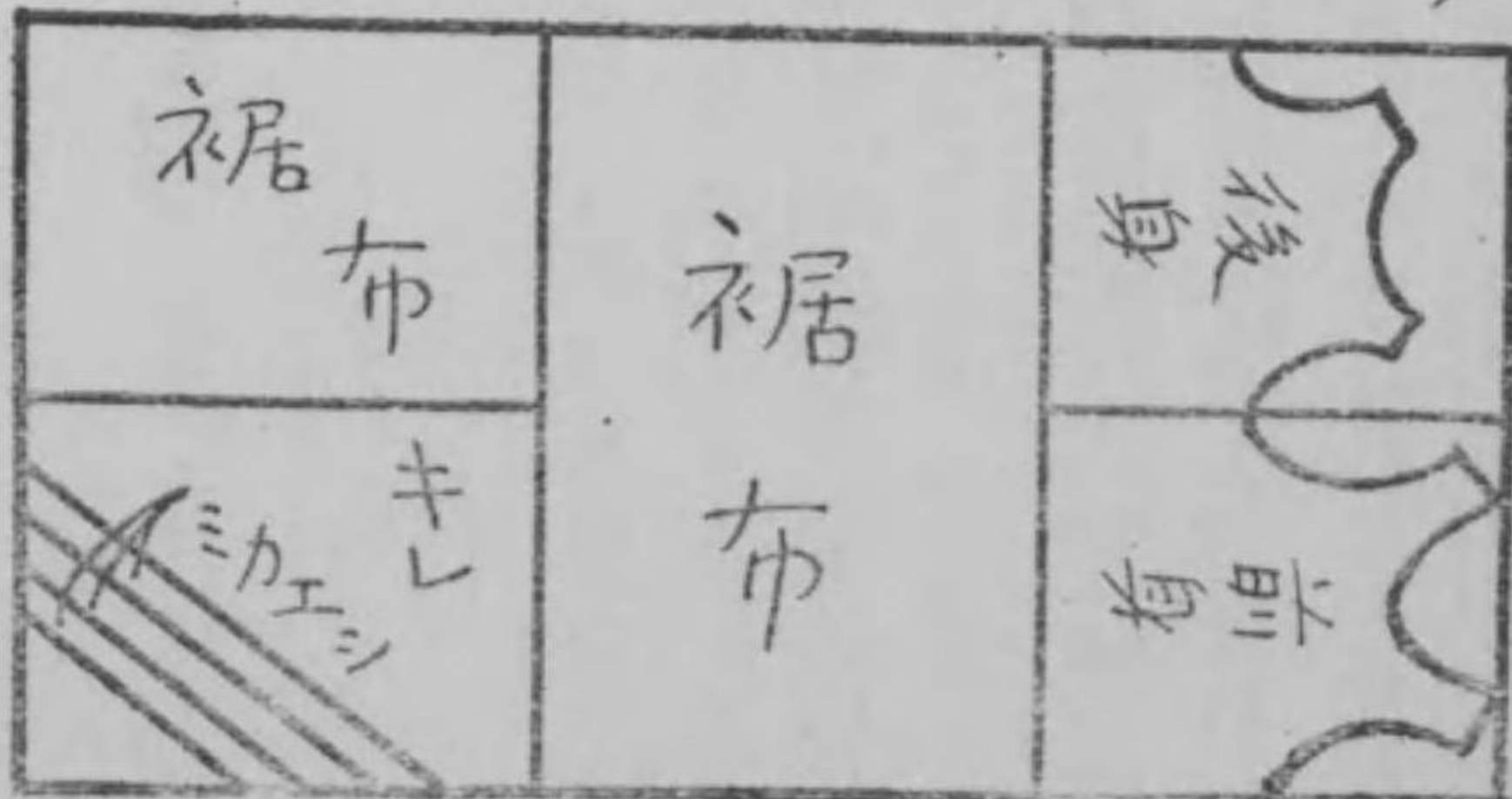
これまで出来上つたら、次に後右身頃の見返し布の中央で、上端から三分下つた處に四分位の横穴を明け、裾布の八分折つた真中にも同様の穴を一つ明け、此の中間には各々等しい間隔を保つて、二つの穴を明け都合四つの穴かゝりをなす。そして左身頃の方には穴と向ひ合つた處に四つの釦を着ける。又裾布のバイスの上下（前身の中央と兩脇の縫目、後の見返し處）に各々二つづゝ並べて四分位の釦を附けて置く。

第四節 ペテコート

裁方 (点線は原型)



総合圖 (キヤラコ布にて)



第一、裁方

シミーズ、ベテコート等も前述のものと同じく、上着の原型を用ひて圖の様に衿割りを大きく、兩肩と兩脇と裾口は縫代をつけて裁ち落すのである。

第二、縫方

兩後布を裏で七分位の上り幅に抑へて置いてから、後布を一分出して兩脇を縫ひ合せ、折を前に返して後布で縫込みを包みまつり附ける。それから兩肩山を縫合せたならば折は後に返し、衿ぐりの處と兩袖附の處には斜の見返し布を表に縫ひ合せ、裏に折り返して二三分上り幅にまつり附けて置く。

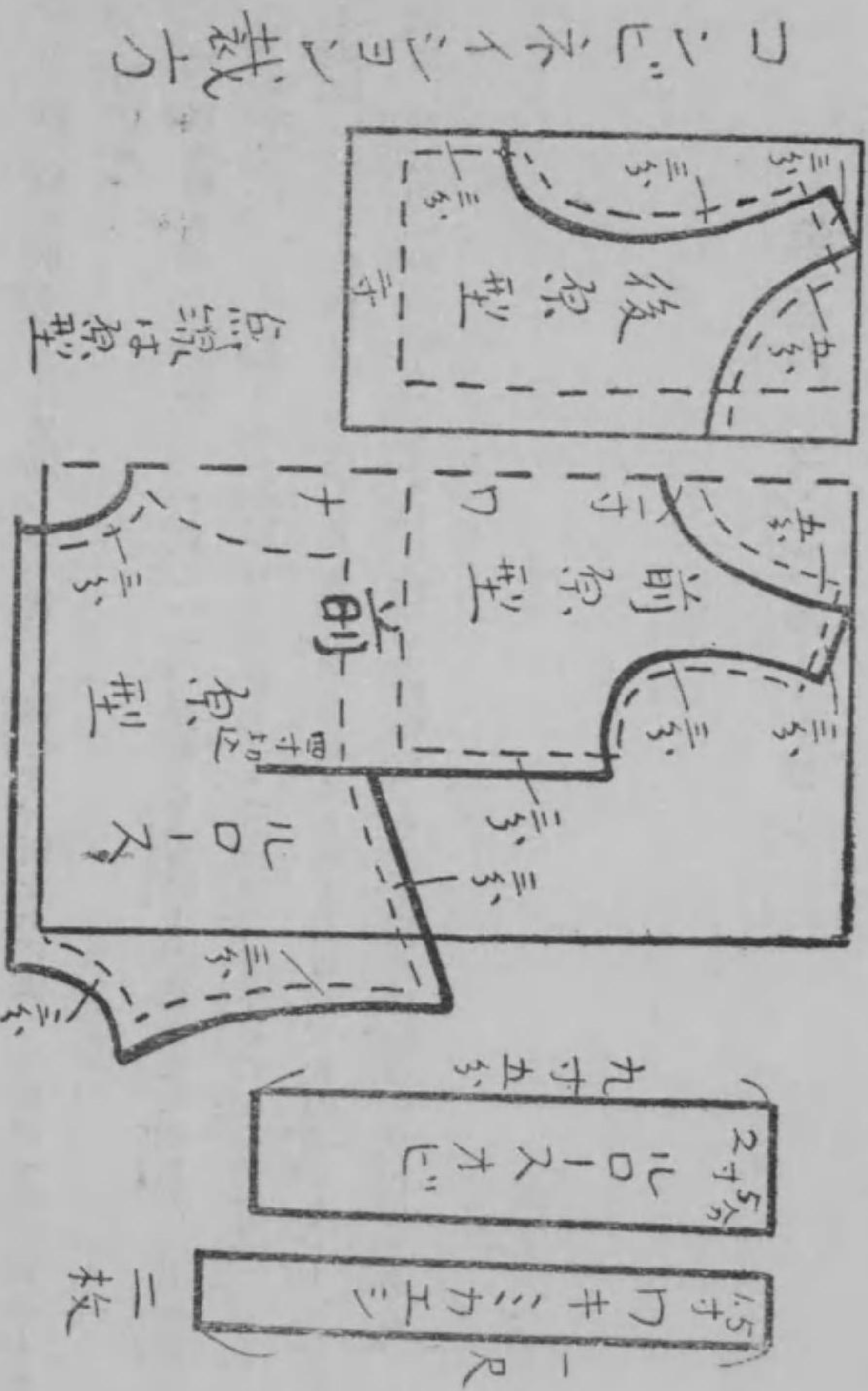
次に裾布を丸く縫ひ合わせる。(一ヶ所は上の方を三寸程明けて置く)そして裾口にレースを附ける場合には、裾口の一多半の長さのレースを丸く縫ひ合せてギャザーを取り、レースの裏と裾布の裏とを合せて縫つてから折を裾布の方に返し、裾布を下に下けて其縫目を包み上からミシンを掛けて抑へる。裾上の縫残しの處は裏に折返して一つ折にして劍形に抑へ置き、上身頃の裾の

方に合せて縫ひ縮め裾布の方に見返し布を當て、縫合せ、折を上に戻して縫目を包む様に上身頃にまつり附ける。

釦穴は、後身頃右の方の三分下つた處に一つ、裾布と上身頃とを縫合せた個所から五分程上つて一つ、其中間に一つと都合三つの穴かゝりをなし、これに準じて下前に鉛を附ける。

尙ほ裾口のレースの代りとして同じ用布の飾布を用ふる事もあるが、此の場合もレースを用ふると同様に裾口の一多半のものを裾口に合せて縫縮め、そして裾布に縫ひ合わせるのである。

第五節 コンビネーション



第一、裁方

上着の原型とルロースの原型とでコンビネーションは裁てる。即ち圖の様に原型二枚を組合せて裁つのであるが、此時ゆるみ分として各原型の間に一寸五分位の隔たりを設け、縫代は前述のものと同差なく圖に示す様に裁ち落す。

第二、縫方

兩後身頃を裏の方に七分位の上り幅に抑へ置き、裾を三つ折にして縫ふ。それから後の股上を袋縫ひにして右の方を上にして折り返し（裾口にレースを付ける時にはベテコートと同じ様に縫合せる）、次に股下も袋縫ひに縫ひ合せてから前後の脇を袖ぐりの處から合せてこれも袋縫ひにし、折を後に返しておく。そして兩脇の縫ひ残しの處には、ルロースの見返しの様に持出し布をつける。又、後股の上は帶丈に合せて縫ひ縮めをなし、ルロースの帶附と同様にする。

其次には兩肩山を縫ひ合せるがこれも折を後に返す。それから衿元と袖ぐりの處には斜の見返し布を表に當てて縫ひ合せ、それを裏に折り返して二三分の上り幅にまつり附ける。

これまで済んだならば釦穴をあける。即ち後上身頃(右)に衿元から二三分下つた處に一つと、裾から二三分上に一つ、そして其中間に二つか三つの穴を明けて穴かどりを終つたならば下前に釦を附ける。又、後ルロス帶の兩横に横穴を明け、真中は縦に明けて各々穴かどりをなす。そして釦は兩脇の縫目の上と上前見返しの上とに附けて置いて留める。

第六節 下着類についての注意

以上述べた處で下着類の作り方は一通り終つたのであるが、其大小は前述の裁方に倣つて上着とルロースの原型さへあれば如何様にも裁つことが出来る。又好みに依つては裾口にゴムテープを通して緊める様にしたたり、此外に色々の恰好があるけれども、併し此等でも裁方に於ては前述のものと大差なく、唯だ其時々に応じて前の裁方を斟酌應用すれば可いのである。

冬などの寒い時に着る下着に袖を附ける時は、袖ぐりを前のもので大きくしないで上着の原型に二三分の縫代をつけた儘で裁ち、そして袖附けは上着と同じ様にする。總じて、下着の袖

丈は半袖の方が宜しいが、ボデースとベテコートとは全然袖を附けない方が宜しい。

第七節 女兒服給物に就て

女兒服の給物を拵らへるには、胴の上半身に裏をつけるだけで充分である。裁方や縫方も、單物に較べて非常に難かしいものゝ様に考へられるのであるが、左程困難なものでは無い。表と同様に裁ち又は縫つて行けば良いので、たゞ、袖口だけは凡そ四五分位控へ目にするに都合よく、合せ目は、總べて裏の方へ表を少し折返す様にするに可い。

薄物の時は全體に裏を附けることもあるが、此の場合には、柔かい切れ地を選ぶがよい。絹物でも同様である。總じて裏地は表地に釣合ふ様な切れ地を用ふる心掛けが肝要である。

第八章 男兒服

嬰兒服から二三歳幼兒服までは、男女共殆んど同型のものを用ひて一向差支へなく、特に男兒用とか女兒用とか區別をする必要はないが、三四歳頃から男兒は普通の半ズボンを用ひる様になる。そしてその形の種類は女兒服程の變化はないが、多少の變化は有るから、次に二三種のものに就てその拵へ方を述べることにする。そしてこれ等の拵らへ方さへ充分に會得したならば、其他の大低のものは自由に應用する事が出来る。

我國では男兒が七八歳にもなれば詰襟を用ひさせる様になつてゐるが、せめて子供の間だけでも此の様な窮屈なものでなく、例へば、シャツブラウスの様なゆつくりしたものを用ひさせたいものである（これはズボンとシャツブラウスとを用ふるのみで非常に簡單であり而かもゆつくりして着心地良く非常に輕快なものである。冬季は其上に着て出かけるとよろしい）それで次に詰襟を除いた他の種類のものゝ拵らへ方を述べる事にする。

第一節 寸法の取り方

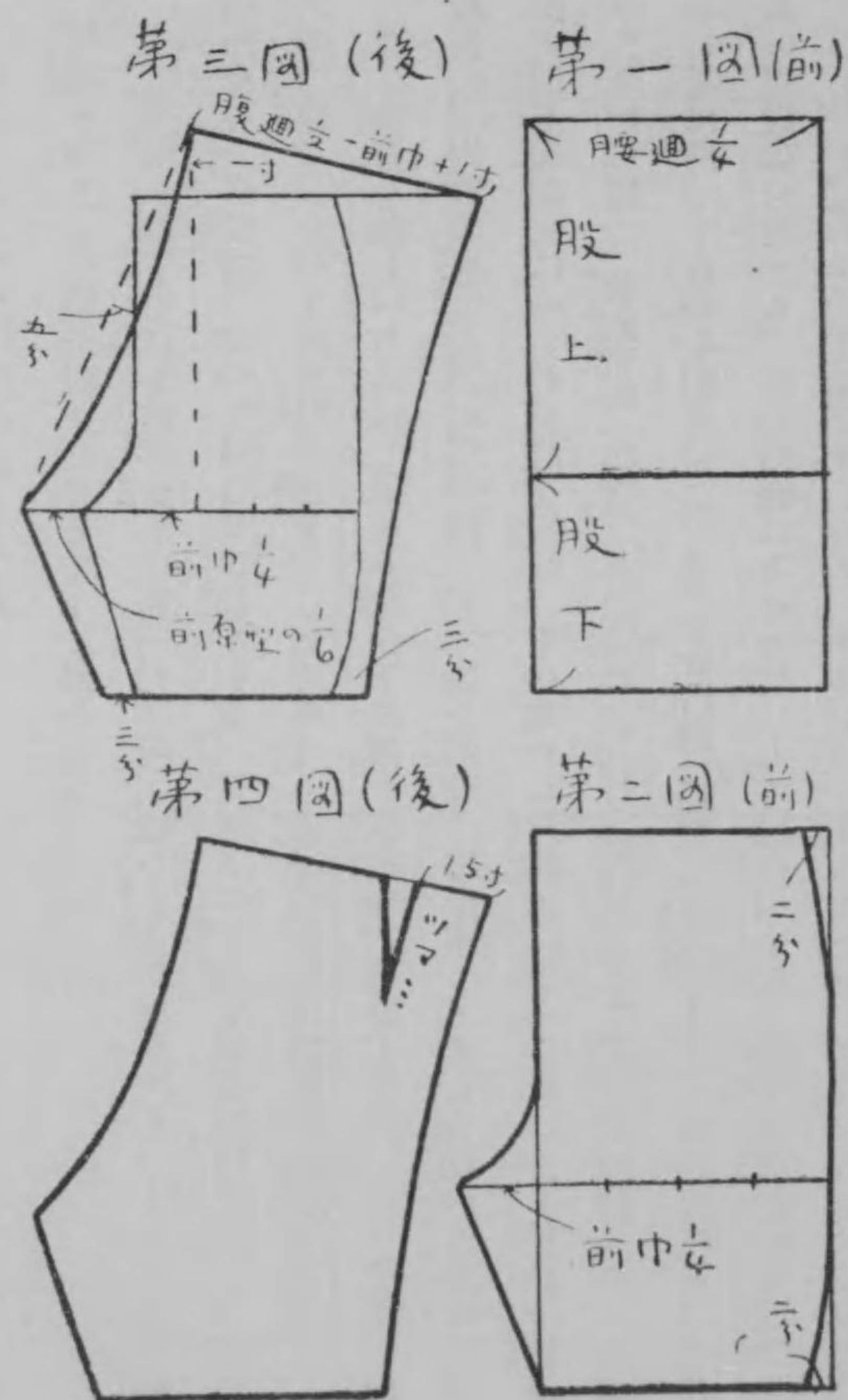
男兒服の寸法の取り方は女兒服のそれと同様に、袖廻り、脊幅、脊丈、胸幅、袖丈等を測る、更に總丈は脊首の衿元からお尻の隠れる邊りまでを測つて定め、腰廻りは腰の最も太い處の周圍を測る。股上は細腰からお尻のふくらみの下まで、股下は普通は内股に於て上から膝頭までを測る、（尤もズボンの短かいものを好む場合には、それよりも短かく測る）、腹廻りは細腰の周圍の寸法を計るのである。

これに依つて標準寸法を示すと次の如くである。

男兒標準寸法

	(三四歳)	(六七歳)	(九、十歳)
一 衿	七寸	七寸三分	七寸八分
第八章 男兒服			一二五

ズボン原型の拵へ方



第二節 原型の拵らへ方

尙ほ子供に依つては、標準寸法に當まらないものも少なくないから、此表にのみ頼らないで、それ／＼の子供につき實際の寸法を精密に測つてみる事が必要である。

ズボン				上着					兒童の洋服
腹廻り	股下	股上	腰廻り	總丈	袖丈	胸幅	背丈	背幅	
一尺四寸	二寸	五寸三分	一尺四寸七分	一尺	五寸八分	五寸七分	五寸五分	五寸三分	一尺四寸
一尺四寸	三寸	五寸八分	一尺六寸五分	一尺一寸五分	七寸	六寸	六寸	五寸七分	一尺五寸五分
一尺五寸	三寸	七寸八分	一尺六寸五分	一尺一寸五分	七寸	六寸	六寸	五寸七分	一尺五寸五分
一尺六寸	六寸	七寸五分	一尺九寸	一尺三寸五分	八寸五分	六寸八分	七寸五分	六寸五分	一尺八寸
一尺六寸	六寸	七寸五分	一尺九寸	一尺三寸五分	八寸五分	六寸八分	七寸五分	六寸五分	一尺八寸

ズボン原型の拵らへ方

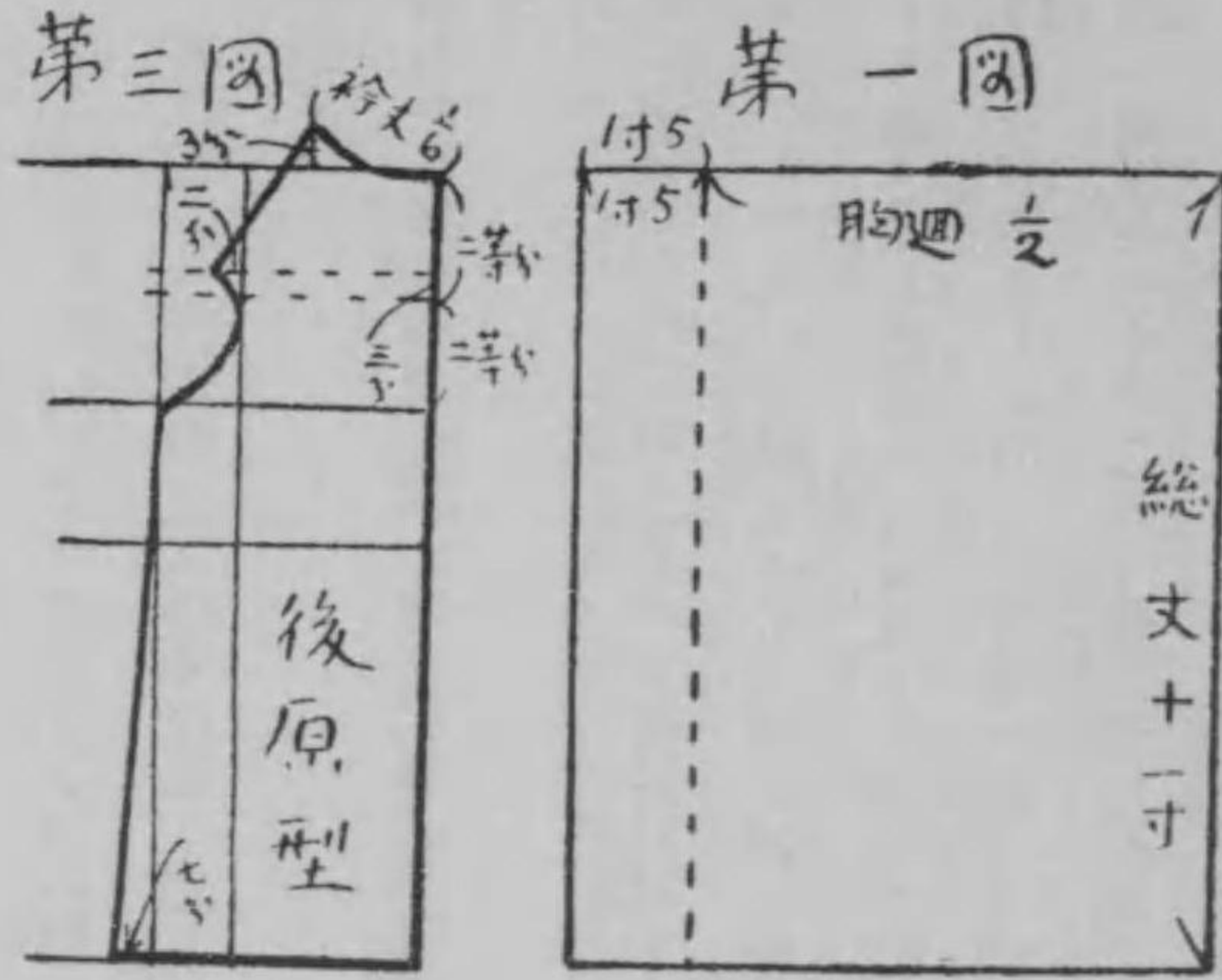
第一圖、腰廻りのE4と股上股下の和とで平方形を造る。

第二圖、次に前幅(腰廻りE4)を四分分して其一だけ股下線を左方に延長する、そして其先端から股上の約三分の一の位置に向つて弓なりに線を引き、又股下の下端へ直線を以て結び付ける、それから上下の脇を二分づゝ圖の様に落す、これでズボン前身の原型は出来たわけである。

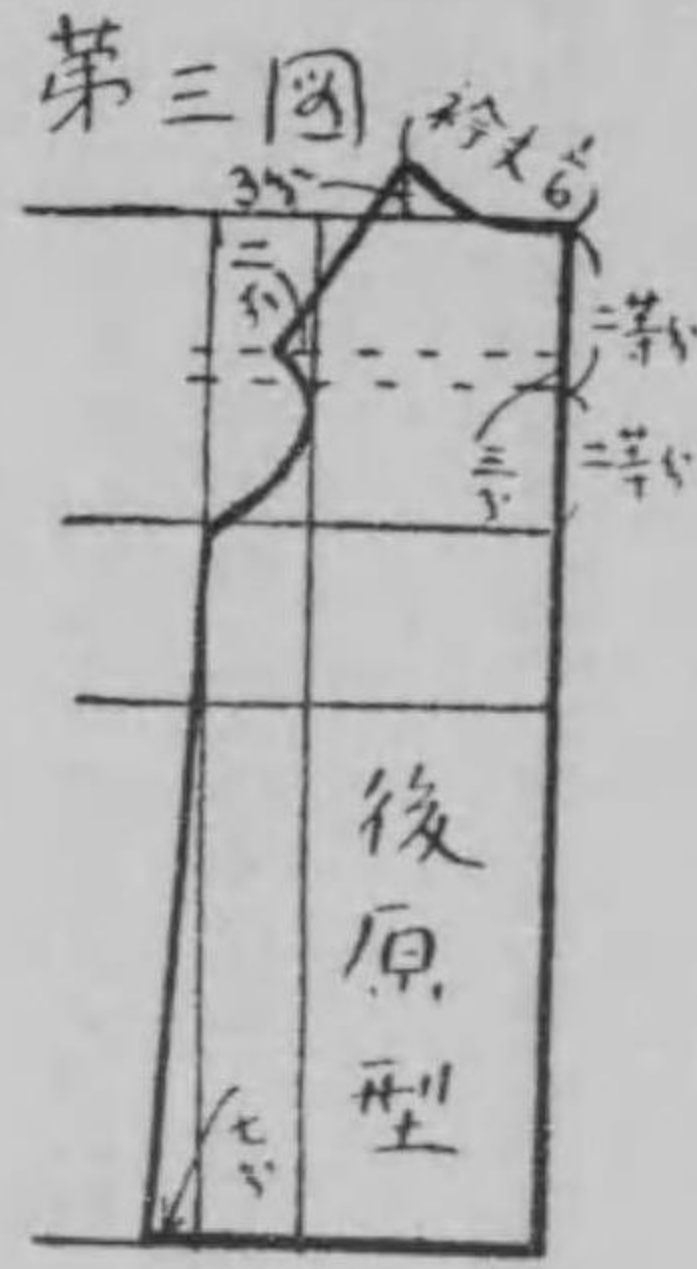
第三圖、更に後身を拵らへるには、前身原型を下に置き前幅を六等分して其一だけを更に前の原型より延長し、裾口の處(下端)も三分廣くして端を斜線で結び附く。次に右端から前幅の四分の三の位置で股上線の上に一寸の直線を設け、その端から腰廻りの二分の一から前幅を除き更に一寸加へたゞけの線で、前身原型の上端を右に延長した線と結びつける。左方前身原型よりも其六分の一を出した端に向つて直線を引き、それより五分内側に刻つた弧線を引く。次に右横に三分出しそれから上の斜線の右端から、少し内側に入れる様にして線を引いて大體後原型が終る。

第四圖、その出来上りから圖に倣つてツマミの處を切り落し後原型が完成するわけである。

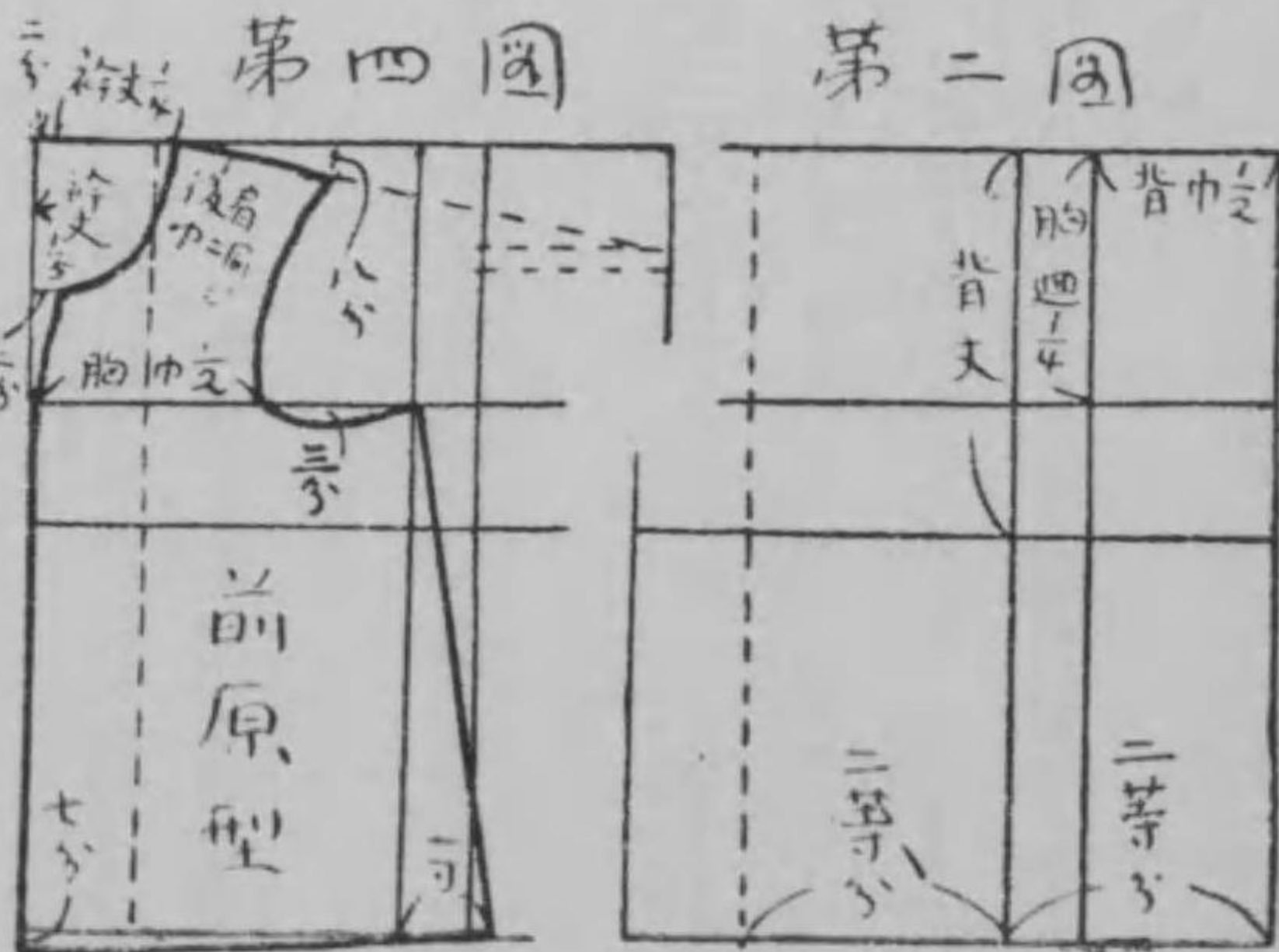
上着原型の拵らへ方



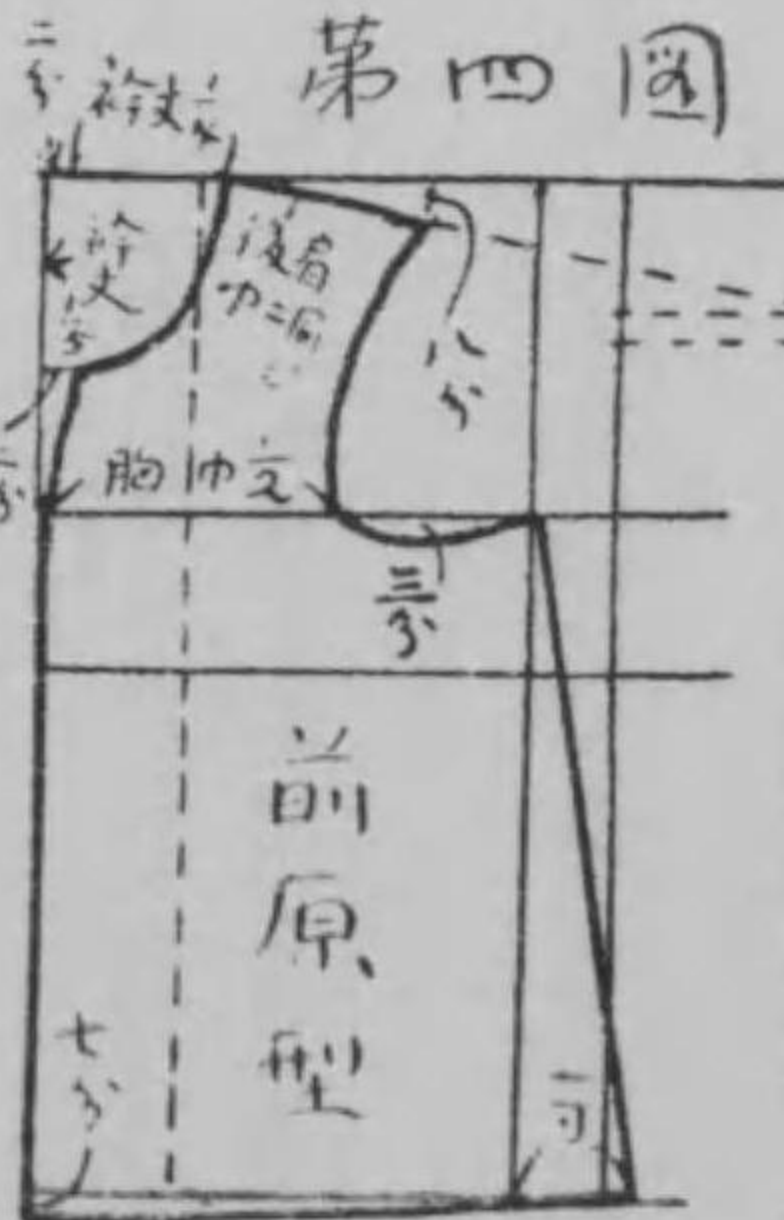
第一圖



第三圖



第二圖



第四圖

上着原型の作り方

第一圖、横は胸廻りの E_2 に一寸五分を加へ縦は總丈に一寸加へた寸法にて方形を作る。

第二圖、右の端より脊幅の E_2 の寸法にて縦の線を引き、更に一寸五分を除いたものを等分して縦に線を引く。

横線では上から脊丈の所へ横に線を引き、更に胸廻りの E_4 の寸法に合せて上端より横に線を引く。

第三圖右上の端から衿丈の E_6 の寸法だけ定め上の線より三分上つた所に向ふて三日月形に線を引く。(後衿ぐり)次に胸廻り E_4 の二等分線を作りそれよりも三分上つた處に横線を描く。此線と脊幅 E_2 の線と交る處より三分左方に標をつけ、衿ぐりの線と斜に結びつける。(肩下りの線)肩下りの線より胸廻り E_2 の二等分線へ袖ぐりの線を引き、袖ぐり下より二等分線の下端で七分左寄せの處へ縦線を引く。これで後原型が出来た事になる。

第四圖、前身頃は左端から二分除き衿丈の E_4 の寸法に習ひ横方に標を付け、縦線の所で上端

より衿丈の E_5 の寸法を定め E_4 の所に向つて衿廻り線をひく。肩幅の寸法は後肩幅に習つて定め肩下りは上端の線より八分下つた所に向つてひく。

前左端から胸幅の E_2 の寸法を圖の様に標付け前袖ぐり線を引く。

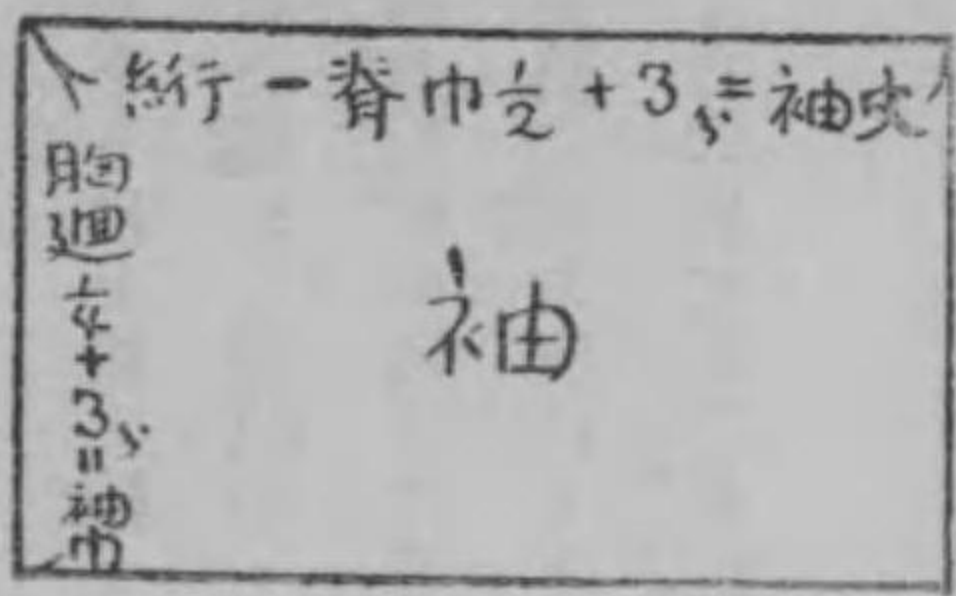
前身頃裾の所は二等分した線より一寸だけ長く脇の所より斜線を引く。

後脇の裾の所にて下端より七分程上りたる所に標付け、前より少し丸みを付けて斜に裁ち落す。衿ぐりの所にし二分除いた所は圖の様に丸みを付けて裁落す。

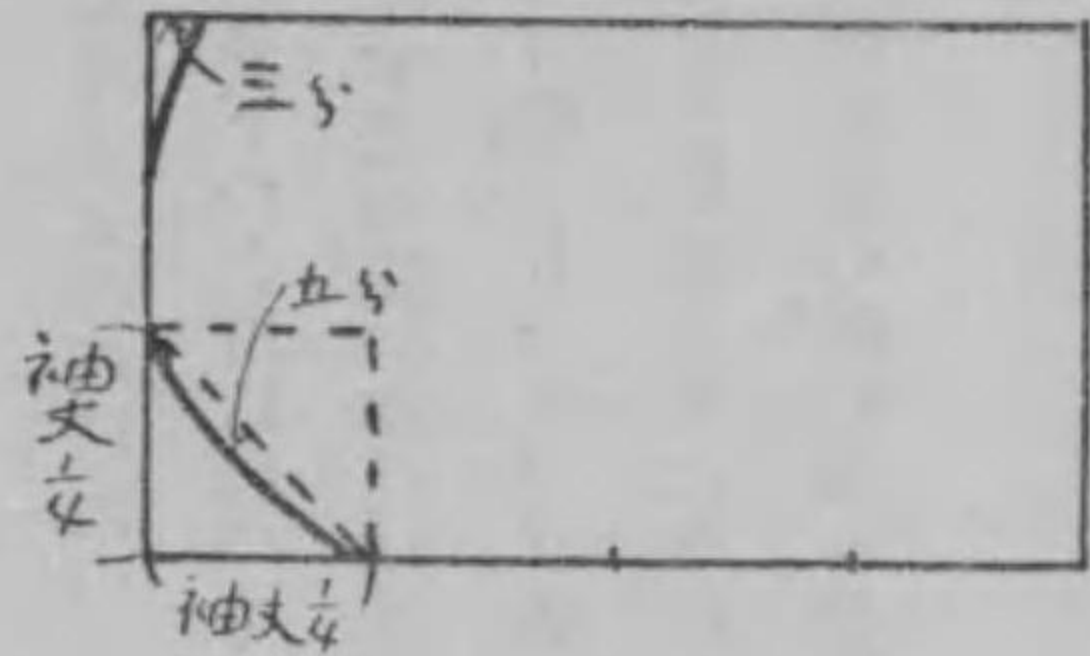
袖原型の拵へ方

第三圖は上袖原型出來上り、
第四圖は上袖原型より下袖原型の拵へ方。

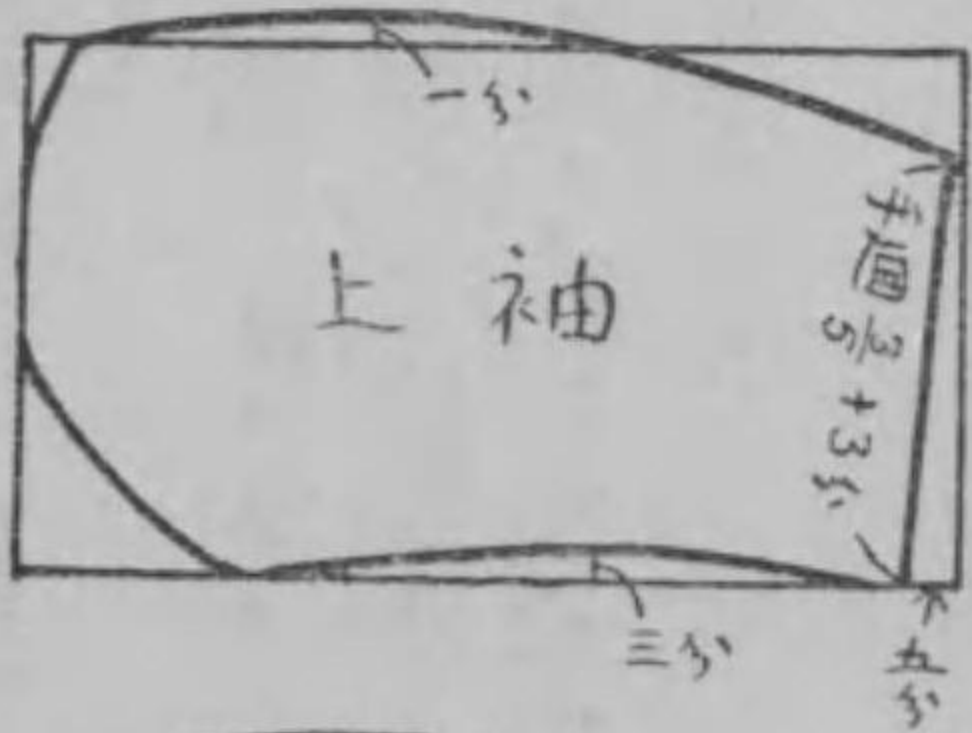
第一圖



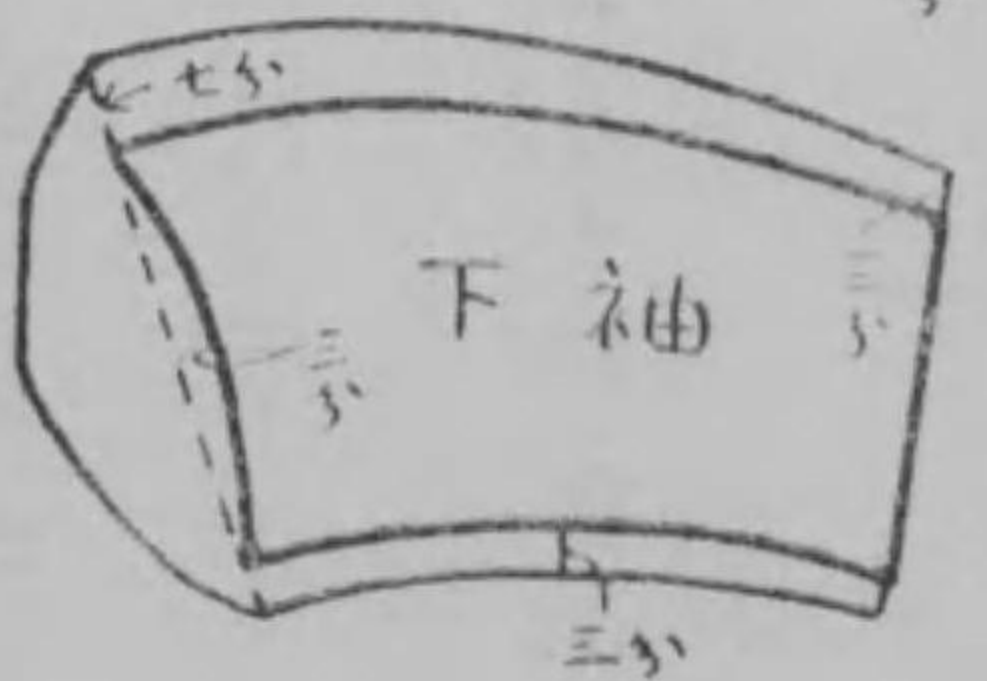
第二圖



第三圖



第四圖



袖原型の作り方

第一圖、袖丈に三分加へ袖幅は胸廻りの二に三分加へたる寸法にて長方形を作る。

第二圖、袖丈の二に三分の所に標を附け、袖幅も二に三分の所に標をして兩方を結びつけ、真中の所で斜線より五分程だけ丸みを附けて弧線を描く。上端で三分程入れた所より其の丸みに向ひ自然に裁落す。

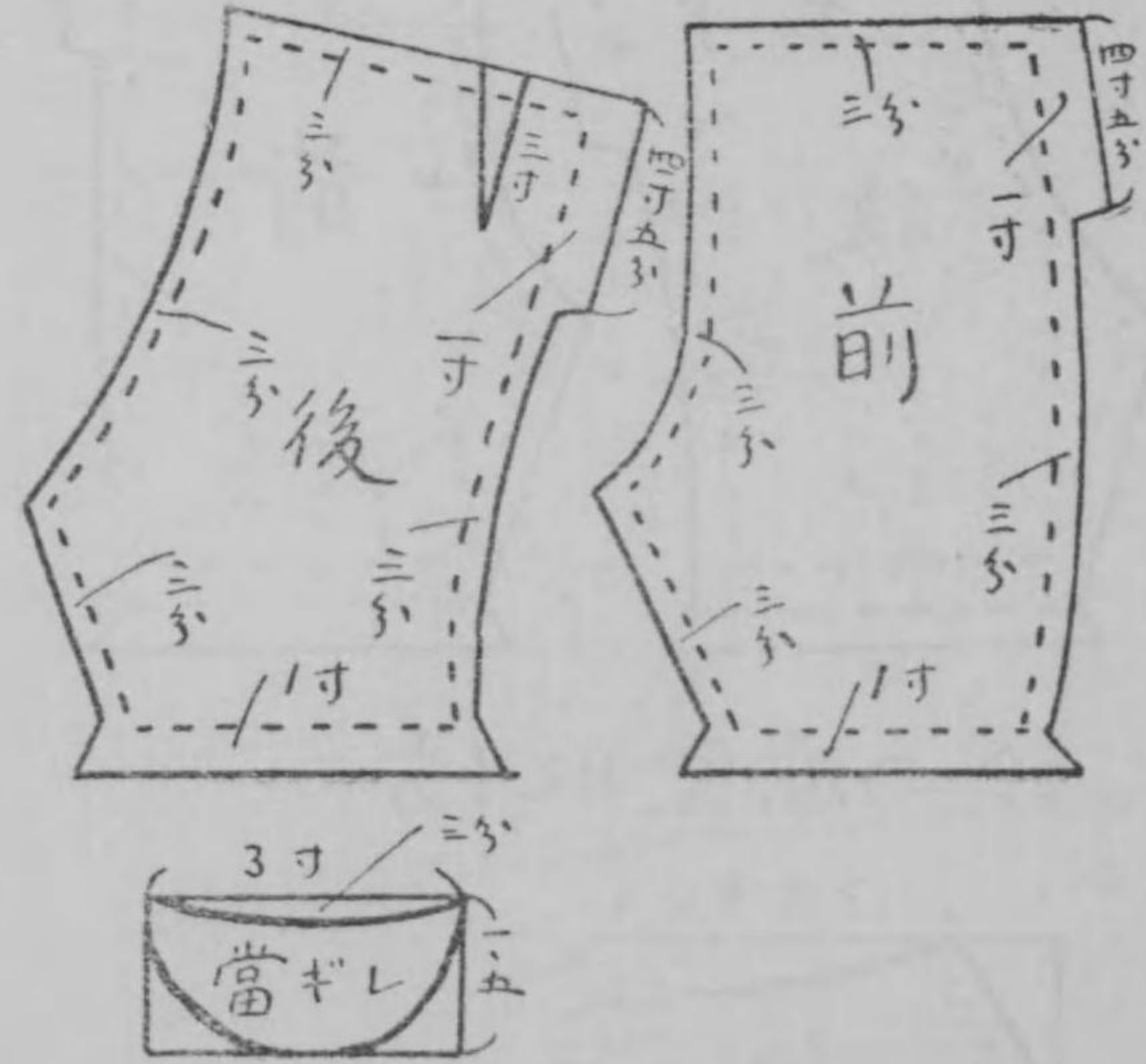
第三圖、袖口下の所にて五分だけ入つて手廻りの五分の三より三分廣く寸法を合せて袖口の線に斜線を引く。

袖下の真中に三分程入れて、袖附上り袖口に向ひ弓なりに線を引く。

袖山の所は丸みを附けて袖口に向ひ線を引く、これで上袖が出来る。

第四圖、上袖が出来たならば、上袖の原型から、袖下の所で三分落し、袖山袖口の所で七分に定め袖口へ上袖に習つて線をひく、袖附山より袖下に點線を引き更に三分程自然に裁落し下袖にする。

ズボン縫代つけ方



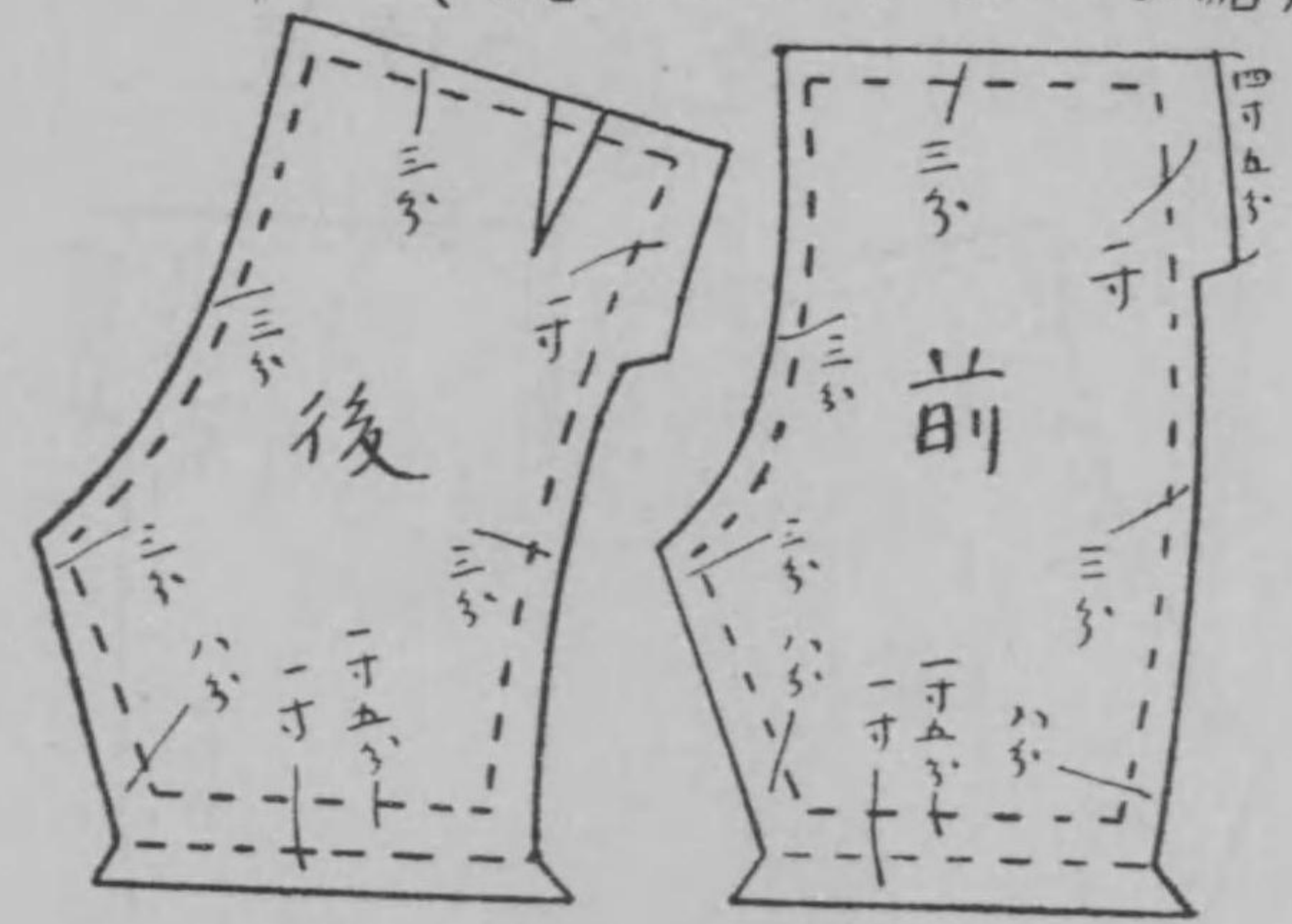
第一号 出来上り圖



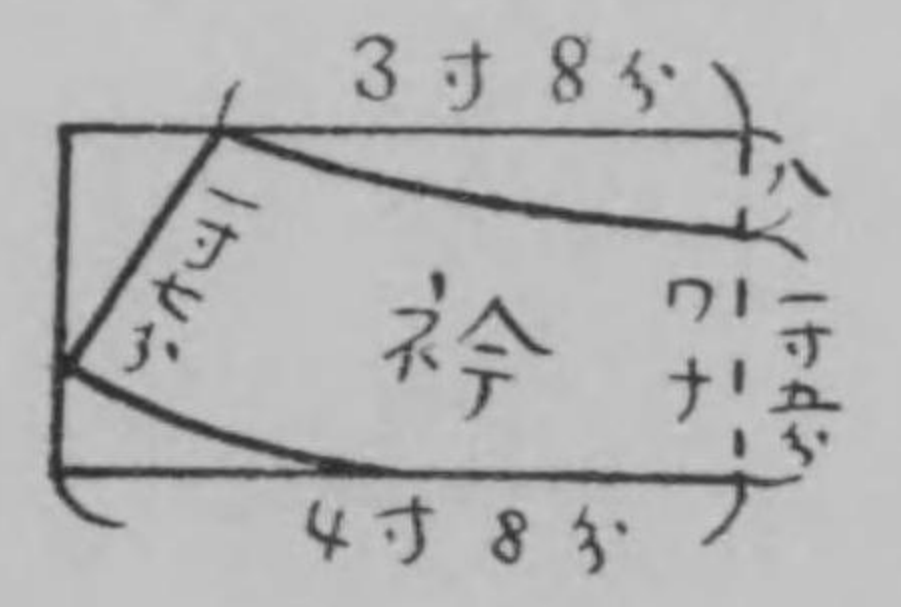
第三節 男兒服第一號

スボン縫代つけ方

(裾口にゴータープを入れる場合)

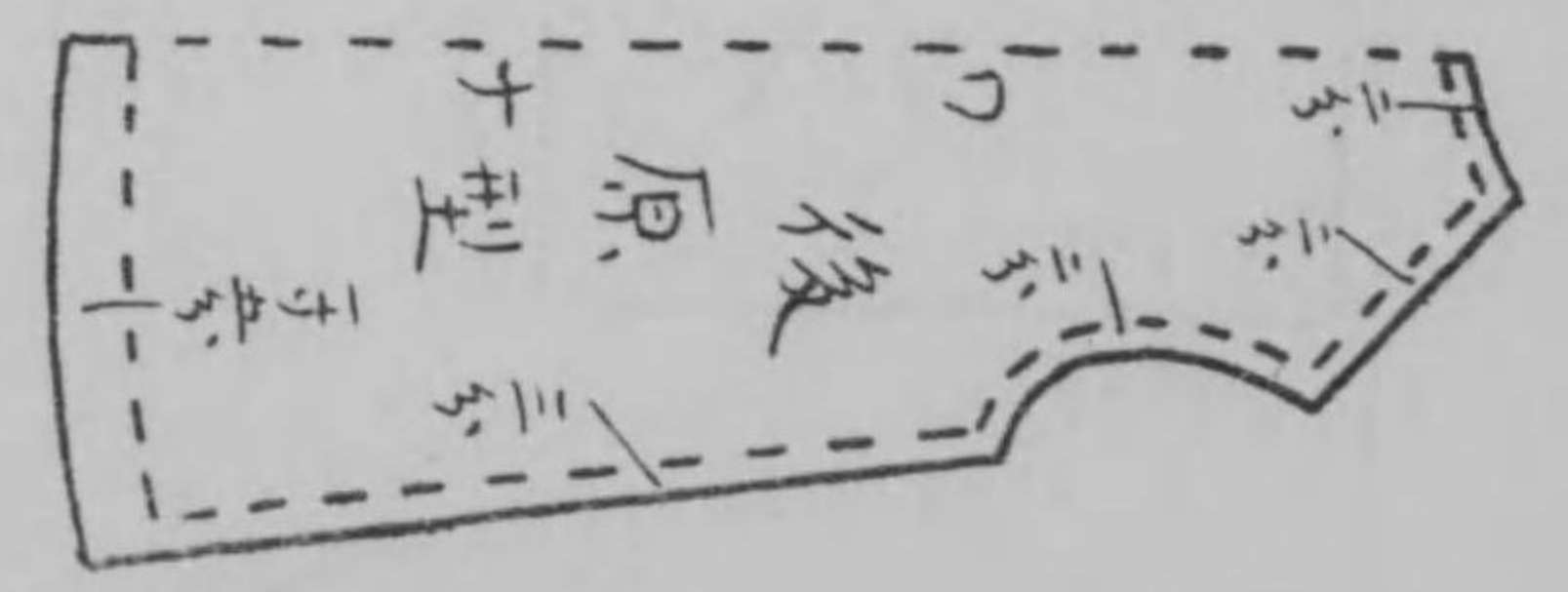
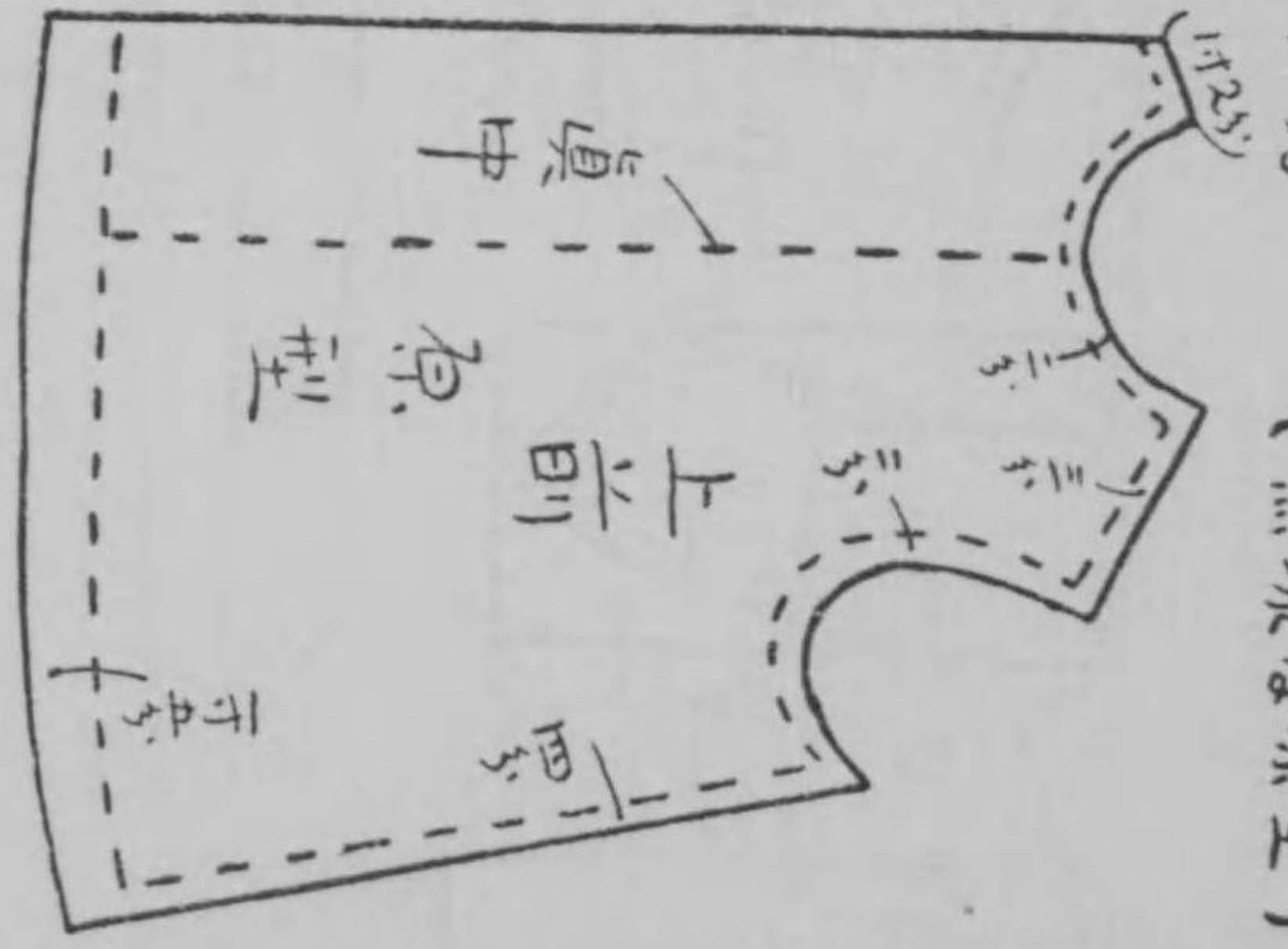
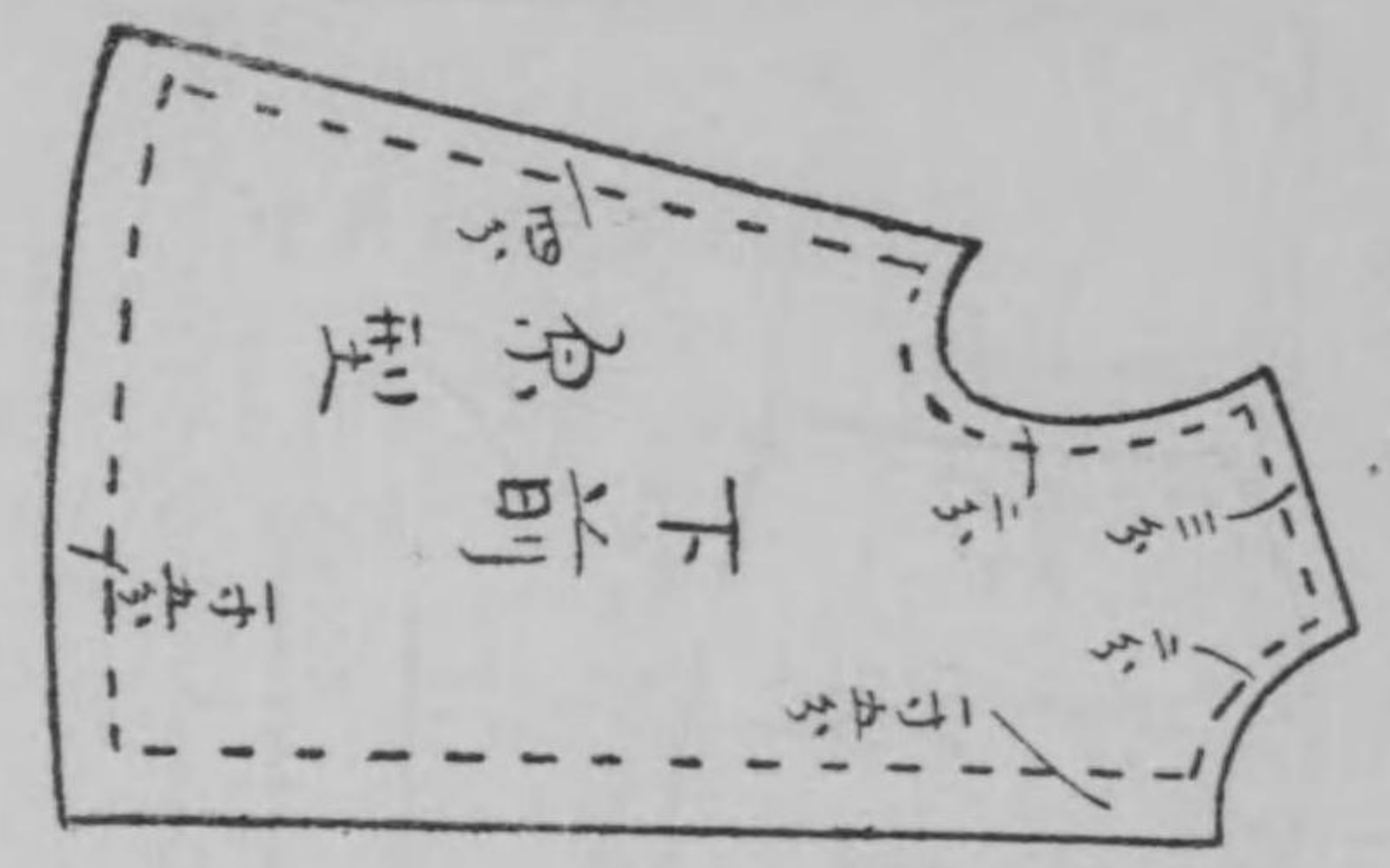


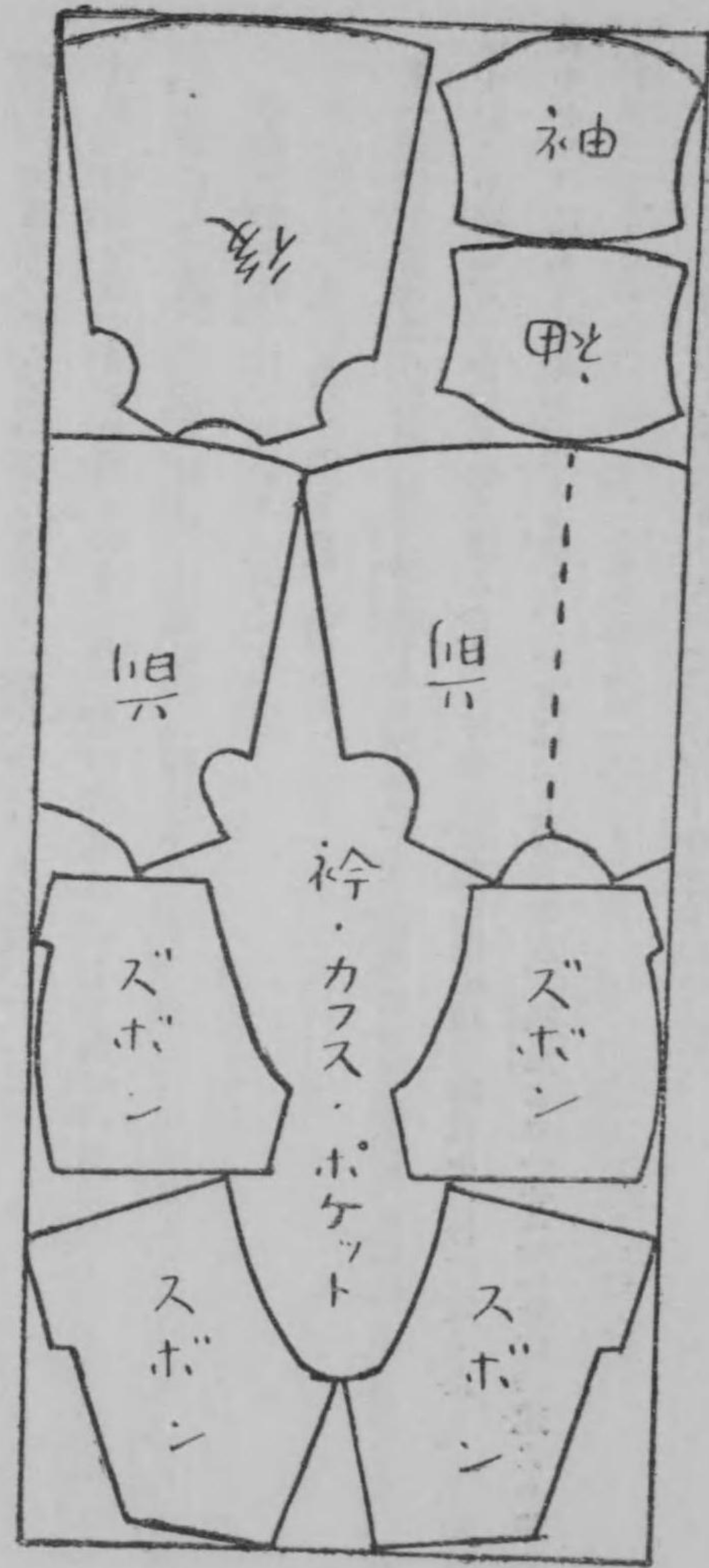
衿の原型取り方



上着縫代のつけ方

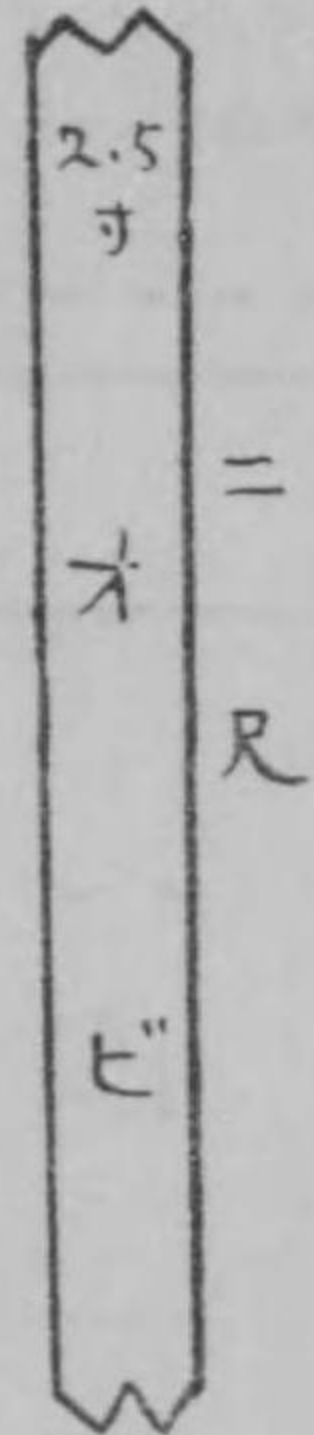
(点線は原型)



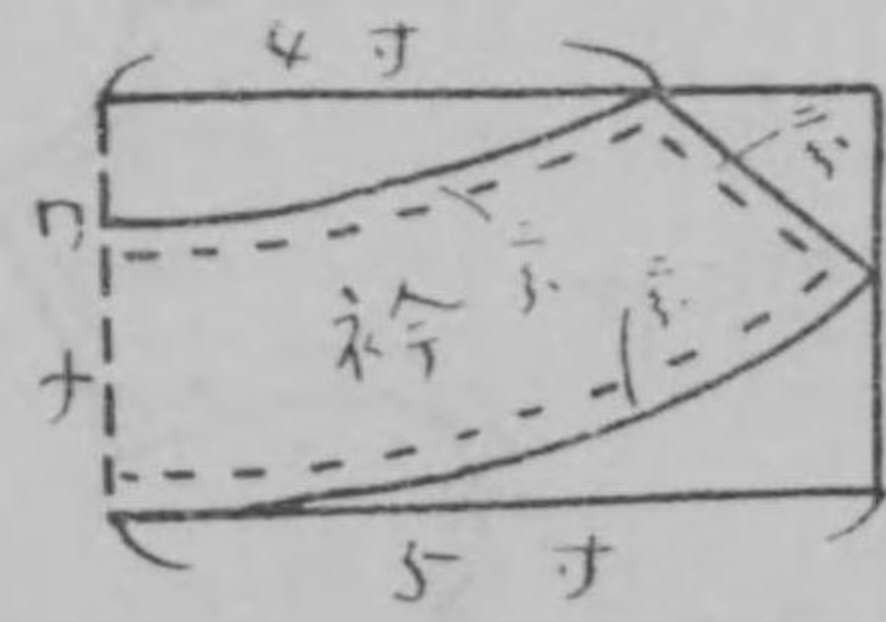


總合圖

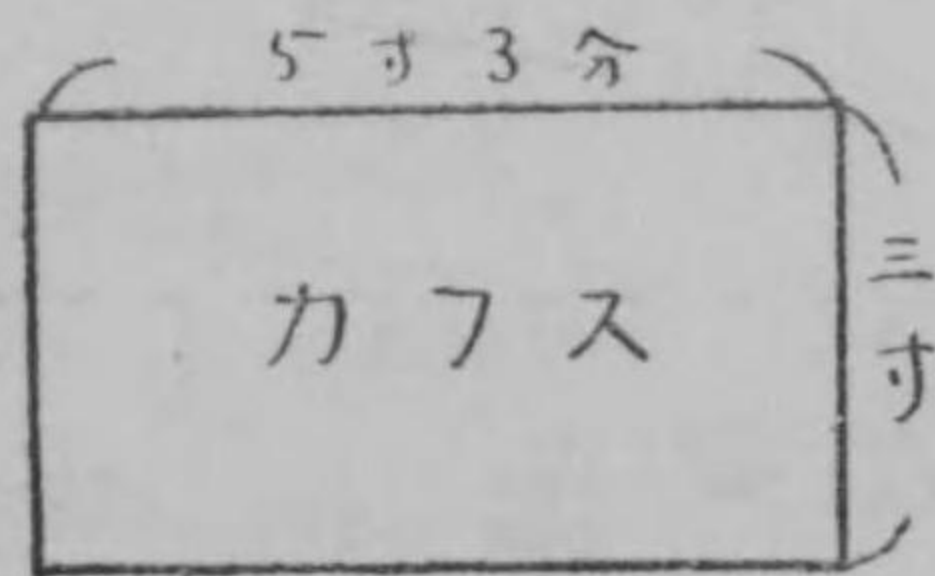
点線は原型



二尺



5寸3分



二枚

ズボンの縫代のつけ方

原型が出来上つたら圖の様に各部分に縫代をつけ布を裁つ。

注意 前布を裁つときは股上のところで布目を真直にして裁つ。後は股上のところで斜になる様にして裁つ。横布は決して使はない様にすること、若し用布の足らない時は、裾折と後の股上の上端では、はいでよろしい。

上着の裁方

第一號の上着を裁つには、先ず後身頃をワナ付にして原型に合せ圖の様に縫代をつけて裁ち、前は中心より横の方で合せるのであるから、下前は原型に圖の様に縫代をつけて裁ち落し、上前は真中をワナにして原型を當て、裁ち、一方は（上前左の方）衿元より一寸二三分位の處より裁ち落す。

袖はカフスが付くから其のカフスの丈だけ短く裁落すのである。

衿も圖の様に原型を作り、縫代はつけ方圖の様に付ける。

衿の原型は洋服の格好によつて異なるものであるから、其の時々によつて變更するがよい。

布地の取り方に就て

布地の取り方は、其の原型の大きさによりて違ひ、又用布もそれによつて異なつて來るものである。

ズボンの縫ひ方

先づ前後の兩脇を上の方三寸五分明けて縫合せ、折を前に返し、明いた處で前布にポケットの布を當て縫代だけ折返してポケット布にまつり附ける。ポケット布の他の一方は細く三つ折に縫ひ、更に全體を二つ折にし、口から一分程控へて袋になる様に下を縫合せ、其折り重ねの端を脇の縫目の上に重ねて置く。それから後布の明きの處には裏に見返し布を附けて持出しの様になし、表から脇の縫目の上に二分ばかり離して飾りミシンを掛けるが、此時にポケットの袋の端も一緒に縫ふ事となる、次に後布のツマミにミシンを掛け、前股上を下の方より縫代だけ除いて一寸程縫合せ、其上を一寸程明け残りを上端まで縫合せる。後股上を全部縫合せ前後とも縫目を開いて

一つ折になし、兩方にまつり附ける。股下は前後を揃へて一方の裾から他方の裾まで一度に縫合せる。裾は縫込みだけ裏に折返し、一つ折にしてまつり附ける。上端（腹廻り處）は前後に見返し布を表に當て、縫合せ、裏に返して八分位の上り幅にまつり附ける。前股上合せの二寸明けておいた處には當て布を右の方に當て、端を千鳥掛けにして表の縫込みの處にまつり附ける。（當て布は二枚合せて表に返し飾りミシンをかけて置く。）最後に上端の見返には前後共兩横に一つづゝ横穴を明け、真中には縦穴を明け穴かがりをして出來上るのである。

此の外ズボンには裾口にゴムテープを入れたものもあるが、これは裁つ場合に股下を一寸か若くは一寸五分位長く裁ち、幅も原型より兩方に五分位づゝ廣く裁ち落し、出來上つてから裾口の裏に穴を一つ明けてそれからゴムテープを通すに宜しい。

上着の縫方

裁方圖に倣つて裁つた用布を、最初に袖口ワナの方より三等分して袖下のところまで二三残し残りをカフスの丈に合せて縫縮め、カフスの表と袖の表と縫合せ、袖下を丸くカフスの先ま 縫合せ

縫目は開いてカフス布を裏に折り返し袖口の縫目の上にまつり附ける。袖下は縫代を一つ折にしてまつり置く。身頃の上前の端を裏に折返して八分位の上り幅にミシンを掛ける。下前の方も一方の端を七分位に折返してまつる。それから前後身頃の兩脇を前布の方を出して縫合せ、折を後に返して前の出した布でそれを包んで表から飾りてミシンを掛ける。裾折は折込み分を裏に折返しシツクにて押へ所々に襷を寄せて角ばらぬ様に裾折りする。兩肩も前布を出して後と縫合せそれで後を包んで押へておく。袖付けは袖下の縫目を脇縫目よりも一寸二三分程前に寄せて縫合せるが、此時袖の方が大きい場合には肩山から後に一寸、前に二寸程の間で袖を縫縮める様にすると肩の處に膨らみを持って良く附けられる。一體に袖附は袖の方を緩み加減にする方が恰好が宜しい。（袖附の恰好をよくするには、其袖が自然に垂らした手としつくり調和する様に、袖下の縫目を身頃に合せてつける。）次に衿は裏表を縫合せて表に返し飾りミシンをかける。そして衿の真中と後身頃の真中とを合せ（衿の兩端は上ミ下との真中まで）、見返し布は衿廻りの端から端まで縫合せ、裏に折返して身頃にまつり附け、上前の肩の處は裏に折返してまつり置く。

兒童の洋服

一四四

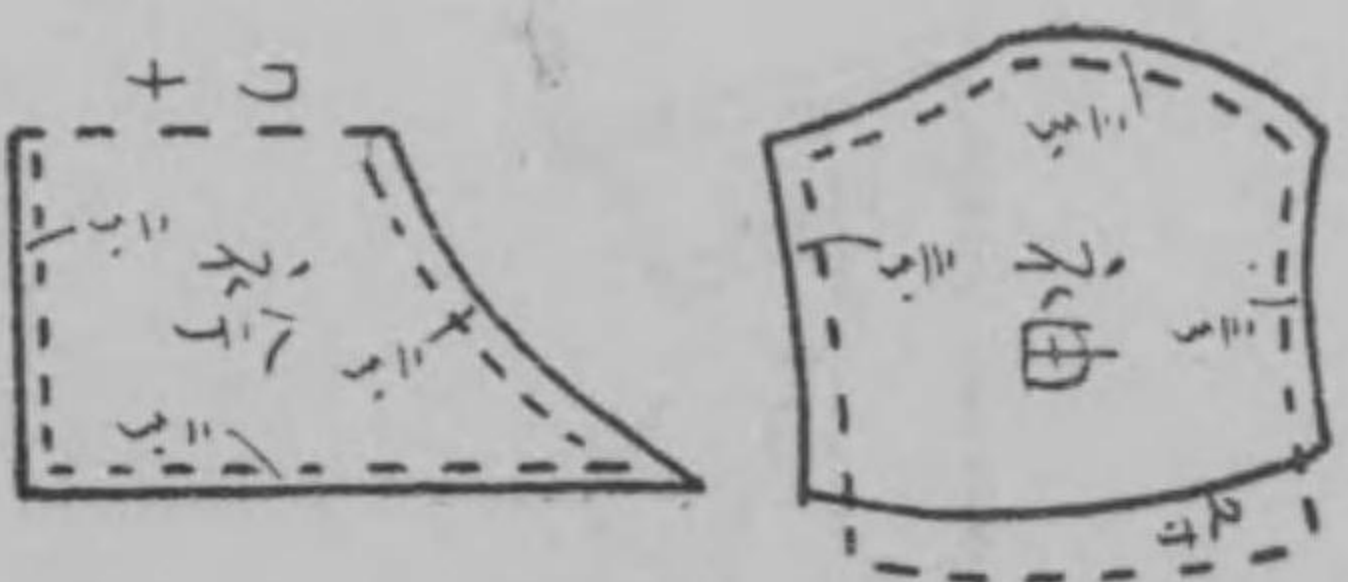
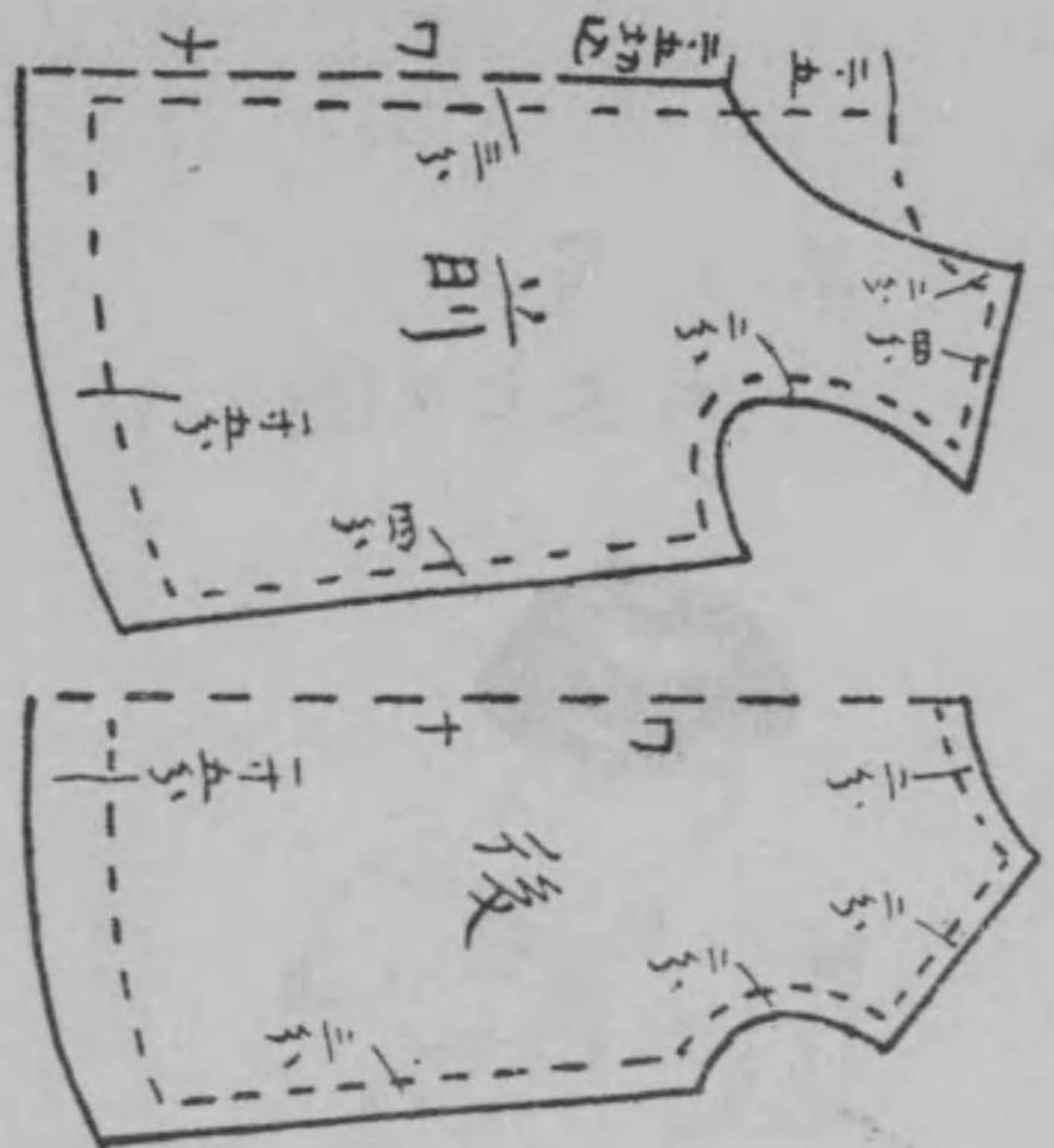
終に兩脇腰の處に細い紐を帶幅よりも五六分廣くまつり附けて帶を通す。そして上前には五つ程の釦穴を明け、下前にボタンをつける。

第四節 男兒服第二號

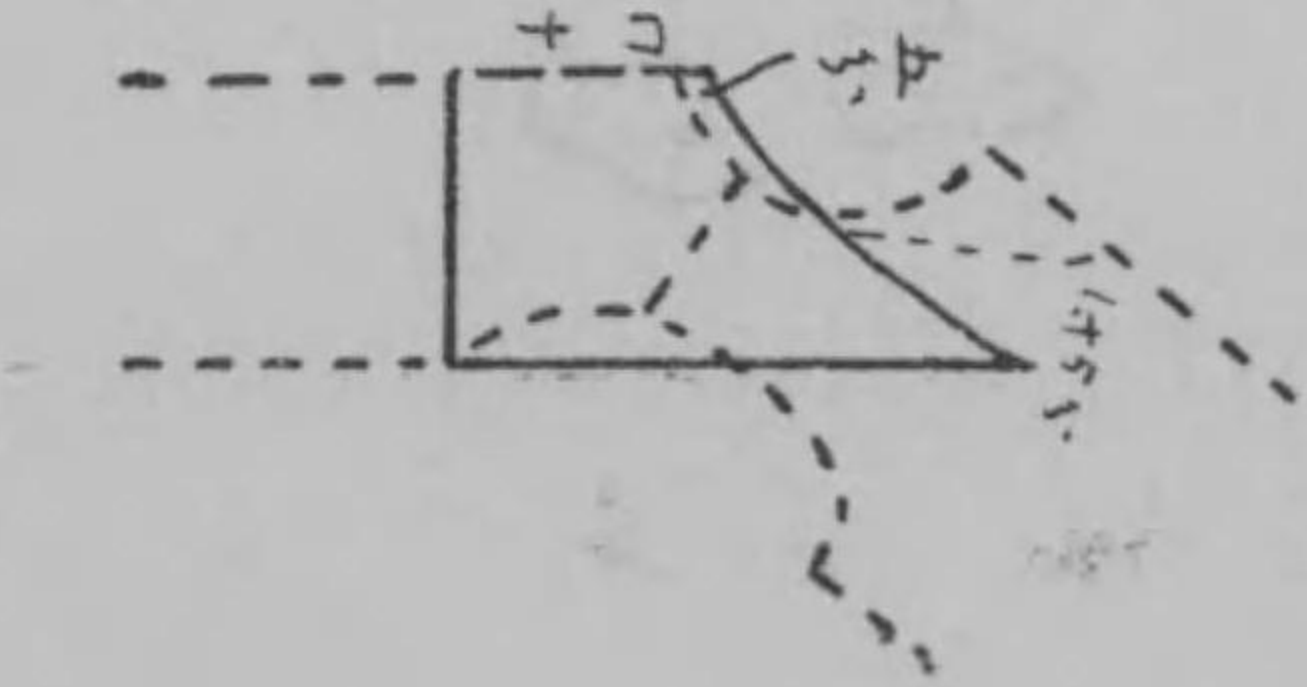
第二號
出來上の圖



縫代のつけ方



原型の取り方



第二號 上衣の裁ち方に就て

此の裁け方の後身頃は一號と同じく、前身頃はワナの處で二三分程出し圖の様に原型を當て置き衿元も裁方圖に倣つて衿ぐりを定めて裁ち落とし、袖は半袖の時では圖の様にし、又長袖の場合にもカフスを附ける場合も一號に倣つて裁つて行くとよろしい。
袖は各人好みにまかせ長短何れにてもよろしい。折衿の原型は身頃の前後の原型を肩の處でつぎ合せ、圖の様に後の衿グリの處で五分上つた處から其の衿ぐりに倣つて、圖に示す様に原型を作り縫代をつけて裁ち落とす。

布地の取り方

布地の取り方は一號の取り方に倣つて取つて載きたい。

ズボンの縫方

此の縫方は一號と同様である。

第四、上着の縫方

両方の袖口に表から飾布をつけて袖下は袋縫にする、次に前布の衿明きに表から布を重ねて縫合せて裏に返し一つ折にまつり附る。ポケットは左胸脇下から一寸程前に寄せて附ける、それから前後の脇や肩の縫合せ、袖附、裾折も第一號と同様でよろしい。

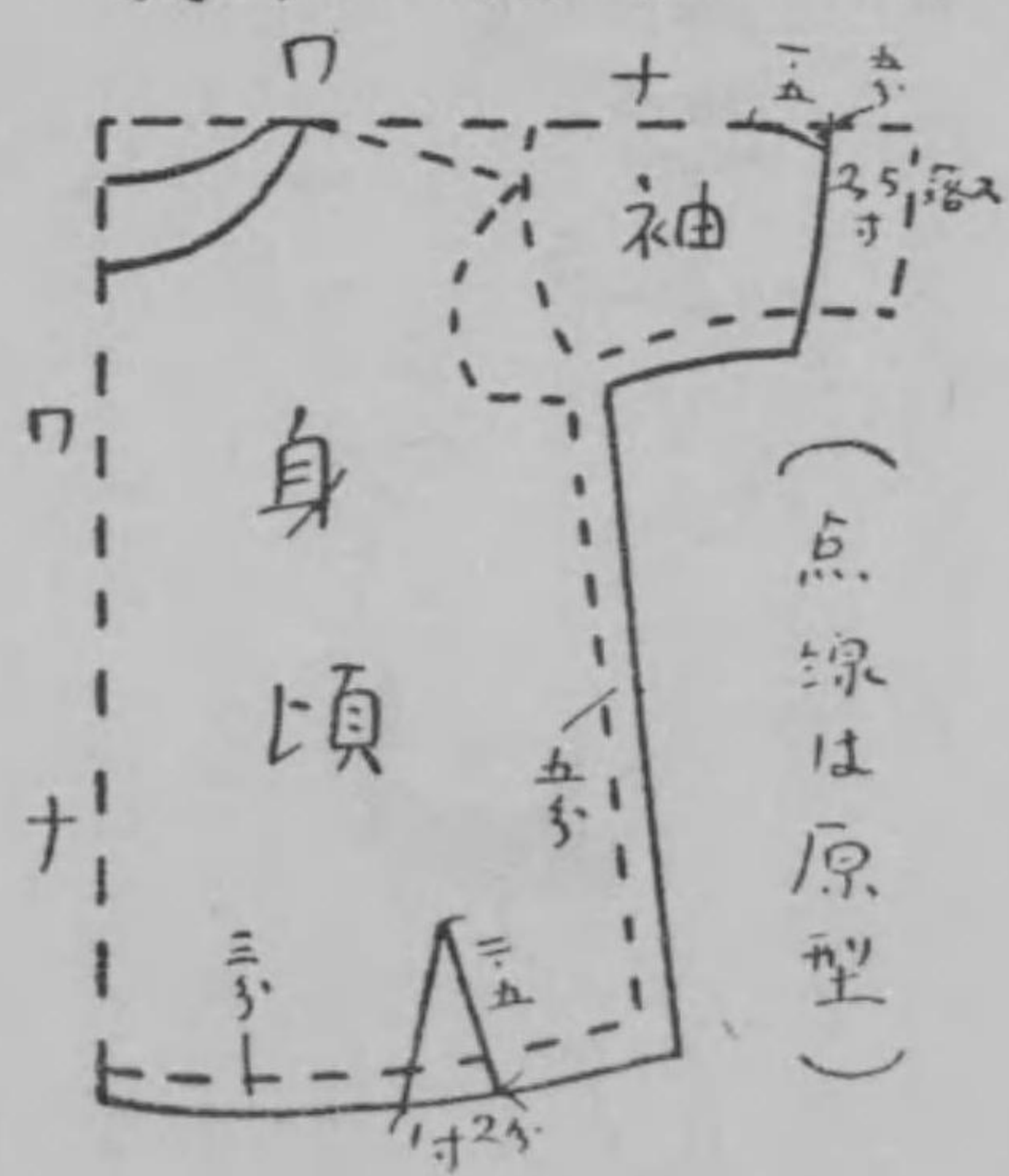
衿は表布に飾を端より四五分はいつた所に縫附る、(此の飾には蛇腹を使ふ時は手縫でもミシンでも真中の溝の處を縫ふ様にし、蛇腹は二本以上つけぬと引立たぬから之を附る時は蛇腹と蛇腹との間を二分程放してつける様にし、又飾付はいろいろの場合があるから各自好々にしてよろしいがたゞ格好の良悪に留意していたゞき度い) 其の上に裏布を重ね合せて三方縫合せる(この時には全體に、裏布をつり加減にして置く)そして表に返して端をおさへて置く。衿の真中と後身頃の真中とを合せ、後で衿の方をつらせ加減にして兩端を前明きの兩端に合せ、見返し布を上に乗せて三枚一緒に縫合せる。そして見返し布は裏に返して身頃にまつり附ける。斯うして出来上つたら衿の前明きの下から衿の付け根まで丸い穴を向ひ合はして三つか四つづゝあけ穴かゞをして裏から紐を通し(靴の紐の様な通し方をする)衿元で結ぶ様にする。

第五節 男兒服第三號

第三號 出来上り圖



第三号上着
裁方と縫代のつけ方



三號 上着の裁ち方に就て

之は至極簡單で、用布も二尺幅總丈の二倍あるとよろしい。裁方圖に示した様に布を縦にワナにし、横に又ワナにして前身頃の原型をワナの處にあて、圖の様に袖の原型を合せ當て、五分位縫代をつけて袖下の處を身頃に合せて自然に丸くして裁ち、衿グりは前後の原型に倣て其儘裁ち落す。切込の處は袖山の處でワナにして、五分程落し、裾は全體の裾幅にて中央より五分位脇によつた所で圖に示された様に裁ち落す。後アキにする時は、後のワナの處を四寸程切り込みを入れる、肩で合せるときは兩肩に二寸位切り込みを入れる。

上着の縫方

先づ後明きに持出しと見返しになる様に表から布を縫合せ、縁取りの様に五六分の上り幅にする。袖口表に飾布を着けてから袖下及び兩脇の前後を袋縫に合せ、裾と衿とに斜の飾布を着けると出来る。出来上つたら裾の方は圖の様に所々に刺繡をすると可愛らしくなる。次に後明の所にスナップを附ると出来る。

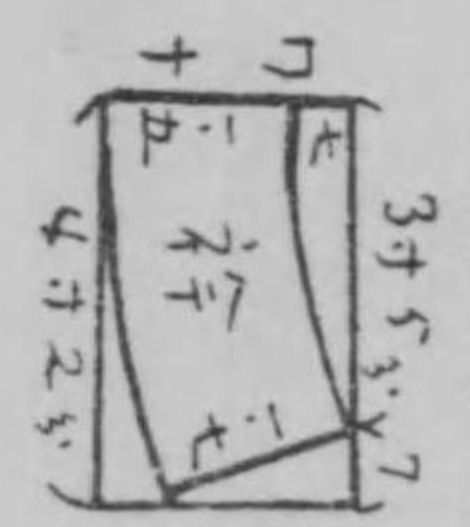
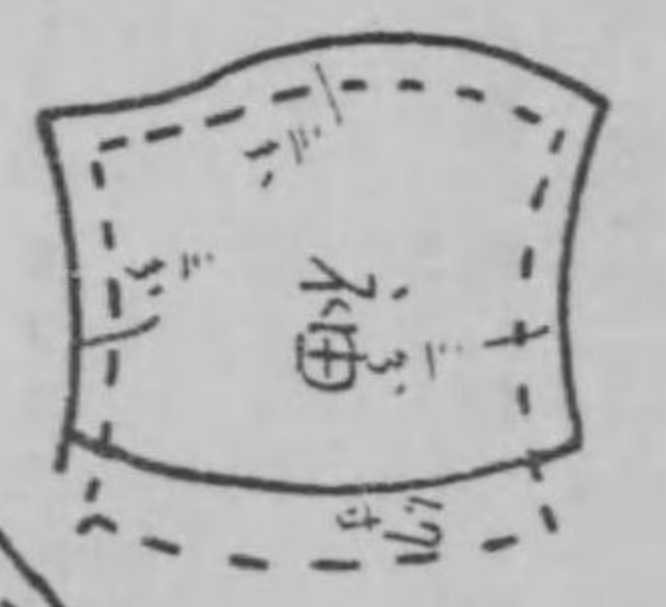
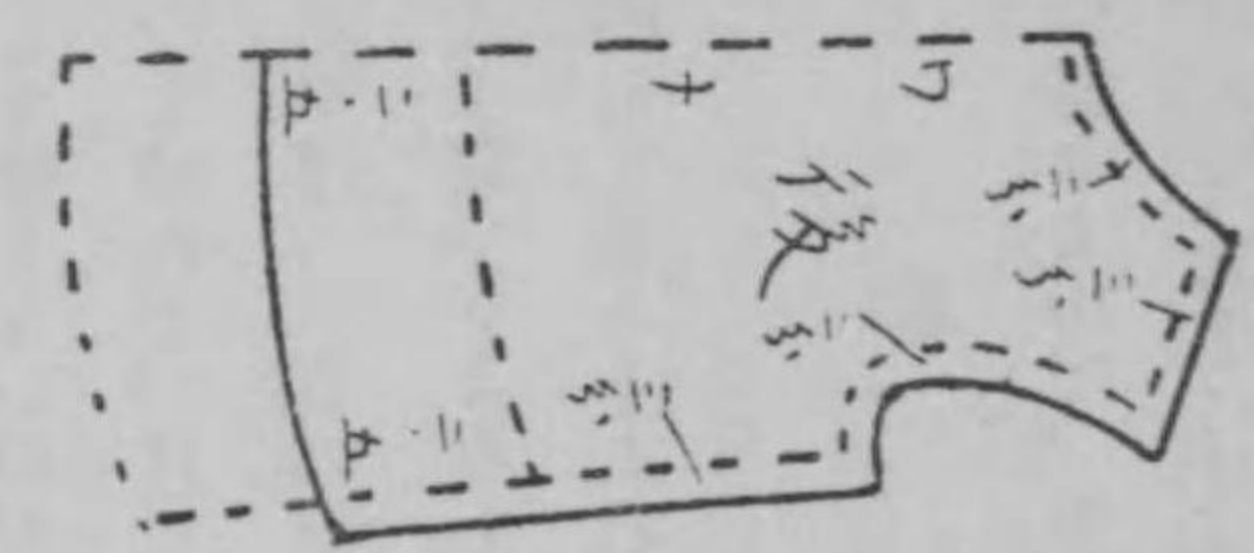
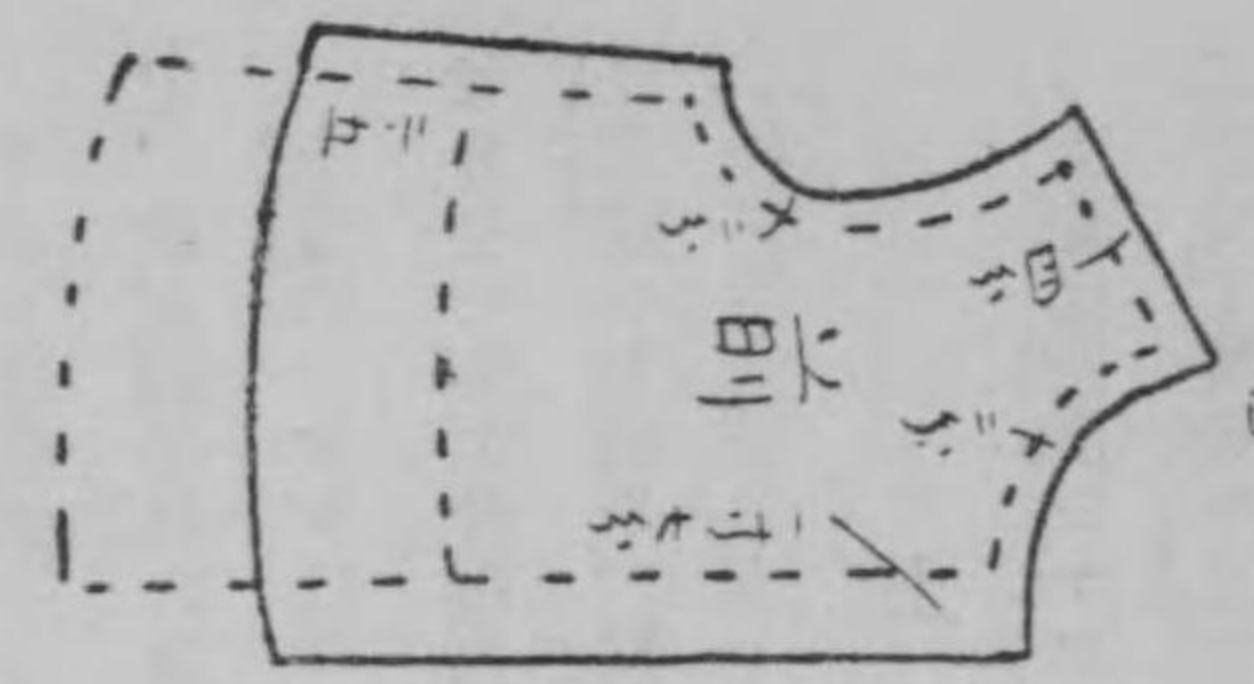
第六節 男兒服第四號

第四号 出来上り圖

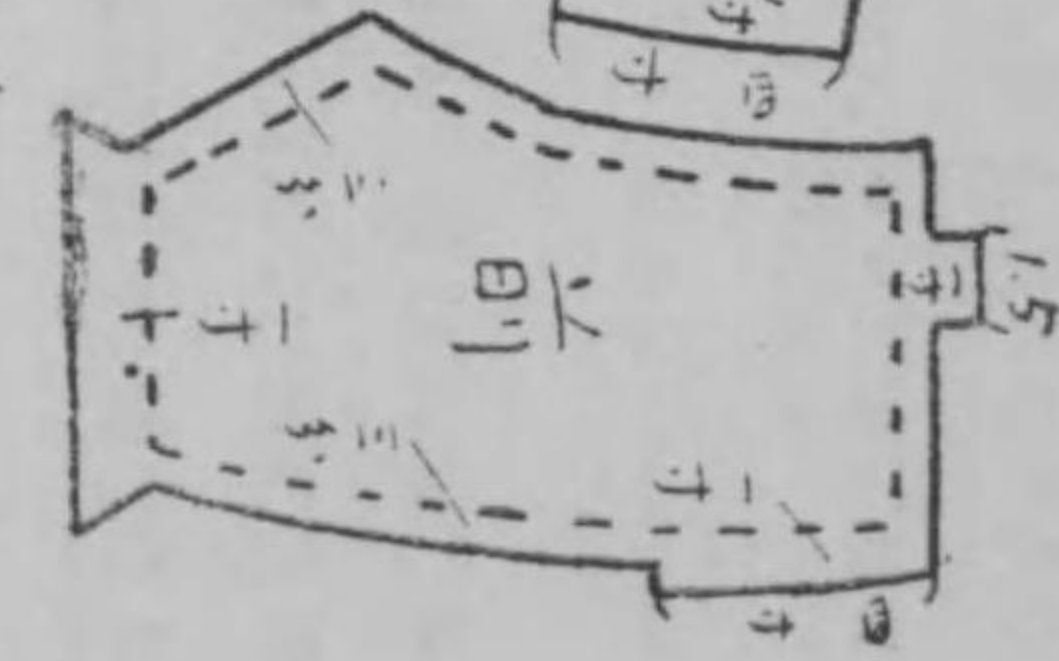


裁方及び縫代つけ方

上着シャツブラウス



ズボン



四號 裁ち方に就て

ズボンは普通と少しも變りないので、唯上の處のズボンの中央に一寸位のものが出て居るだけで、裁方圖の様に裁つて縫代をつける。

上着のシャツは今迄申述べた裁方を應用すると總て判ると思ふが、前身頃は原型より前の打合せ分を一寸七分程出して裁つとよろしいので、唯脊丈より二寸五分位長く裁てば好い、其の他は今迄述べたのを、斟酌して貰ふとよろしく、カフスは袖口に合せて、其の格好に倣つて裁つ様にする。

上 着

上着は恰度シャツの様なもので、先づ圖の様に裁つて兩袖下を袋縫ひになし、カフス布は袖口に合せて裏表を三方縫合せ、其上に見返し布を附けて縫合せ裏に折つてまつり附る。次に兩前身頃の見返へしの處を、出來上りの様に上前は表に下前は裏に八分位の上り幅に三つ折にして、飾りミシンを掛け、肩と脇と縫合せる。衿は圖の様に裁つて三方を縫合せて、飾りミシンを掛け、

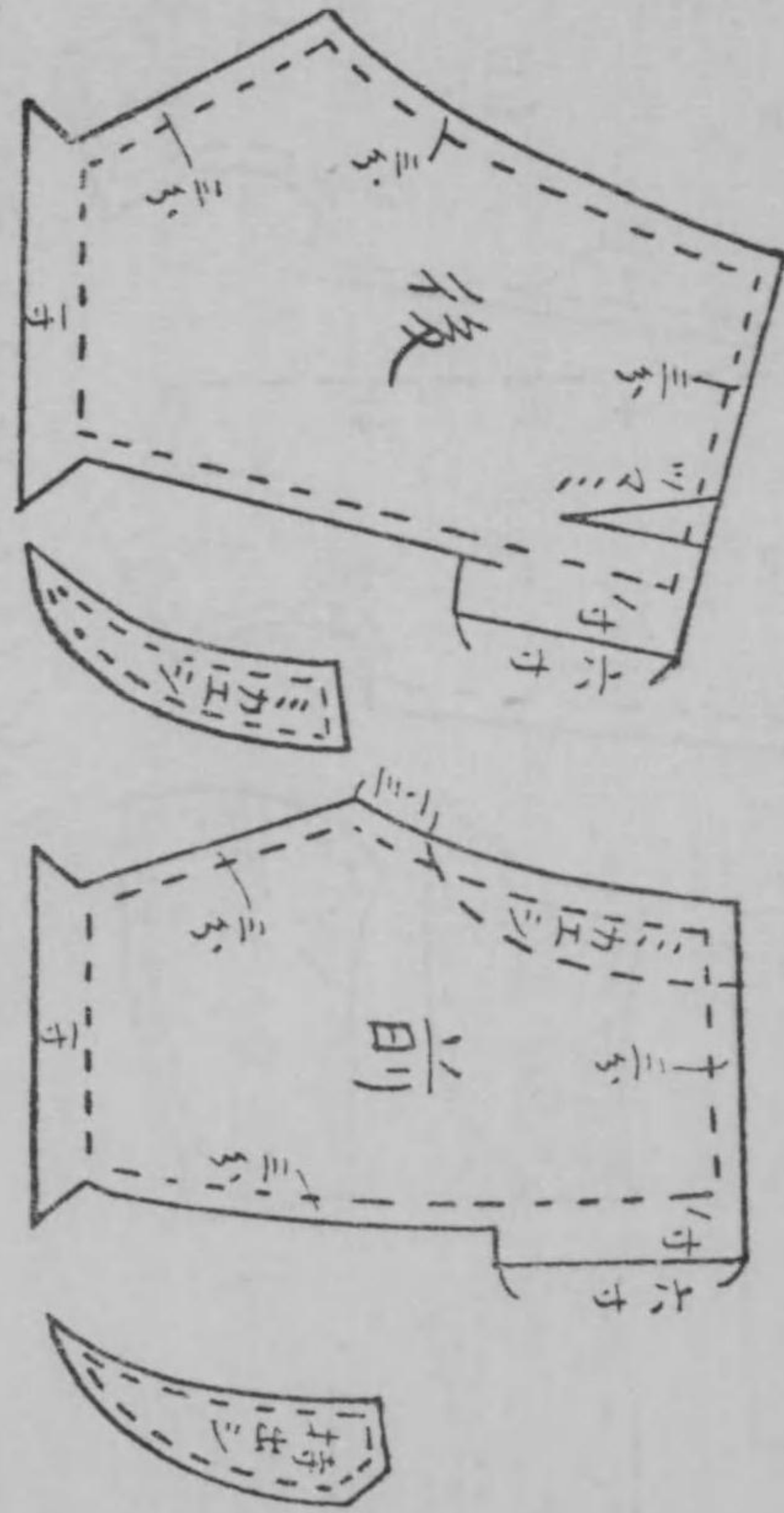
衿の真中を後身頃の真中とを合せて、其の上に見返し布を載せ、裏に折返してまつる。そして袖の附方は前述のものと同じく、裾口に二寸位の當切を乗せ縫合せ裏に返し、上の方は一つ折にして身頃にまつり付け、前明上前に穴かゝりをし、下前にボタンを附る。そうして出來上つたならばズボンを釣るためにボタンをズボンに合せ、上衣の後に二つ前に二つ附る。出來上り圖の様に、レースを附す時は、衿とカフスの周りを計つて、其れにギアザを取る爲めに周りの一倍半のレースの耳糸を引て縫ひ縮め、出來上り後其の周りに、まつり付るとよろしい。

第七節 六七歳以上男兒服

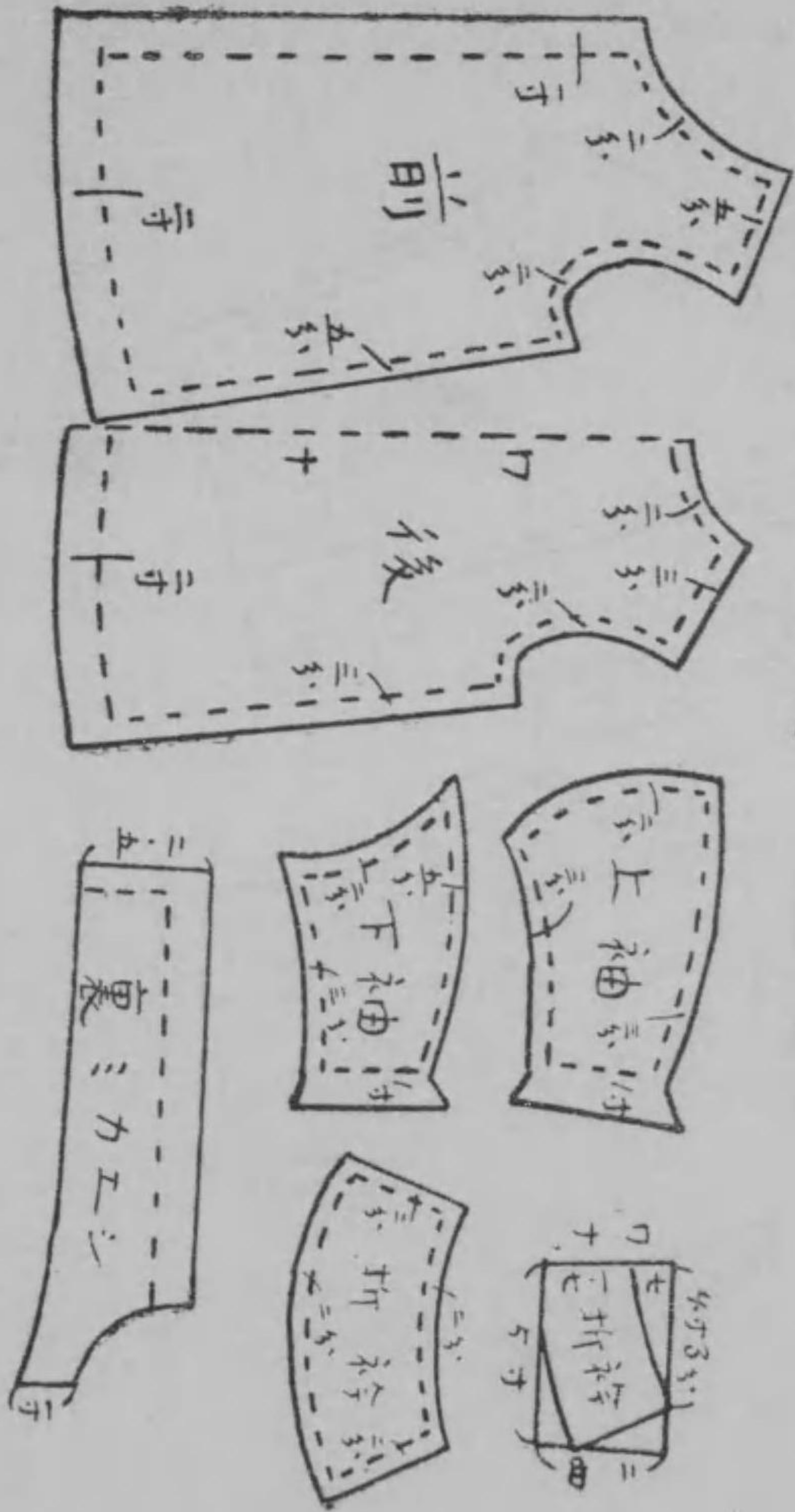
六七才以上
男兒服
出來上り圖



スボン裁方



上着縫代のつけ方



ズボンの裁ち方に就て

ズボンの裁方は小さな時と餘り大差はないが、唯前全體を明けるので下前持出しと、上前見返しとを附ける。其の裁ち方は前ズボンの切込より上に、裁方圖の點線の様に見返の原型を取り、持出しの方は、角は五分程裁ち落せばよく、見返し頃の幅は一寸二分位にすればよい。上着の方も、原型に縫代を附て裁つといふが唯裏見返は、表身頃に合せて肩の處で衿ぐりより一寸位入った處に定め、自然に身頃に倣つて裁ち落す（裏見返し布は、表切にて取る。）

ズボン縫方に就て

此のズボンの前述の縫方と違ふ處は前をボタン掛にすることである。裁方が出来るると上前見返切の表と裏とを縫合せ、弓形の方には切込を入れ表に返し飾ミシンを掛け、其を等分して二ヶ所か三ヶ所に穴かどりをなし、上前表に裏ミカエシを切込の處で縫合せ、切込みを入れて裏に返し其ミカエシの間丈飾ミシンをかけ、先きに穴かがりをした身返し布を其裏の方に合せ、膝で上端を兩方より裏の方に折返してまつり置く次に下前持出し布を表裏に二枚

縫合せ（丸味を帯びた方）之れにも切込を入れて表に返し、下前の表前の切込より上に其の持出しの表の方を縫合せ、縫目を開き其の一方の表の端を裏の方で包む様に切込を入れてまつり付る。次は前後の脇の標を合せ上より四寸五分位明けて縫合せ、（之は衣囊の口となる）縫目は前布の方に返し（地質の厚い時は布を開いても差支へない）次にカクシ布を脇上明の所に上より一寸程下つた所に前布の裏の方をあて、縫込みを折り返し端を衣囊の方に千鳥掛にする。

次にはカクシ切を二つ折にしてカクシの口より下の方を縫ひ合せ、引返して端を脇の縫目の上にも飾ミシンを掛け、之は少し深目にカクシの一方は、一つ折にして後の縫込の上にもまつりつけ後表の端の中側を袋切に千鳥がけにし、後口より上端に向ひ前後の脇合の標を合せて、表より飾ミシンを掛る。

左右の後の股上を標の通りに上端を一寸残して縫合せ、縫目を開き千鳥付け後布のつかみ縫をなし、（地質の厚い場合は両方に開く）上端に斜心地に一寸幅位入れて布を一つ折にして裏の方に折返し、腰布を二寸位の幅にして裏の方にあて袷を掛け表より上端にミシンを掛け、山の處は山に

倣つて飾ミシンをかけ下前持出しの先きより持出しをつけた所を抑へ第二のミシンは上より五分程放してミシンを掛け腰布を下に提けて後と兩脇と兩前の處を千鳥がけにする。細い紐を五本程縫ひ付け、後の中心と兩脇と前の真中の處へ、バンドを通す紐を幅二寸位にしてつける。

前布股上の縫残しの一寸の間を縫合せ、縫目を開き股下前後を一方の足より他方に縫合せ、縫目を開き裾折を裏に折返してまつり付る。

上前股上の所（縫開の所）を上前の方を上に乗せ堅く蟲止をして下前にボタンを付る。

次にズボン吊を付ける時は、腰布を付けた時ズボン吊のボタンを後の山の所に一つ宛と兩脇の縫代の上に一つ宛と、前布の中心に一つづつと都合六つつけびじよ、止切を兩後の二度目の飾ミシンの下の所に、兩先を後股合せの縫目の所迄とよく様に當て、一方の山形の所へ×狀に縫つけ腰布下におろす。（ビジョウの縫方は心布を裁方圖の様に裁ち、表布の上のせ一つ折りに飾ミシンを掛け裏を据へまつり付る）

上着縫ひ方

袖を縫上るには上袖と下袖の上部の方を縫合せ、下袖の方にて上袖を包み表より飾ミシンを掛け、袖下を縫合せ縫目を開き一つ折にしてまつりつけ、袖口を折り込みまつりつける。

身頃は兩前にミカエシ布をつけ表にて縫合せ、裏に返しミカエシ布端を一つ折にして身頃にまつりつけポケットの位置も定めて兩脇と後身と前身を縫合せ、(之のときも前身頃を少し出し)後布を包む様にして後に折を返し飾ミシンで押へる。裾の縫込みを二つ折にしてまつりつけ兩肩を縫合せ之も前身で後を包む様にして表より飾ミシンを掛け袖下の位置を定め、袖の方をゆるめ加減にして身頃を縫合せ、ミカエシ布も一所に縫合せ縁取の様にまつり付ける。(袖は下袖と上袖の縫目の處を肩山より一寸程後によせた處につけるとよろしい)

衿は裏表二枚を三方縫合せ表に返し飾ミシンをかけ、衿の真中と身頃後の真中と合せ、上下共前の重なるの處までしつけて押へて、身返し布を衿の方にて縫合せ身頃にまつりつける。

身返しをはぶいて、衿の方にて身頃を狭む様に縫合せ、衿でまつりつけてもよろしい。

上前衿元より三分下つた處に一つ、それより二寸五分置き位に三つか四つ位に穴かどりをし下

前にボタンを着るもよろしい。

衿にする時

袖は裏表とも同じ様に裁ち合せ、裏表の上袖下袖共別々に縫合せ、縫目を開き表袖口縫込を裏に折返し袖の方にまつりつける、袖下の所で表裏をとち合せ五分程ひかへ下袖の方にまつり付ける。

身頃も見返し布を除きて、表と同じ様に裁方ミカエシ布の上に前後を一折にして載せ、飾ミシンをかけ表頃にポケットをつけ、兩前に心布を入れて前と同じ様に見返しをつけ裏表とも別々に兩脇を縫合せ開き、裾押を一つ折にして表にまつりつけ、裏布を一分程控へて裾の所を二分位奥をくけ表兩肩を合せ縫目を開き、表袖も表身頃を縫合せ縫目を開き、身頃を袖つけの上にとちつけ袖を上へのせまつりつける。

其の他は前と同じ様にして、衿をつけるときは衿の方で身頃の裏表を一所に狭み縫にする。此外前の裁方でも、衿にするときは表と同じ様に裁ち前と同じ様に斟酌して縫ふとよろしい。

ズボンにも裏をつけて差支へなく裁ち方も表と同じ様にして縫合せる。(表裏を合せて四枚縫ひ

にしてもよろしい。

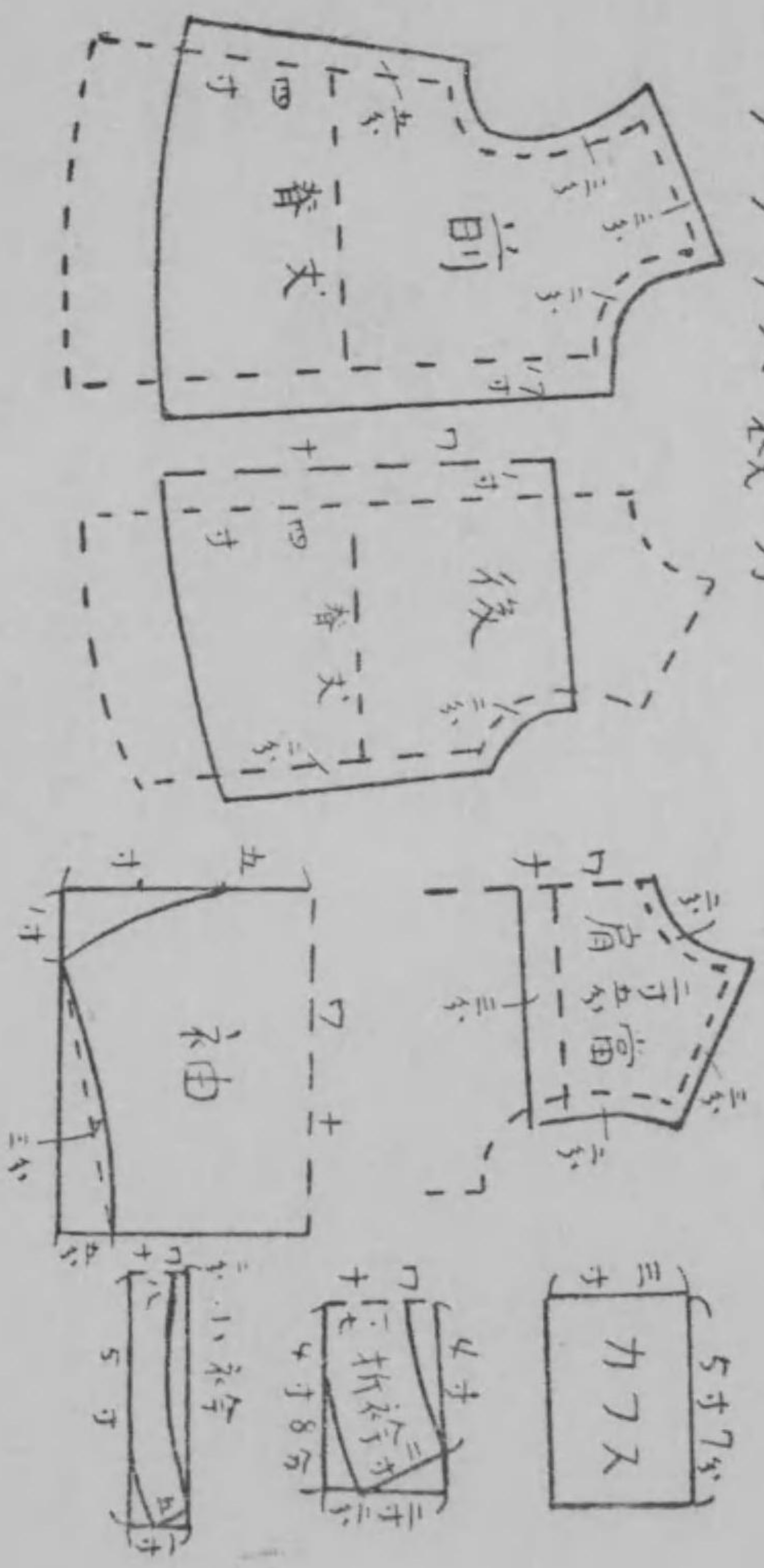
此の他一、二號何れでも裏を附けて差支へはない。(シャツ、ブラウスは裏を附けない方が好い) 總て裏を附る時は大低の場合表と同じ様に、裁てばよいので、前に見返しの付く時は、其の處だけ裏を除き、裁つとよろしい。

第八節 ブラウス(シャツ)

ブラウス 出来上り圖



ブラウス裁方



シャツブラウスの裁ち方

シャツブラウスは身軽で運動が自由で然も簡單であり、ズボンの上に之を着ると格好もよく、可愛いものである。冬などはそのまゝの上に着るとよく、ネクタイも時々取換へて用ひさせるとなかくよいもので四五歳から十五六歳位まで、大人になる迄使ふ事が出来る。又大人のワイシャツと同じ意味のものであるから、ワイシャツを仕立て替ると丁度七、八、九歳位のブラウスになるから非常に經濟でよい。

先ず原型を以て裁方圖の様に裁つ。肩當切は横布を使用するものであるが、布切の都合では縦でもよろしい。前後共脊丈より四寸下の處で裁つ。袖も夏などは半袖で袖口も普通のわなカフスにして縫付てもよい、又出来上り圖の様に大人のカフスの様にカフスボタンで留める様に折返しにして穴かゞりをしてよいのである。

袖丈、袖幅とも隨意で、袖幅は身頃につきさへすればよい。

布地の取り方は前述の通りで好いからこゝでは省く。

縫方に就て

先づ裁方圖の様に布を裁つて後身上の處を肩當丈けに縫縮め、(肩當二枚の時は)肩當二枚で之を狭み縫ひにし、前身頃見返しの下前は裏に折り七分位の幅にし、上前は八九分位の幅にして見返の兩端にミシンを掛け、肩の處は兩方共前身の表裏と後肩當の裏と縫合せ、肩當表を縫ひの上一つ折にしてミシンを掛け、(丁度肩當布にて前身頃を包む様に)ポケットは左の袖ぐりより一寸程下の處に、前身の眞中と袖付の間の處へ出來上り圖の様につける。袖は、カフスにより多少縫方も、違ふが、半袖の場合は袖口を三つ折にして前身頃に袖を縫合せ、普通のシャツの様に袖下から脇につけて縫合せてもよろしい。

わなカフスの時は袖口をカフス丈に縫縮めカフスを縫合せ脇を袖下より脇に縫合せてカフスを裏に折返し縫ひの上でまつりつける。ボタンで止める時は袖山より後一二寸よつた處を二三寸明けて、其の處見返しと持出しをつけてカフスも寸法を定め、表の方に薄心を入れて(心は出來上り幅に定めて置く)其のまわりを三方縫合せ前と同じ様にカフス丈に縫縮め袖裏とカフスの表を一

つ折にして飾ミシンをつける。

裾折は四五分の上り幅にして、下前はゴムテープを入れるか、又は普通のテープを通して置く
とよろしい。

衿は別衿にしてもよいが、こゝではそのまゝ身頃に縫つける方の話をする。衿は表裏二枚合せて、三方縫合せ、表になる方に飾ミシンをかけ、小衿二枚で折衿をはさみ縫ひにし小衿裏の表と身頃の裏後の眞中と合せ、兩端まで縫合せ、折を小衿の方に返し、表の小衿を一つ折にして縫ひの上に乗せ、小衿のまはりの飾ミシンを掛けそれで出來上る。次に小衿の上前見返の中心を中心に見て、小衿に横に一つ、見返の中心全部を等分して三分位の幅に、縦に穴を明て下前にボタンをつける。此のブラウスは前に申した通りいろいろあるので、其のとき々に應じて縫ふとよろしい。

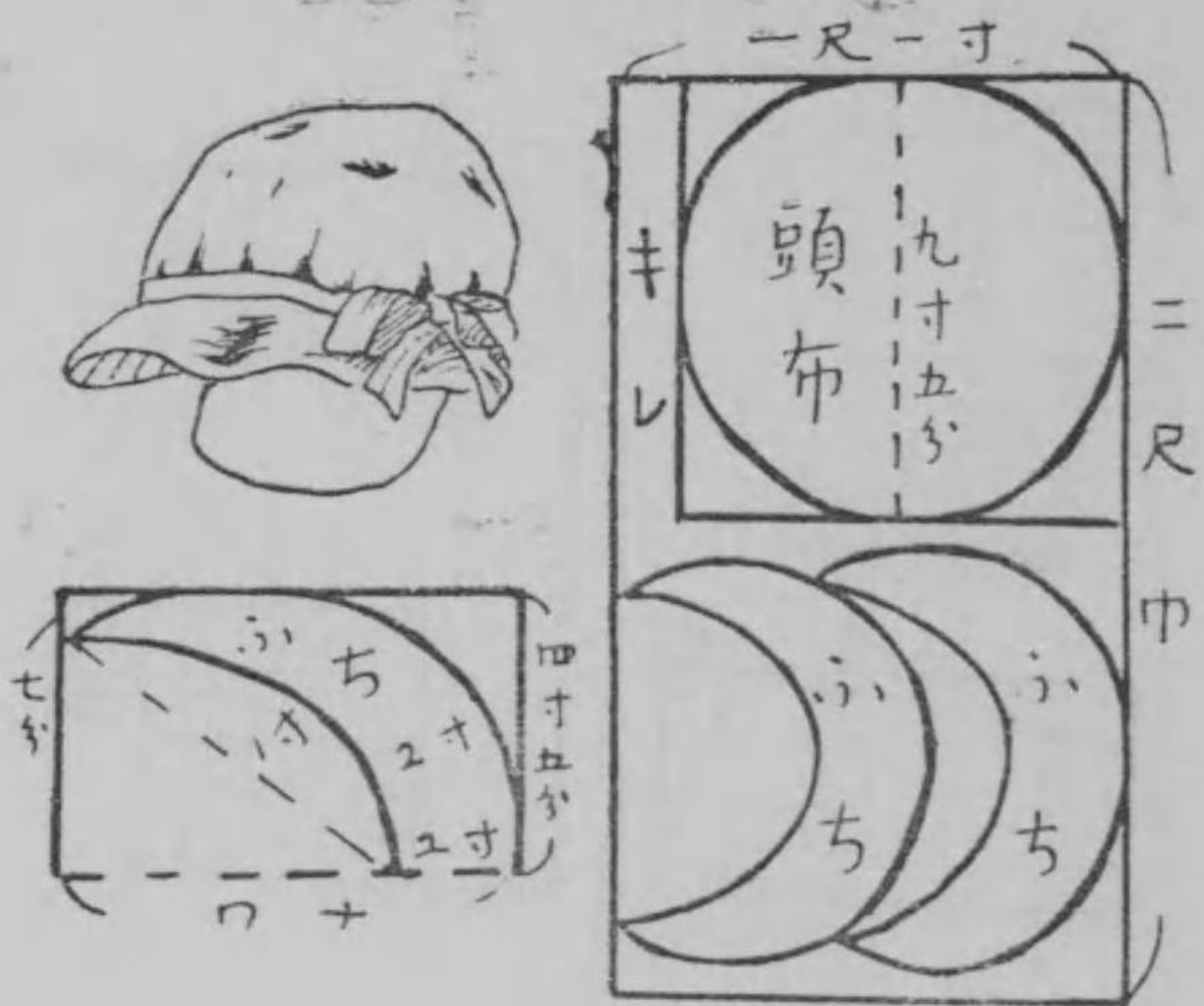
第九章 洋服附屬品

第一節 女兒用帽子

嬰兒用の帽子は、先に述べたからこれはおくとして、女兒用の帽子には色々の恰好があるが、こゝではその重なる四種について述べよう。この四種を充分に了解んでさえおけば街路や飾窓で眼についた面白い型や工夫を自由自在に取り入れて、自分で創作する事も出来よう。この外に夏は麥桿の帽子などもよい。又、男兒の帽子は、その型が殆んど一定してゐて、特に注意を惹く様な變つたものもみられぬから省略しておく。若し布地でこしらへる時には、七八歳の女兒用の裁ち方を應用して作るとよい。

帽子を作るときは、先づその子供の頭廻りの寸法に一寸位の緩味を加へて頭廻りの寸法を定め深さも寸法を計つてその裁方を適宜に應用すれば、その子供に適するものが出来る。

三四才帽子



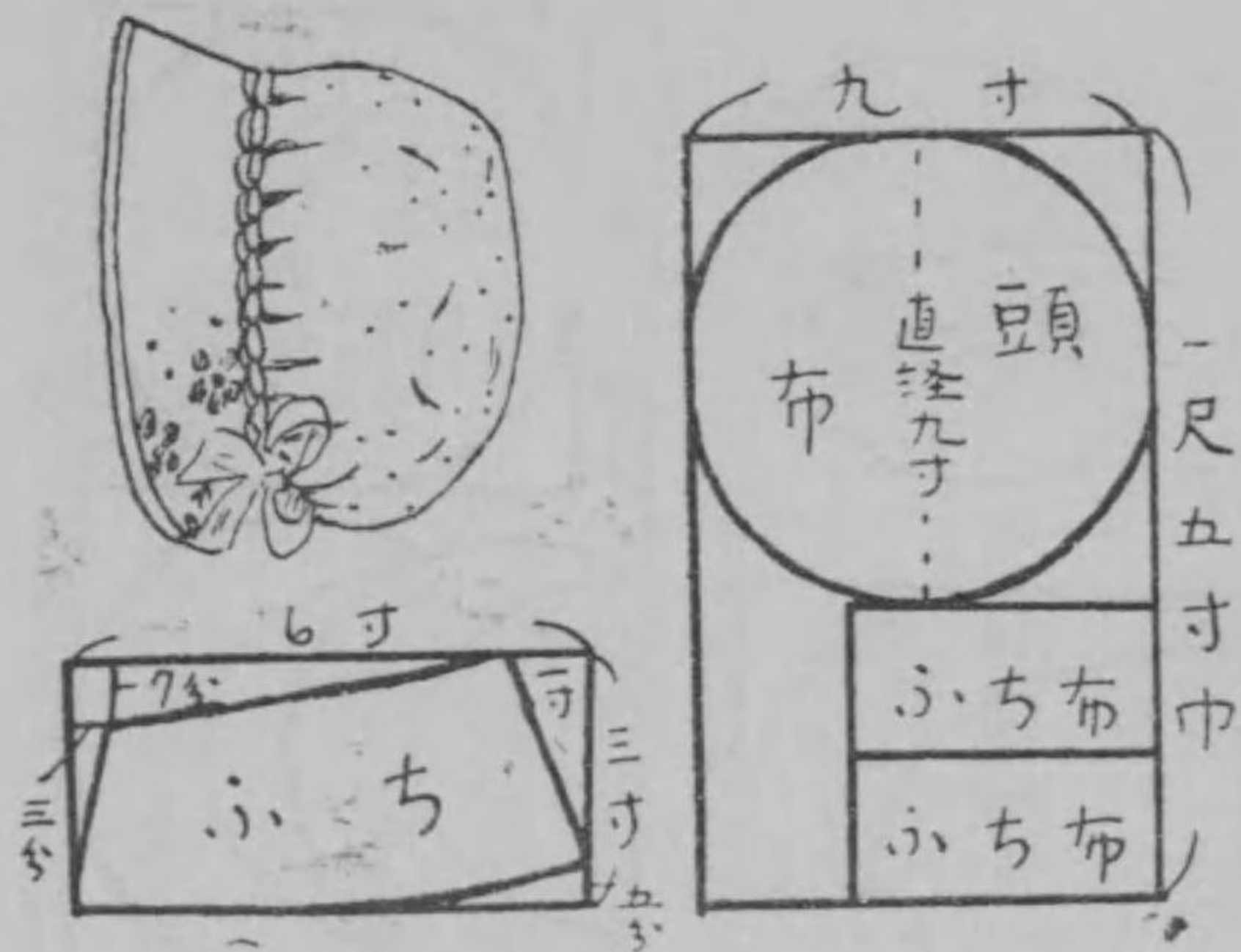
第九章 洋服附屬品

三四歳用帽子

先づ裁ち方圖に倣つて裁つたならば頭布を裏表合せて頭布の中心から兩方に襷をとる、(丸みのところのみ)それから縁布は心を入れて裏表を縫合せ、頭布の襷の取つてある處と縁布の表を合せ斜の見返の布で縫ひ目を包んでおく、更に兩横にはゴムテープを付け頭布と縁布との縫合せには、配合の良い適當の布地リボン等で飾りを付けておくとする。

用布は冬用なれば羅紗物か天鷲絨な

(夏) 子帽歳五四



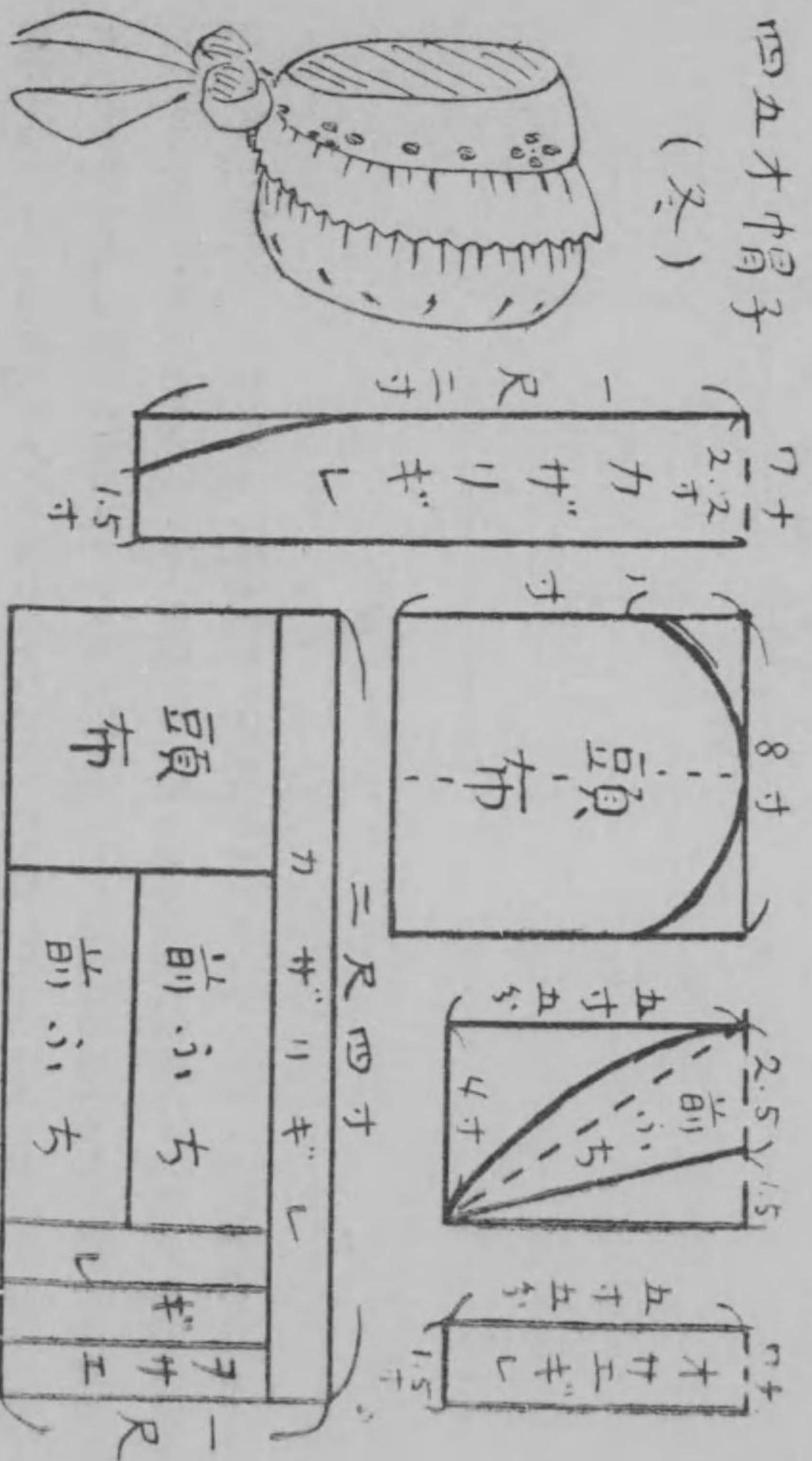
どが適する、夏用には上着と同じもの
かピケットなどが宜しい。

四五歳用(夏)

裁ち方圖の様に裁つたならば、頭布
は下の處の眞中から一寸程兩方に残し
て、前の眞中から兩方に襞を取つて周
圍を一尺二寸位に寄せる。次に縁布の
眞中を裏表とも別々に縫合せて縫目を
開き、裏布と合せて三方縫ひ合せる、
そして頭布は後の下の方襞のよらない
部分だけを残して、縁布を見返し布と
三枚一處に縫ひ合せ、縁布にあて、頭

布にまつりつける。(縁布の上に見返し布をのせる) 此の縫ひ合せの飾りには、配色のよい狭いリ
ボン等を用ゐる、又縁の兩端にはフランス刺繡を應用した花模様等を散らして置くと大變可愛ら
しいものが出來上る。そして被る時は前の眞中の縁を半分程表に折返して用ると一層引き立つて
見える。用布にはピケ等を用ひて縁の裏布には無地のギンガンやゼツバの淺黄等が適當である

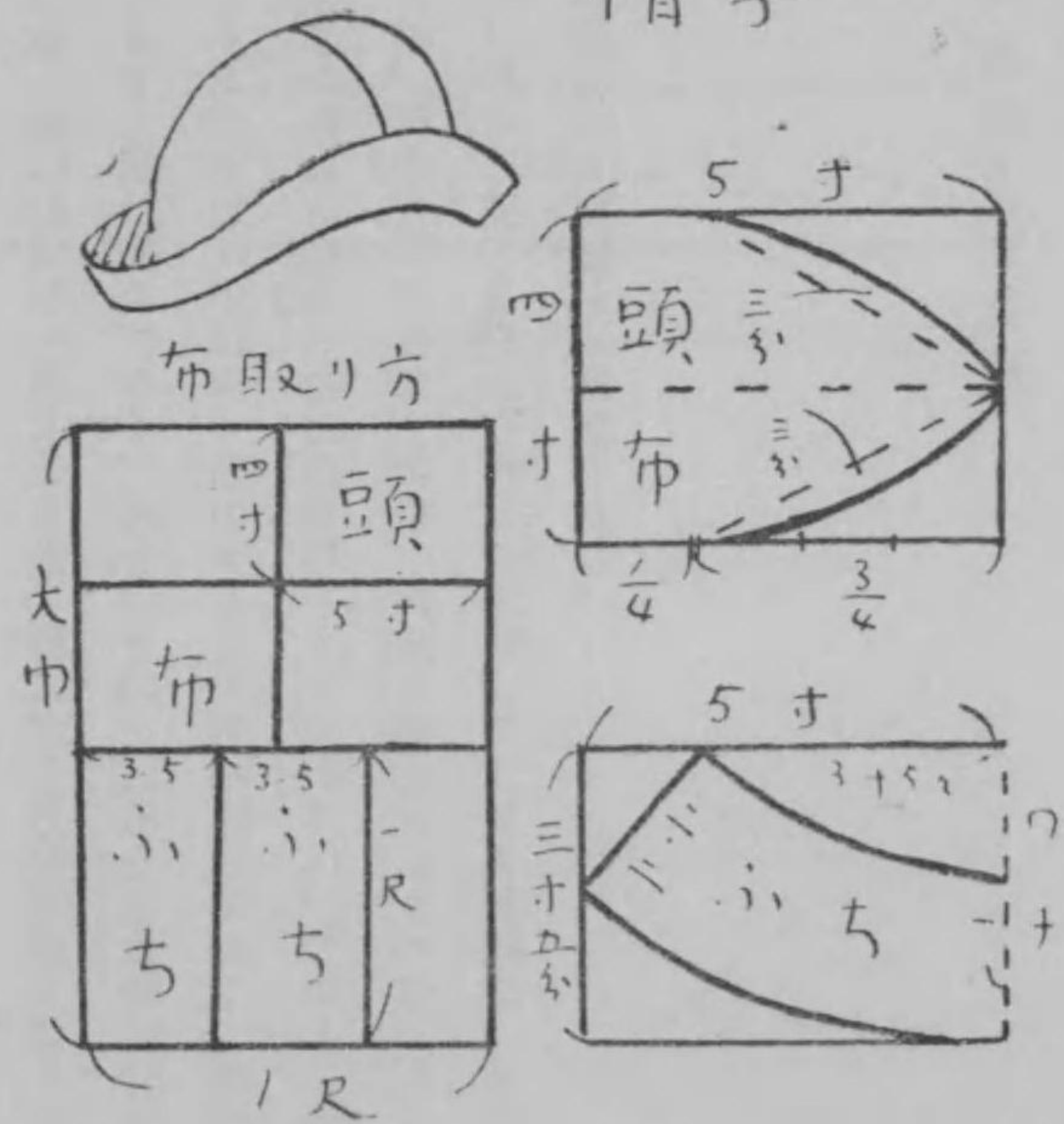
四五歳用(冬)



圖の通り裁方が出来ると縁に心地を一枚入れて圖の様に三日月形に縫ひ合せる、飾布の端を細くまつり一方は縁布に合せて縫ひ縮めておく、頭布の下のところを裏表縫ひ合せ、三分程上のところを二分程はなしてミシンをかけた中に四寸程のゴムタイプを通して置く、頭布も真中から両方に適宜に襷をとり、頭布を飾布と縁布とを三枚重ねシツケでおさへ、その上に縫ひ目をかくす爲の飾布を一方ワナにのせ、都合四枚を合せて縫ひ、飾布を縁の方にかへすと恰度縫ひ目がかくれて飾りの様になる。前の縁布の裏の真中から両方にかけて、フランス刺繍を一寸散らして置く可愛らしい。この用布は羅紗か天鵞絨か適當である。

七八歳以上女兒用

八オ以上
帽子



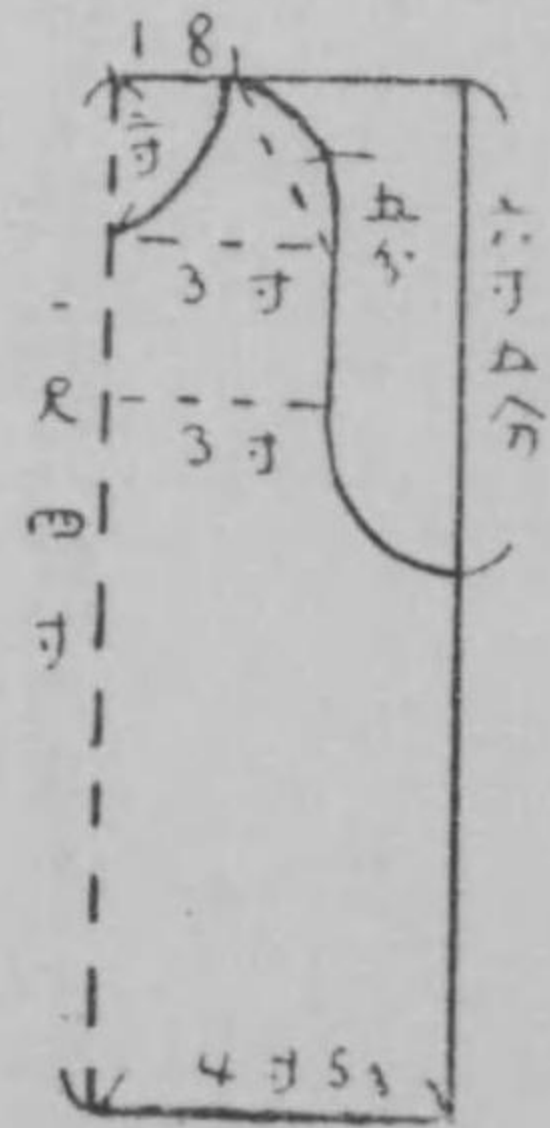
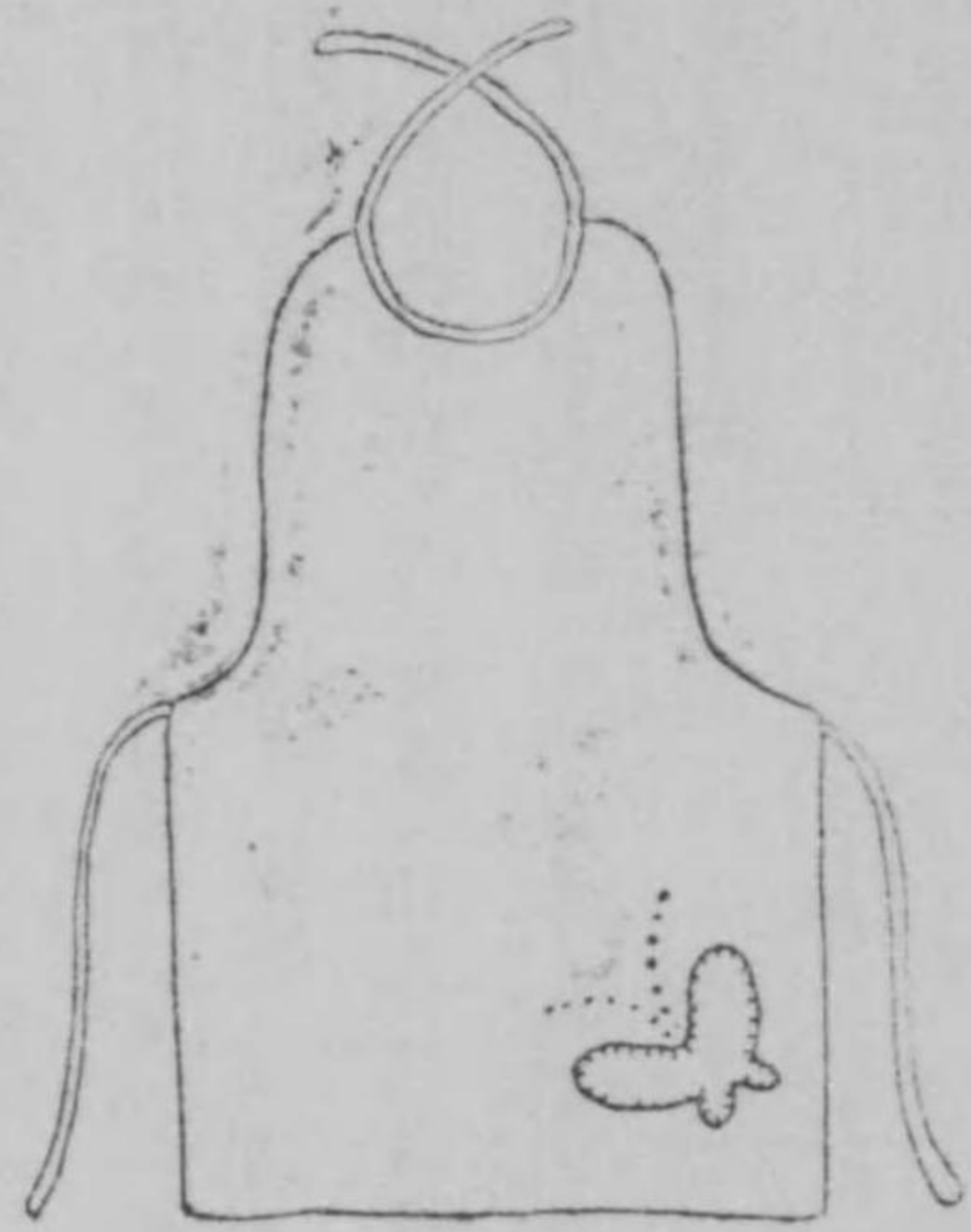
これも裁ち方圖の様に裁ち、頭布を裏表共六枚（或は四枚でもよろしい）丸く縫ひ合せて縫目を開き、縁布は兩横を縫ひ合せてから心地を一枚入れて外側を丸く合せ、丸味をもつたところは切込みを入れて返しミシンでおさへておく。それから頭布の表と縁布の表とを合せて裏で縫ひ合せ、頭布の裏の方でまつる。出来上り圖の様に一方（左の横）に綺麗な房を下けておくと大變可愛らしくなる。

用布は夏ならばギンガムかビケ等冬ならば天鷲絨などが最も適當である（縁布の裏側の布を表と配色の良い色で取りかへてもよろしい）

第二節 エプロン

前掛にはいろいろの形があるが、こゝには五六種を擧げて説明してみやう。
前掛は着物の汚れぬ爲めに掛るのであるから、布地は丈夫で洗つてもさめないものがほしい。よく世間では綺麗な前掛をかけさせて其れを汚したと云つては子供に小言を云つておる親達を見

一 三才用食事エプロン



用布 外ニ
 ヒモ 1尺2寸
 鈴元 1尺5寸
 フラニス刺繍

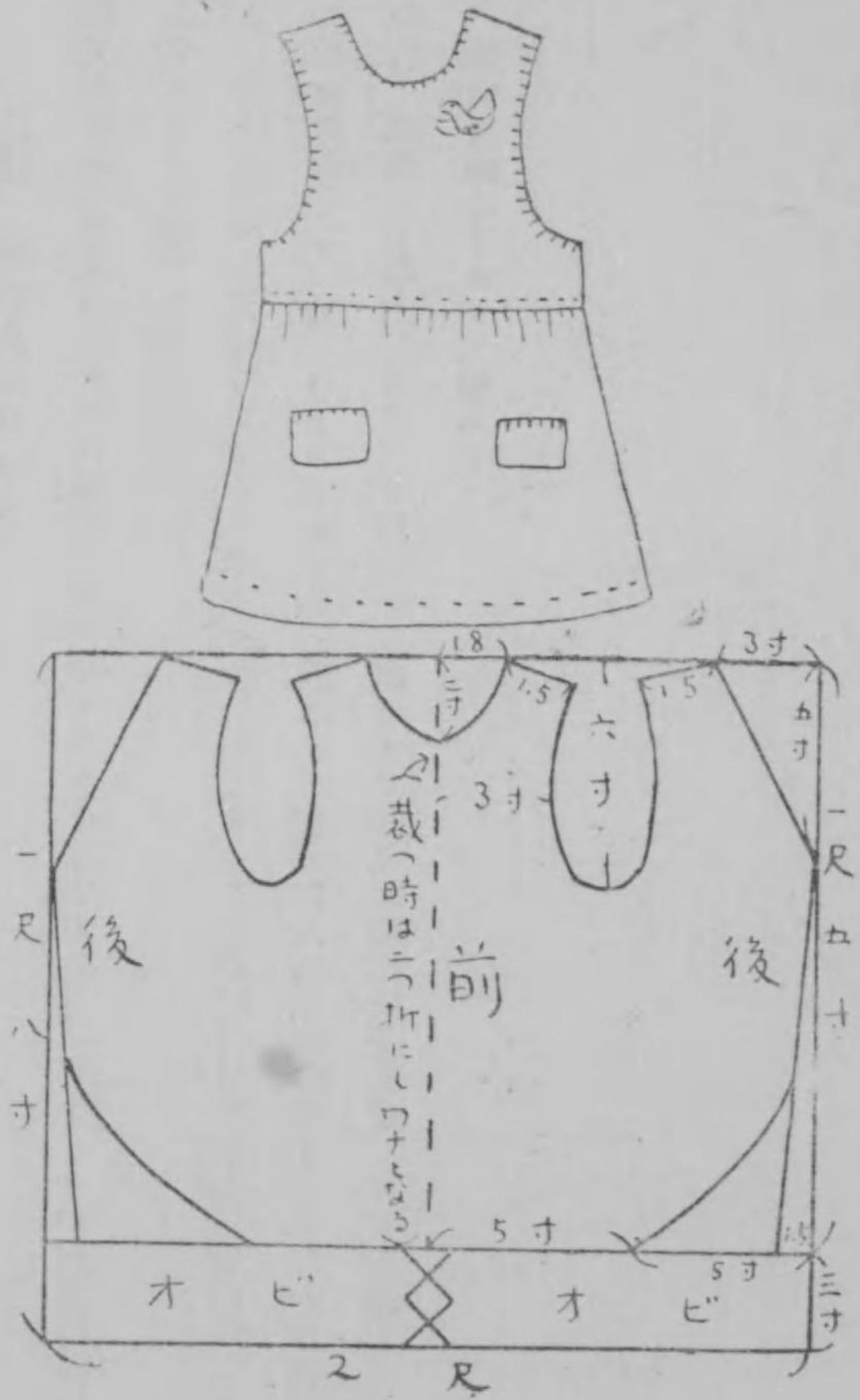
受けるが、これでは小供が可愛そうである。元々着物を汚さぬ爲めの前掛であれば度々洗濯をしてやり、又洗濯のきく様に布地を選んで用ゆべきである。

一號 二三歳食用エプロン

幼い時から食事には自分でエプロンをかける様な習慣を養はし度いものである。第一號は二三歳食用エプロンで地はキヤラコ、麻、カツラギなどがよい。キヤラコの場合は胸の處は二重し其の外の布地でも下の着物に通らぬ様に成るべく地厚の布地を選び度いものである。

裁方縫方 先づ裁方圖の様に裁ち兩横に裾折とを細く三つ折にして其上を刺繡糸でくさり縫、又は半返縫する、兩肩の所より丸みの處も細く三つ折にし、衿元は三四分幅位のテープではさむ様にして、兩端を五六寸出してまつりつける、兩脇角の處にも紐を裏につけ、出来上りの様に適宜の刺繡をすると可愛らしい。

二、四九オエプロ

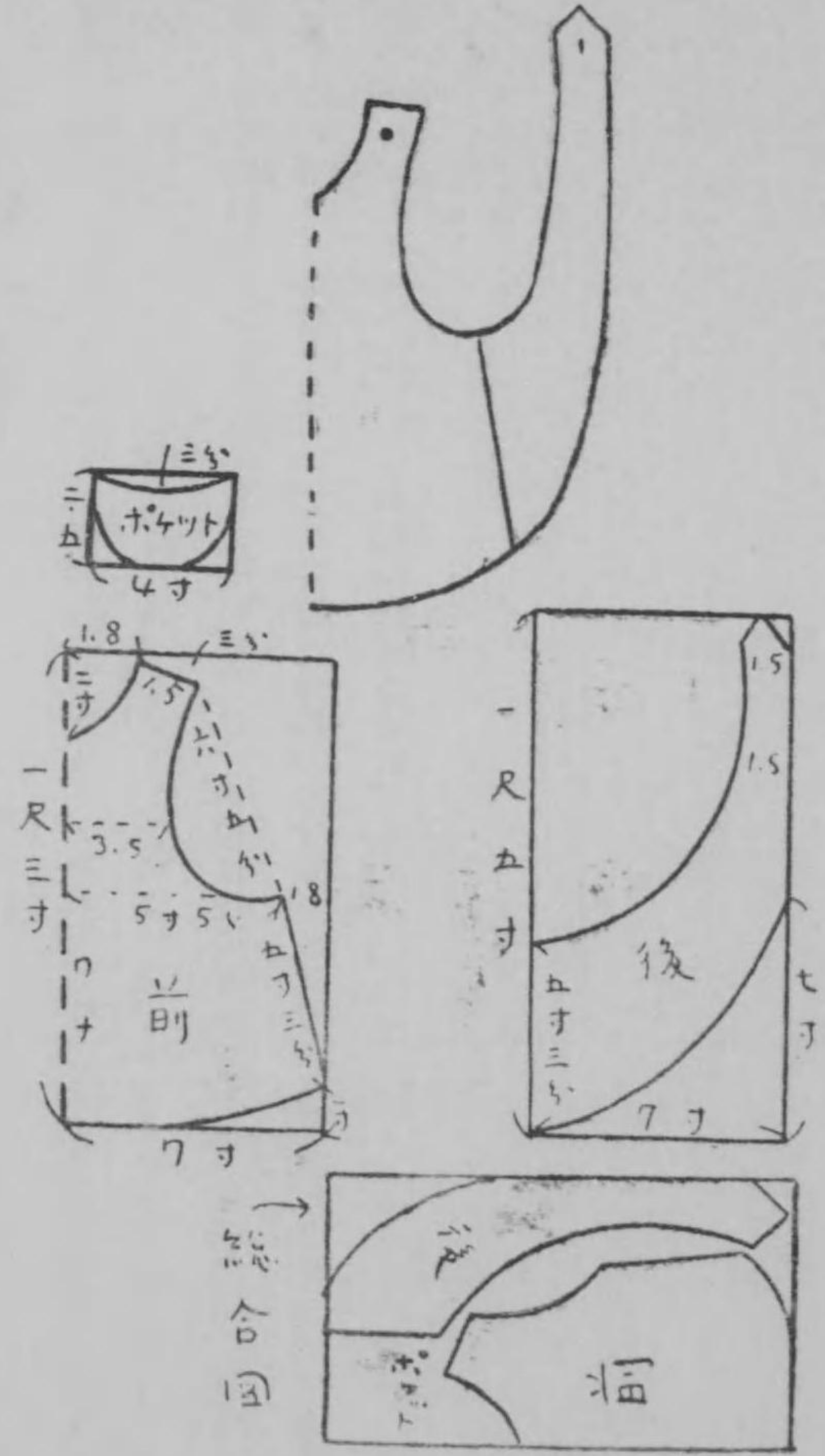


二號 四五歳エプロン

之も極簡單な前掛で用布はキヤラコ幅で一尺八寸もあれば澤山である。キヤラコの代りに白地になつせんキヤラコ等でも差支ない。

裁方縫方 先ず兩肩を袋縫にし帯も一端を山形にしてミシンをかけ、外の別布で斜目の(ビス)ふち切を用意して、袖ぐりより袷廻りから裾にかけ廻りをふち取りにして、おびを兩後の角の裏につけ、上前(右の方)角に二寸程入りた處におビ幅だけ縦に穴をあけ、おビを通して前にはまはし、適當な處をボタンで留める。

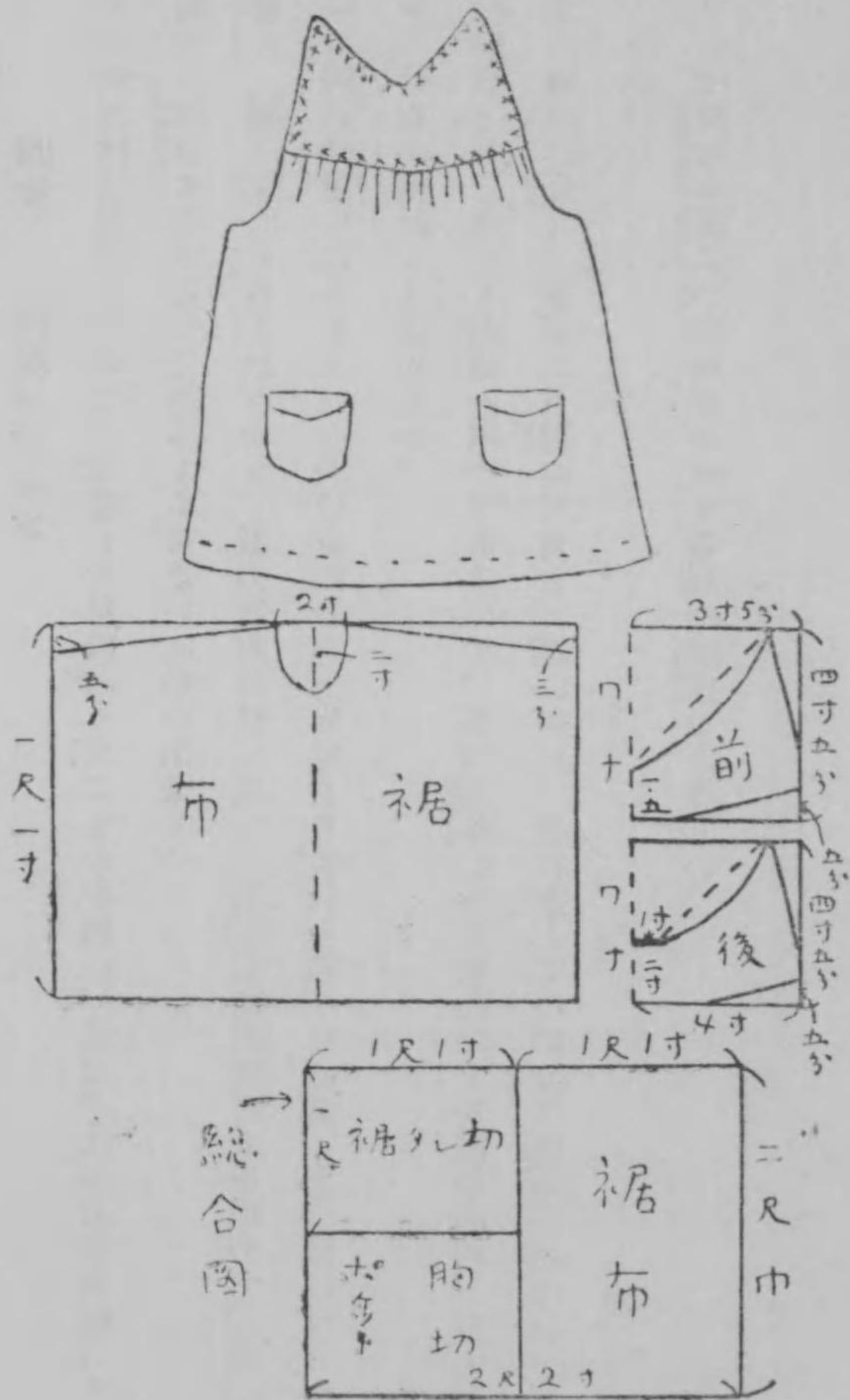
三. 四五歳エプロン



三號 四五歳エプロン

之は男兒に適當した形である、それで用布も無地ゼツバか外の地でも無地を使用するとよい。
 裁方縫方 裁方がすむと、前と同じ様に其の布地と配色のよい色でふちとり布を斜目切でこしらへおき、前後の兩肩に裏に當切を當てまつりつけ、兩脇は後の方を少し出して縫合せ、前の方に返してまつりつけ、縁取り布で全部の周圍を縁取りにする、ポケットも同様に縁取りにして前の真中につける、ポケットは可愛い刺繡を施すとよい。

四、三四才エプロン



四號 三四歳エプロン

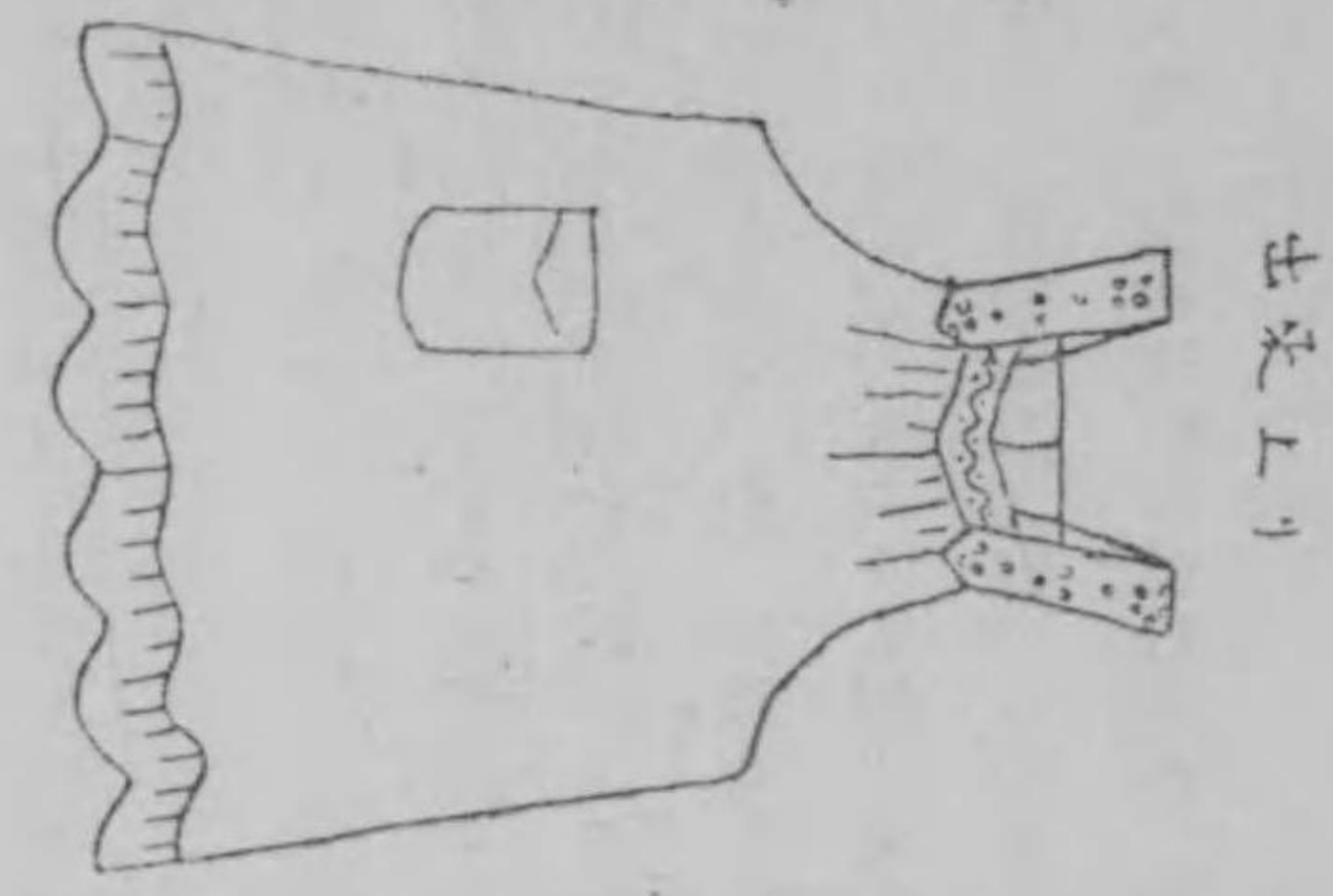
このエプロンは女兒によいので、布地も女兒に向く様なものを用ひ、夏などは薄布地を使ふとよい。裾布も割合に澤山取つてあるから可愛いものが出来る。

裁方縫方 裾は裾たし布をはぎ合せ、裾の裁方の様に裁つ。胸布も圖の様に布を取つて、先づ裾布の後ろを四五分裏に返しミシンをかけ裾折りを七分位上り幅にし脇ぐりは細く三つ折にするか身返布をつけるか何れでもよろしい。

胸布は前後とも二枚づゝ表裏を取つてあるので、其の胸布に合せ裾布の上を縫ひ縮め、胸布表裏ではさみ縫ひに合せ、兩横より肩の三角まで縫ひ合せ、表に返して中の方に折り込みまはりに飾ミシンをかける。

ポケットは裾布兩横につけるポケットの形は適當でよろしい。

五. 七八九才エプロン



廿五上

